

す、現世にありて人間生活と相接觸するものと見、神は手に觸れ目に見ることあたはざるも、然も靈と眞理とを以て崇拜すべき實在なることを力め極て闡明せんとした。即ち彼等は神は天地の主宰者にして同時に、國家社會の指導をなし給ふものなりと認め、其の神の賞罰は死後の世界に於て行はるゝものにあらずして、人間の現世生活の上を下るべきものであると認められたのである。斯くして彼等はイスラエル民族の心をして未來、幽瞑の世界よりはなれしめ、専ら現在の世界を思はしむるやうに指導し訓練したのであつた。其結果彼等イスラエル民族の良心は其神を信するに於ても、又其の正しき賞罰を信するに於ても、現世の生活と相交渉するものとして之れを考ふるに至つたのである。

然るに皮相的に此世界の有様を見れば神の賞罰は靦面に、直には來らない。或は一代、二代、三代と永き星霜を経ても、人間の正邪に對して神の賞罰は來らず、天地は悠悠乎として人生の理非曲直を知らぬ顔に運行して居るが如く見ゆる。而して彼等には善良なる民族のみが唯だ徒らに神の命令を守り、苦境に呻吟して居るが如く見え

のである。彼等は豫言者の教ふる如く只管心を盡して神の命を守つたのであるが、理想の世界は來らず却つて塗炭の苦しみに陥るのみであつた。斯くの如く目前の生活に於て大なる不満足を有する時は、人間の想像は勢ひ時代を超越し來らざるを得ない。若し東洋の或る民族の如く専ら六道輪廻を信するものならば、神の賞罰を死後の世界に求め、そこに一種の満足と安心とを得たであらう。然るに彼等イスラエル民族は今や死後の觀念を轉じて現世に持ち來したのであるから、神の賞罰と云ふことを思ふ時は、必然的に民族の將來と云ふことに想ひ到らざるを得なかつた。換言すれば賞罰は自己の來世に來るにあらず、其子孫に來るべきものと見た。茲に於てか豫言は民族の將來を語るころのものではなければならぬ。抑も民族は本來生長發達する所の生命を有してをるものである。腐敗墮落せる民族は單に自己の現在を悲觀するのみならず、其將來をも悲觀するのであるが、若し民族にして健全なる精神を有し、盛なる發達をなすべき靈能を有するならば、彼等は其の將來の運命を豫想して、一種の希望を有し自から心の躍動を覺ゆるのである。之れ恰も血氣の青年が自己の未來を想像すると毫

も異なる處はない。青年が彼の前途を考ふる時、其將來の理想は堅實なる青年に取りては豫言となるのである。其様に民族に於ても將來を理想し、其の抱懐する理想を言語文字に發表する時、其は豫言を作り出して來るのである。勿論多くの國民は或時期まで生長して衰頽に赴き、所謂盛者必衰の歴史を後世に貽すのである。イスラエル民族も亦此の例に洩れず、興敗存亡の歴史を作り來つたのであるが、しかし彼等は活ける神を信じ、神の厚き恩寵を受け、我こそは神の選民にして神の優渥なる保護が無限に吾等民族の上にと信じて居つたから、假令悲觀すべき事が起つても、神に由つて其悲觀に打ち、民族將來の幸福を想像することが出來た。こゝにイスラエル民族の豫言が生じて來る。換言すれば民族の精神を代表して、其の理想的状態を宣言するものが起つた。之れ即ち彼の豫言者である。

此の豫言者の出現に二つの時がある、一は悲觀の時代にして、他は即ち樂觀の時代である。他の言を以て云へば前者はイスラエル王國の最も亂れし時代にして、後者は之れと反對に最も治世の時である。イスラエル王國の泰平時代には凡ての國民は其の

治に安んじて只管安逸を貪ぶり、奢侈に耽り、従つて神を敬ひ正義を行ふの精神を喪ふに至つた。而して一見隆盛なるが如きも、然も其の真相を覗へば民心萎靡し、國運は危機に瀕しつゝある時代であつた。茲に於てか豫言者等は、斯く民心腐敗墮落する時は、神の懲罰は必らずや遠からずして來るべきを信じ、激越なる言論を以て民族の精神を警醒したのである。然も國民は之れに對して平然として耳を傾けなかつた。何となれば社會の波いと靜かなる時、彼等は風浪の險惡ならんとするを告げ、天氣の晴朗なるに當り暴風雨の到らんとするを語るからである。之れは彼の幕末の志士林子平などの事蹟に見ても、想像し得らるゝ事實で、彼が「海國兵談」を現はして海外諸國の大勢を論じ國民の隋眠安佚を警醒したるも、遂に入れらるゝ處とならず、空しく恨を呑んで死するに至りしと似通へるものがある。されば彼等の豫言者も亦狂人として一般人民より遇せられた。然るに亂世の豫言者は之れと大に趣きを異にしてをる。彼等はイスラエル民族が隣國の壓迫、攻略をうけて、塗炭の苦しみの中にあり、最早將來に對するの希望もなければ、抱負もなく、其の勇猛心も挫け果てたる時、我民族は斯

くの如き苦境に陥るとも、神の祐助の下に將來又必ず復興して盛なる時代は來るべしと奨励し、希望を持つて今の難境を切り抜くべきを説き、倒さるれども亡びず、詮術つくれども望みを失はずして奮闘すべきを告げ、之れを慰藉し、激勵した。即ち前者は譴責叱咤にして、後者は慰藉奨励である。之れ治世の豫言者と、亂世の豫言と其趣きを異にせる點である。然かも兩者は其根本に於ては全然同一であつて、何れも神によれる信仰に基き、所謂英雄豪傑のやうに唯徒に其時代を覺醒し、又は慰藉したのではないのである。

由來豫言は歴史と共に發展するのであつて、恰も植物に於ける萌芽の如きものである。初は苗、後に幹、夫れより枝を生じ葉を出し、遂に花を咲き果を結ぶのである。豫言も亦其の如く徐々に發展し、歴史と共に進轉するのである。然らばイスラエル豫言者の豫言せる世界は如何。彼等の理想世界は昔ながらの國體の聖化せられたるもの即ち理想的の國家、換言すれば神政體であつた。之れは即ち「神の國」であつて、其主君は神である。彼等は斯かる國を豫想し、斯かる國家の出現を待望して、夢寤にも之

を忘るゝ事が出来なかつたのである。斯くの如き國は如何にして出来るのであるか。之れ豫言者等が心血を注いで考究した所であつた。イスラエルは王國にして國王が民族を統治してをつた。然も其の國王は「神の子」として尊崇せられ、神政の執事として景仰せられた。彼等の王は王にして又祭司であつた。戦争の時は彼は戰場に出で、軍隊を指揮し、外患を拂ひ國家を安泰にし、民族をして安堵の思をなさしめた。此王は彼等に幾多の暗示を與へたのであらう。豫言者の腦裡には理想の「神の國」に應はしき理想の王が必ず與へらるゝを信じて疑はなかつた。此思想は時代によりて多少の浮沈はあるが、しかし、つまるところ理想的の王が神の國を建設するのであると考へた。イスラエル王國の歴史を見れば、寔に英明の主が現はれて、其の國を治め、國威を四隣に輝かしたる時代があつた。ダビテ王朝ソロモン王朝の如きは即ち夫れである。彼等豫言者が、是等史實に徴し、過去に於て斯くの如き名君を與へられたる吾等の爲めに、將來に於て更らに夫れ以上の立派なる王が現はれ、其人物によりて神の國が建設せられ、歴史の記録以上の理想の世界が吾等の前に開展せらるゝに違ひないと見たのは無

理ならぬ次第である。彼等は王なるメシアが出現して神の國を打建てること云ふ豫言を有してをる。彼等の謂ふ所の神の國はイスラエル國史の黄金時代、即ち國家の最高治世を云ふのであつた。神の聖旨の行はるゝ正義の國、仁愛の國を云ふのであつた。而して其國を治むるものは即ちメシアであるを見た。神の國が空前の治世であるやうにメシアなる王はタビテよりもソロモンよりも優れたる主君であり、智恵と勇氣と敬虔とに充ち満つる名君であると信じた。斯かる王が此世界に出現するは獨りイスラエル民族の光榮なるのみならず、此民族を通じて人類の幸福を増進せしめ給ふ神の聖旨なるが故に、即ち世界人類の幸福となるのであると考へた。而して豫言者の神は一民族一國家の神にあらずして、世界人類の神であつたから、彼等の考への及ぶ範圍は實に世界大であつた。

然らばメシアと豫言との相違は何處にあるかと云ふに、豫言はメシアを理想したるもの、メシアは豫言の現實化し具體化したるものである。彼等豫言者が憧憬し待望したる、タビテよりも、ソロモンよりも尊き王、即ちメシアは、之れ豫言の現實化によ

りて成就さるゝのである。此の豫言は如何にして現實化するであらうか。夫れは云ふまでもなくメシアの出現によりて成就せらるゝのである。茲にイエス出現の期待がある。然るに豫言者の待望は其の儘にして現はれず、イスラエルは愈よ亡國の非運に陥り、彼等唯一の希望であつた王家よりは暴虐の君主出で、彼等の理想を裏切つたのであつたが、夫れさへ遂に滅亡しその力であり憑據であつたエルサレムは羅馬軍の鐵蹄に蹂躪せられた。此時イエスはナザレの寒村に生長し自からメシアであると信するに至り、「我は律法と豫言を成就せんがために此世に來れり」と宣言し給ふたのである。此宣言は實に大膽なる宣言にして當時の人々は識者も學者も之れを信用せず、皆等しく疑惑の眼を以て之れを見たのであつた。然るに彼は毫も之れを意に介せず、進んで其のメシアたることを憚る所なく宣じ給ふた。イエスは如何なる思想的徑路を辿つてメシアの自覺に到達し給ふたのであらうか。之れは研究者の結果到達せられたのではない。又た多くの似而非宗教家に有勝ちの獨斷的自分免許でもない、實に神の啓示であつた。天啓によりて彼の良心が覺醒し、神を直覺し給ふたのであつた。聖書には

イエスがヨルダン川の洗禮の際に大なる天の啓示を受け給ふた事を記してをる。彼の天來の聲は一面良心の覺醒であつて、彼れのメシア意識が愈よ明確になりしことを語るものである。

然らばイエスは如何なる點に於て自身がメシアであるといふことを意識せられたのであらうか。之れは最も興味ある問題であると思ふ。舊約聖書を繙き見よ。イスラエル民族中最も清く美しき人物は何人であつたであらうか。彼等イスラエルの詩人は如何なる人物を最も尊き人格として之れを歌ひ、イスラエルの史家は如何なる人物を優れたる偉人として之れを記録したであらうか。又時代の人々は如何なる人物をイスラエル人中のイスラエル人として之れを尊崇したのであらうか。彼等の理想的人物は神の聖旨を専らとし神の聖意を奉ずるために全心全靈を傾倒する人であつたのである。而してそれが王族であらうが、豫言者であらうが、又普通の人民であらうが、政治家であらうが、其人の取れる事業、屬せる身分は問ふ處でなかつた。主眼とする處は神の聖旨を行ふの一點に存して居つた。ナザレのイエスは神を父とし、天父の聖旨を奉

戴すると云ふ點に、全心全靈を注ぎ給ふた。換言すれば神を愛する點に於て、眞にナザレのイエス以前にイエスなく、イエス以後にイエスなしと云ふべきものであつた。古の詩人が「われ天に於て誰れをか待たん、地には爾の處に我が慕ふべきものなし」と歌ふて居るが、之れ實にイエスの赤誠と共鳴する所のものにして、彼の心事は茲に盡きてをると云ふべきである。「神よ、我れ爾の旨を行はんとて來る」とはメシアの眞面目である。イエスは此精神を最も明かに自覺せられた。彼はそこにメシアの資格あるものと認識せられたのである。彼が其心に天の啓示を受け給ひし時、「なんぢは我愛子わが悦ぶ處のものなり」との聲を聞きしは、全心全靈を神に注いでをる人に對する天來の聲である。而して之れは確かに眞理である。茲にイエスのメシアたる處があり、人類の救主たる根本主義が存する。之れ即ち最も深き意味に於て豫言が人格の上に成就せられたりと見る所以である。豫言者は其の理想的人物を見出さんがために、産みの苦しみをなしたのであるが、王にもあらず祭司にもあざる、ナザレのイエスに於てそが遺憾なく實現せられたのである。之れ豫言の成就にあらずして何であらうか。

此點はイエスの見方が最も徹底して居る。豫言者等はメシアを見るに王であるとか祭司であるとか云ふ形の上に求めた。然るにイエスは是等の外形に拘泥し給はず、其の精神上に於て清く純なる所のものを取りて、自からメシアたる事を承認せられた。之れを以て見ても如何にイエスの胸中に強烈なる自覺が伴ひしかゞ察せらるゝ。

乍併之れはイエス自身の自覺であつて、一般の眼には古の豫言者が豫言したる神の國、又其の王たるメシアは未だ明確に見えて來た譯ではない。唯だ其の根本義たる精神状態がナザレのイエスの人格の中に實現してをるのであつて、社會の上には現はれて來ない。茲に困難がある。何ぞや、それはイエスの精神状態と周圍の状況とが異なることである。彼は其精神に於てはメシアの資格あることを意識して居る。しかし其境遇より見れば依然たる一個のナザレ人であつて、王として外部より尊崇されてゐる譯ではない。又神の國も地上に出現しつゝある譯ではない。乍併イエスは此困難なる問題に對しても敢て自からを吹聴して、其メシアたるの實を現はさんとし給はず、弟子達にも寧ろ此の事を人に語る勿れと戒めて時の到るを待ち給ふた。イエスが「此事

を智者達者に隠して赤子に顯はし給ふを謝す」と宣ひしは、這般の消息を語るものである。之れ多くの偽メシアと其撰を異にする所以であつて、彼等は何よりも先づ形式を重んじ、形の上に王たり祭司たらんとして焦つたから、古の豫言は成就せられずして、一敗地に塗るゝの醜體を演じたのである。之れに反しイエスは其内心の自覺より自己のメシアたるを認識せられたので、メシアの意識は我胸中の秘義として、之れを語り給はなかつたのである。此イエスの胸中に秘められたるメシアの意識は年と共に愈よ鮮明を加へ來つたのであつて、彼は即ち之れを以て古の豫言が時代を追ふて實現せらるゝのであると見給ふた。之れイエスの神國觀であつて、其真相は彼の天國に關する比喻即ち播種の比喻の如く、芥種の比喻の如く、或はパン種の比喻の如く、何れもそれが俄かに一朝にして現はるゝにあらずして、徐々に表はれ來るものなるを語るものである。イエスはかゝる神國觀のもとにメシアの意義を解釋して行かれた。其尤も重大なる一例は彼の十字架上の死である。

抑もメシアたるものが十字架上にて磔殺さるゝと云ふことは、當時の人々には如何

にしても解せられぬ點であつた。之れは豫言者等の言にも明からさまに出てない。十字架の事實を承認したる人の爲めにはこの問題は豫言の中にない事はないが、併し少くとも當時の人々は諒解する事は出来なかつた。「爾若しメシアならば十字架より下り來れ」とは豫言書を熟讀したるイスラエル民族の叫びであつた。然るにイエスは十字架を以て豫言に反するものとせず、寧ろ豫言の成就なりと見給ふた。即ち豫言者の豫言を精神的に解釋し、義人が不義者のために苦しめらるゝことを十字架と見給ふた。豫言者は義人の苦境に神の攝理の矛盾を認め、大なる苦悶に陥つたのである。從て神の正しき賞罰に疑ひを容れざるを得なかつた。遂に義人の苦は不義者の身代として受くる所の苦痛と見た。古來此義人の苦痛を歌ひし豫言は決して少くない。さらば義人の標本たるメシアは大なる苦痛を嘗めねばならぬ。即ち此身を神と人にと捧げて正義の犠牲とならねばならぬ。さればイエスは十字架は當然であつて、之れはメシアたるものゝ受けねばならぬ所のものであると見給ふたのである。「人の子は人を使ふために來るにあらず、却つて人に使はれ多くの人に代りて其贖ひとならんためなり」と。之れ

實にイエスの豫言に對する解釋であつた。義人の死に對する註釋であつた。斯る高遠なる思想は當時の人々には解られなかつたが、しかし之れこそ眞の豫言の解釋となり其の十字架は豫言の成就となつたのである。乍併死が一切の終りでないこと云ふことは豫言者も亦明言せる所である。若しイエスが十字架の死を以て終るならば、永遠に人類のメシアたることは出来ない。彼は三日にして復活し給ふた。此の復活は天上の生活に復活することである。何處までも精神的に見るべきである。戦勝者として彼は昇天し、又精神的に弟子達の心に復活し意氣沮喪せる彼等の心靈に活き、其力となりて神國建設の事業を亞がしめたのである。茲に豫言は初めて成就せられメシアは眞のメシアとして現はれ給ふた。吾等此のメシアを興へらるゝまでのイスラエルの精神的經過を見、更にそが世界人類の中に出現するに至りし史的庭徑を見る時、實に一種の雄大なる神的ドラマに想ひ到り、甚大なる感慨を禁じ得ないのである。

之れを要するに、豫言はイスラエル民族の健かなる良心の聲である。而して其良心はより高きものを翹望し、其出現を豫期して居つたのであるが、ナザレのイエスの出

現によつて其目的は達せられ、其の民族的良心を満足せしむることが出来た。換言すれば其の民族の豫言はイエスの人格の上に渾然として成就せられたのである。かくてメシアは豫言の現實化せるもの、ナザレのイエスは豫言の人格化せるものと云ふことが出来るのである。民族的良心は豫言者を産み、豫言者は其憧憬、其理想を歌ふて理想の王の誕生を準備し、其期は充ちてメシアは出現した。之れ實に世界の史實に類例なき所のものであつた、吾人の感歎措かざる所である。

メシアの出現

ヨルダン河に於けるイエスの靈的實驗、即ち「天より聲ありていふ、なんぢは我が愛子わが悦ぶ所の者なり」の一齣は、イエスの心の最も深き所に示されたる天來の聲である。此聲はイエスの心に最もよく響きたる所のものであつて、之れを今日の言葉にて云へば「大なる自覺」である。而して同時に彼に取りて之は一個の大なる問題であつた。「汝は我が愛子なり」と之れは抑も如何なる意味か。我れ神の愛子なりとすれば

我は即ちイスラエル民族の待ち望むメシアでなければならぬと。之れ實に彼の胸中の問題であつた。乍併夫れは疑義ではない。其の聲は一點疑ひを容るゝこと能はざる明確なる聲であつた、故にイエスに取りて之れは一大秘義であつて彼れは何人にも之れを告げ給はなかつたのである。之れを心に秘めてその胸中の秘義と呼應し來るべき社會状態の發展を觀察し、時代の徴候に大なる注意を拂ひ給ふたのである。この聲はイエスの理想にあらずして確信である。然もこの聲は何時如何にして實現すべきか、又何處に於て具體的となるべきか、イエスの最も心を碎き給ふた處である。何となれば此の聲は餘りに大きく餘りに清いからである。茲に於てかイエスは自己の心中に蟠まれる此の大問題を解決すべく荒野に出で給ふた。而して彼の荒野の試みに於て彼は先づ此の自覺を精神的に解決し給ふたのである。

然らば此聲に對してイエスは如何なる解決を得給ふたのであるか。思ふに彼にして天來の聲を聞き給ふたならば之れに對する彼の答へがある筈である。然るに聖書はイエスが天地の神の聲に對して、直ちに答へ給ふたる記事を示さない。而して彼は其の

後程經て其の傳道の發展を見て之れに答へ給ふたのである。曰く「イエス答へて云ひけるは天地の主なる父よ、此事を智者達者に隠して赤子に顯はし給ふを謝す、父よ然り斯くの如きは聖旨に應へるなり」と。茲に「答へけるは」とあるはイエスが何に向つて答へ給ひしか、時代の要求か時の休徴か然らず、之れはヨルダン河に於ける天來の聲に對するイエスの答へであると思ふ。こゝに「この事を」とあるは、即ち彼が多年胸中に秘め給へる秘義の一端を云つたのであらう。今之れを讀むに如何に彼の胸中の自覺と當時の社會状態とが矛盾して居つたか分る。殊に此智者達者に隠して云々と宣ひたる所には無限の苦痛がある。イエスの深奥なる胸中の秘義は此の世の智者達者には分らないのである。しかも神は智者にも諒解し得ざることを幼兒に現はし給ふ。ここにイエスの活路が開かれたのである。彼は此活路の開け行く所に希望を繋ぎ「父よ然り斯の如きは聖旨に適へるなり」と云つて、茲に彼の衷なる光を照らし給ふたのである。之はかのヨルダン河に於ける天來の聲に對する最も適當なる答へである。「父は我に萬物を與へ給へり、父の外に子を知るものなく、又子及び子の顯す所のもの、外

に父を識るものなし」と。之れ實にメシアの自覺に基ける權威であつて、其使命は自然界の中に神の國を建つることである。之れを見て吾々は天父に對する神の子の答へとして歎美するも猶ほ足らざるを覺ゆる。此故に彼は世界人類を兄弟となし「我が母、我が兄弟、我が姉妹とは誰ぞや、凡て父の聖旨を行ふもの之れ我が母、我兄弟なり」と揚言して其使命に熱中し給ふたのである。

イエスに取りて初め彼のヨルダンに於ける天の聲は非常なる驚畏であつたらう。我は果して古の豫言者が云へるメシアであるかと。乍併天來の聲は疑ふべからず、時勢の發展と偕に彼の信念は巖の如く堅く、其良心は光風霽月の如く霽れ渡つた。斯くて「子及び子の顯す所のもの、外に之を識るものなし」と聲言し給ふたのである。この父を知ることは驚くべき直覺力を示したるものにて、その光明は人類を照し、吾等も亦基督によりて父なる神を知り得ることを肯定し給ふ。「及び子の現はす所のもの」とは即ち夫れであつて、イエスの叡知は彼を信するものに分け與へらるゝのである。人類に對するメシアの使命は昭々乎として疑ふべくもない。然るにイエスは人類に對して如

何に其使命を宣じ給ふかと云ふに、天を仰ぎたる彼は再び地上を見渡して「凡て勞れたるもの重きを負へるものは我に來れ、我なんちらを息ません。我は心柔和にして謙遜者なれば、我が軛を負ひて我に學べ。汝等心に平安を得べし。そはわが軛は易く我が荷は輕ければなり」と宣ふた。之れ彼がメシアとしての世界人類に對する聲明であつたのである。

メシアは既に出現した。彼の聲明は天地の神に其の根柢を深うする所の前人未發のものである。然るに彼を目に見、耳に聞きたるイスラエル民族は彼を以てメシアなりとなし、天の父が彼を喜び給ひしが如く歡び迎へたるかと云ふにさうでなかつた。彼等はイエスを以て狂氣の沙汰となし「彼は木匠の子にあらずや」と云つて、冷笑と嘲罵とを以て之れを迎へた。之れ彼れが十字架の悲惨なる最後を遂げ給ひし所以である。此のイエスをメシアと認むることの困難は一千九百年間其の儘に續いて來た。而して現代と雖も人類の問題である。現に今日に於て一千九百年前のイスラエル人と同様、「彼はヨセフの子にあらずや」と冷嘲を加へる人々が我國にも多いのである。乍併イエ

スの自覺は天地の公道に基く大悟正覺にして、之れ實に萬民を代表するところのものである。古來多くの聖人賢哲にして、深く大悟徹底する所の人なきにあらざるも、イエスの如く清く高き大自覺に入り給ふたものはない。此意味に於て彼は人間界に於ける神の最高顯現にしてまがふ方なき人類の救主である。

由來天來の聲を聞いて起つたものは決して少くなかつた。イスラエルの豫言者モーセは其一人である。彼はシナイ山麓に羊を牧つてをつた。然るに或る草叢の中に火の燃ゆるを見て、不思議に思ひつゝ、近きしが、其火の中より聲あり「汝の足より履を脱くべし。汝が立つ處は聖き地なれば也」と、而して又聲ありて云ふ「我はアブラハムの神、イサクの神、ヤコフの神なり」と。彼は其嚴かなる聲を畏れて戰慄した。此の時彼はイスラエル民族を救ひ出すの大命を授けられたのである。又豫言者アモス、イザヤ、エレミヤ等皆異象を見て戰慄したのである。乍併是等豫言者が其使命を感ずるに至りし異象又は神の召命は、イエスがヨルダンにて見たるそれは異なつてをる。イエスの時は「天開け」とある。之れ實に空前の出來事にて大なる天啓の示さるゝ天地の景象を

物語るものである。而して「靈鶴の如く降り」とあるは如何ばかり嚴かにして、しかも平和に朗らかなる光景をいふのであらう。鶴は平和のシムボルである。空を負へる重苦しき陰雲は此時全く一掃せられ、天地は光景を一變して、メシアは茲に出現し給ふたのである。此時「汝は我愛子我が喜ぶ所のものなり」との聲があつた。之れ實に天人の合唱である。天地の神の聖旨と、イエスの良心との共鳴であると云つてよい。イエスは茲に於て天地の奥底に徹底し給ふたのである。之れ代々の豫言者や、又基督以後の賢哲の見神の實驗となる處である。彼等は神と我との間の非常なる懸隔を感じ、罪に苦しめられ、恐れ戰きて神に對してをる。モーセ然り、イザヤ然り、エレミア然り、又パウロ然り、ルーテル然りである。彼等には神人唱和の有様がない。況んやそこに共鳴はない。然るにイエスに於てはさうでない。彼は神に對して恐れ戰き給はず、又罪の苦しみもなく全く父子有親の關係である。さればこそ彼は一朝聖旨のある所を知るや「父よ然り、斯の如きは聖旨應へる也」と宣ふたのである。

天地の神と斯くの如き關係に立ち、斯くの如き聲を聞きたるものが他に何處にある

か。人類の歴史を通觀するもイエス、キリストの外一人もないのである。大哲釋迦は王者の家に生れたが、生老病死を見て煩悶措く能はず、遂に雪山に隠れて修養し、其悟得し來る處を見れば苦樂滅道の消極的福音であつた。然るに基督は全く樂天的である。彼は大工の家に生れ、三十歳までは家業にいそしみ、三十にして天の聲を聞くや、決然起つて奮闘的生涯に入つた。彼は人生を苦惱の娑婆と見ず生き甲斐ある天地と見給ふた。之れ實に彼の心事の高明にして樂天的に其情操の美はしかりしがためである。勿論イエスは此の天來の聲を聞き給ふや、我は聖旨に應へりとして直ちに起ち給ふたのではない。其間大に深慮を回し給ふたことは前にも述べた通りである。云ふまでもなく彼れは當時の宗教に通曉せられた。而して時代に對する先覺としての責任を感せられ給ふたに違ひない。乍併彼れはナザレの木匠である。四圍の境遇は彼れのメシアたるに適合しない。況んや古の豫言によれば此大命を受くる者は王ならねばならぬ。彼は王子にあらずして一個の平民である。如何にしても彼は其人でないとしか思はれない。天來の聲が明確であつたばかりに、彼はこの自覺にそむき給はなかつたのであ

らう。

然るにも拘らず、イエスは遂に「父よ然り」と答へ給ふた。之れは何に由來するか。其の一の原因はイエス彼れ自身の人格である。彼は神を救ひ之れを親愛する心事に於て、斷じて人後に落ちぬことを自信し給ふた。其信仰は一點の私心なく、其性格は玲瓏玉の如きものであつた。此の清く美はしくして神の如き心事、若しも人類の中に神を求むるならば、彼の外に何人もなき品性人格、之れは無上の尊貴なるものである。此前には此世の王も光なく、此世の權威も力なきものである。彼は茲に自が確信を置き給ふた。此の神の共鳴し得る高潔純眞の品性は、イエスをしてメシアたるの使命を享受せしめたる所である。イエスは倫理的のメシアである。而して彼は此の確信より出立して、靈の國の建設に進み給ふた。我は猶太人の王なり、されど我が國は此世の國にあらずと聲言し給ひしは、即ち精神的王國の建設と其王なるメシアが豫言者の云ふが如きものにあらざるを明かにするの宣告に外ならない。之れ實にメシア出現の意義である。メシアは偉大なる人格、高潔なる品性、義と和と聖靈の指導に基づける精

神的王國の建設者たるべきである。豫言者は之れを闡明して只管其來るべきメシアのため備ふべきであるが、彼等は地に屬ける國土の救済に忙がはしくして、思ひを茲に馳する能はず、彼の「神の國は近づけり、汝等悔い改めよ」と叫びたるバプテスマのヨハネすら、出現したるメシアに對して「來るべきものは汝なるか、我等亦外に俟つべきか」と問ふの愚を演じたのである。乍併イエスの人格は神の證明し給ふ所である。こゝにイエスの尊き所以が存する。

抑もメシアの出現はイスラエル民族の翹望であつた。代々の豫言者の理想であつた。イスラエル民族は一面には罪と不義のために幾度か亡國の姿となり、塗炭の苦みを嘗めたれど、其間常に悲歌慷慨の偉人愛國者後を絶たず、彼等は次ぎ／＼に先人の遺志を傳へて、メシアの出現を絶叫し、以て民族の惰眠を警醒した。故に人民も悲風慘雨の間になりながら尙且つ神の愛護を信じ、イスラエルをして眞に選民たるの實を現はさしむべき人格を待ち望んだ。果せる哉、彼等の希望は徒らでなかつた。彼等はメシアを得たのである。乍併出現したるメシアは彼等の希望する所とは異なつた。「凡て

勞れたるもの重荷を負へる者は我に來れ我汝等を息ません」この聲は、之れ實に猶太人の救主なるのみならず實に世界人類の救主の面目である。此聲は猶太人の或者には餘りに弱く響いたかも知れないが全人類にとりては福音であつた。故にイエスがメシアたる事は單にイスラエル民族の爲めのみならず、全人類のために大なる福音であつた。彼れがメシアとして起ち給ひしによりて、人類は希望と幸福とを得のたのである。ナザレのイエスが此の清く尊き人格によりてメシアの位を授けられ、全人類の救主として信せらるゝに至りしは、之れ實に神の光によるものである。而して彼が人類の中より擧げられてメシアとなり給ひしは、實に人類全體がメシアの意識を獲得し得るの道を開き給ひしものである。「子及び子の現はす所のもの」云々とは即ちイエスがメシアならば、彼れによりて啓發せらるゝ吾等人類も亦小なるメシアの意識に入り得ることとを證言し給ふたものである。

乍併メシア觀は當時の猶太人に取りて難問題なりしが如く、初代、中世、近世を通じての難問題である。メシアと云へば同時に國民の王である筈である。然るに基督はナ

ザレの伏屋に生れたるのみならず、十字架上に見苦しき最後を遂げ給ふた。之れは王なるメシアの生涯であらうか。之れイエスをメシアとするの第一の困難であつた。人間は過去に憧憬するものである。殊に夫れが現在の非なる時に於て然りである。當時の人心には英雄出現の渴望があつた。此の渴望はメシア翹望と結びついた。否寧ろ夫れがメシア渴望そのものであつた。彼等は羅馬皇帝、アレキサンドル、パンニバル、ダビデの如き英雄をメシアとして仰ぎたかつた。ヨセフの子なるナザレのイエスをメシアとするは選民の恥辱であると考へた。之れイエスをメシアとして受け容るゝ、第二の困難であつた。是等の理由は獨り當時の人々に於ける問題なりしのみならず、連綿として續いて現代に至り現代人の問題となつてをる。現代人も亦イエスの高潔なる人格純美なる品性を見ずして其出處系歴を見て之を救主と仰ぐ事に躊躇するのである。現代も亦神の子にして然も平民なるイエス、キリストよりも、百萬の豺貅を率ゐて天下に覇を稱するものを崇拜する世の中である。歐洲戦亂の禍因は之を意味するではなからうか。而して斯る時代にはメシアたる眞のメシアは忘れられ一種の神怪なるものを

尊崇する。之即ち見へざる神の崇拜にあらずして偶像崇拜である。現代は實に基督が勝利を得るか敗るか、かの秋である。イエスは再び十字架につけられんとしつゝある。乍併吾等を以て見ればイエスが所謂此の世の王でなかつた事は眞に人類の幸福であつた。彼が羅馬皇帝の宮廷ならぬヨセフの家に生れ給ひしは全人類の幸福であつた。猶太の貴族にあらずしてナザレの平民の家に生れ給ひしは世界人類の幸福であつた。彼がメシアのメシアたる所は王たりしにあらず、學者たりしにあらず、實は其清く高き人格品性に存する。此世に於て尤も尊きは位にあらず、富にあらず學識にあらず、技倆にあらず、卓越徹底したる清く美はしき品性人格である。神は何よりも人の品性の高潔を愛し給ふ。此世の地位、聲望は神の前には何等の價なきものである。神は人間の心靈に直入して、之れを批判し給ふ。王侯と雖も品性の下劣なるものは奴隷に劣り、平民なれども人格の高潔なるものは、天の寶座に於て此世の智者權者の上に座し得る。之れ即ち嚴かなる神の審判である。今ナザレのイエスを見るに、彼は敬虔なるヨセフとマリヤとの間に生れ、彼等の篤信なる信仰に育まれて成長し給ふた。而して

やがては父を失ひては、一家の難局に處して母を慰め弟妹を安からしめ給ふた。其の品性の純美信念の高潔と、一身を神と同胞とのために致さんとするの誠意は何人も彼にまさるものはなかつた。天地の神はイエスの此の高潔純美なる人格を認めて「汝は我愛子、我が喜ぶ所のものなり」との激賞を惜しみ給はなかつたのである。之れ人類の幸福にあらずして何であらう。彼が人として生れ給ひしは人間の幸福であるが、その王にもあらず貴族にもあらず一個の平民として生れ給ひしは實に全人類の幸福なのである。佛教徒は釋迦が國王の子として生れしを有難がつてをる。釋迦の尊き所以は其王子たるにあらず其の人格にあらねばならぬ。彼等はそこに着眼せずして、其王位をすて、雪山に入りしを徳とする。之れ實に佛教の壓世悲觀の根柢をなすものであつて此一面に執着する間は佛教は現代の活社會を指導することは出来ない。イエス、キリストは平民の家に生れ、平民として育ち、勞働者として働き、平民として終り給ふた。其相手となし給へるは民衆である。上流階級にあらずして、中流下層の社會である。之れイエスが人類の救主たる所以にして、基督教が人生生活の眞唯中に突入して、個

人を高め、家庭を清め、社會、國家を靈化し得る原動力たる所以である。

吾人は信する、此人を立て、メシアとなし給ひしは、神が限りなく人類を顧み給ふ證左である。實にイエス、キリストの出現は人類の向上進歩の初めであつた。人類世界はイエスの誕生を一期として新紀元を劃した。世界が此時を始めとして第一年とし、茲に新天地の歴史の基を置いたのは寔に當を得たることである。爾來一千九百年其間幾多の迂餘庭徑ありと雖も、基督教が個人、家庭、國家の間に勝利を占め來りつつあるは事實である。然して今や更に國家を超越する國際關係に於て基督教は一大難局に遭遇しつゝある。今回の戰亂は即ち之れが解決に向つて轉回しつゝあるものにして、吾人は國際間にも亦必ずやイエスの理想が實現さるゝ時あるべきを信じて疑はないのである。イエスの「他にせられんと思ふことは、己も亦其の如くせよ」との教訓が、必ずや國際道德の基調となる時の來るを信するものである。イエスは一國民一族のメシアではない。實に世界人類のメシアたるは上來繆説する所である。思ふに世界は「イエスよ人類は汝の聖旨に従はねば安全でない。政治家も、實業家も、教育家

も、乃至凡ての人は汝に従ふことによりて安全にして意義ある生活をなすことが出来る。汝はメシア汝は平和の王なり」として、其前に跪くであらう。之れは奇蹟によつて來るにあらず、實に全人類の要求である。世界は茲に來らねば眞の満足はない、世界は我慾のために自己内心の要求を熄すことなく、益々之れを大にし益々之れを廣くして、國際關係の上にイエスの聖旨を成就せねばならぬ。「柔和なる者は地を嗣ぐ」とあるが、イエス、キリストこそは最後の勝利者であらねばならぬ。人類の歴史は之れを證明しつゝある。

世界の光なる基督

キリストは如何なる意味に於て世の光であらうか、之れ吾等の深く考へねばならぬ點である。キリストは多くの尊き教訓を遺し給ふたのであるが、彼は其の教訓の故を以て萬世の光と仰がるゝのであらうか。山上の垂訓の如きは確かに世界を照す光である。乍併キリストにはその教訓よりも更に大なるものがある。夫れは即ちキリストの

人格そのものである。彼は「我が教訓は世の光なり」と宣はずして、「我は世の光なり」と云ひ給ふた。吾等はキリストの人格は其教訓よりも遙かに偉大なるものなるを認めざるを得ない。然もキリストが世の光となり給ひしは唯だ其の玲瓏玉の如き天啓的人格によるのではない。然らば抑も何が世の光であるか。キリストの人格は天地の創造以來、未だ曾てなき不思議なる問題となつた。換言すれば彼れが社會に對し給ひし處世の方法そのものが一個の大なる謎であつた。その處世の態度が萬人の躓石となり、従つて宇宙の疑問となつた。彼れが此の千古の大疑問を人類社會に投げ入れた事その事が、自から世界の光となつたのである。

此の大なる光は實に宇宙の暗黒を示せる所のものであつた。今若し太陽が忽ちにして其光を失ひ、世界が暗黒となるならば、そは實に恐ろしき事である。僅かに暴風のため電燈が點かないと云つてさへ、大なる不自由を感じるではないか。若し太陽が全く其光を放たざるに於ては、世界の騷擾は果してどうであらう。然も夫れは日蝕の如く、一定の時間を経過すれば又明るくなると云ふのではない。何時明るくなるかわか

らぬ、或は其儘に永久の暗黒に入るかも分らぬと云ふならば如何。實に想像するだに慘たる境涯ではないか。然るに人類が斯く暗黒に苦しみ悲歎にくれて居る時、太陽が突然その赫々たる光明を表はし來つたならば人類の喜びは果して如何。其光の尊さは以前に幾倍し世界は感謝と歡喜に充さるゝであらう。

キリストの人格は太陽の赫々たるが如く尊く熾なるものである。然るに其光明赫々たる人格が、一朝にして黒雲に閉され、其の美はしき輝きは消えてしまつた、従つて人類界は光明を失ひ、道德界は是非善惡の差別を辨へず、惡を善とし善を惡とせねばならぬと云ふ、不思議なる現象を呈するに至つた。然して彼は此の無明の間より再び赫灼たる光明を放ち萬世を照破するに至つた。之れ即ち十字架上のキリストである。而して之れ實に彼れが世界の光となり給ふた所以である。今之れを東洋の光（孔子）と比するに其の間に雲泥の相違あるを見る。予は曩頃北京に行つた時、東西の學に通曉するを以て名ある鴻銘君より、その自著を送られたが、其中の孔子論を讀んで、自分が今迄考へて居つた事に裏書せらるゝの思ひをなし、明瞭に孔子の使命が分つた。

その論ずる所によつて見れば、孔子に似た人物は聖書の中にある。しかし夫れはペテロでも、ヨハネでもない。勿論キリストではない。實に舊約のエヅラである。エヅラは大學者で、殊にモーセ律に精通せる一種の人物であつた。此のエヅラが孔子に酷似してをるのである。

孔子の時代は過度時代であつて、舊きものが破壊さるゝ時代破壊されねばならぬと唱道した時代である。而して舊文明、舊習慣を打破して新しき文化を起さねばならぬと云ふ議論を立てたのが老子であつて、之を力説高調して已まなかつたのが即ち莊子である。彼等は當代の文明を破壊して太古に歸ることが即ち新天地を形成する所以であると唱へた。然るに孔子の主張はさうでない。彼は當時の制度文物を其儘に活かさんとした。即ち時代に適應すべき政治組織を以て傳統の文明を維持せんとした。舊文明、舊習慣が悪いのではない。夫れを運用する所の制度組織に缺陷があるのであると云ふのが孔子の主張である。彼は此の抱負を以て六國の諸侯を歴訪し、文明を維持すべき制度組織を作らんことを説いたが、偶ま用ひられんとすれば反對者の妨害に遭ひ

その櫛風沐雨十有四年の遊説は全く徒勞に終り、遂に志を成さずして故山に歸つた。茲に於てか晩年彼はかゝる實際の活動をやめ、知己を後世に得るの覺悟を以て、將來治國濟民の衝に當るものは斯くの如き政治組織を作れ、斯くくの法則を立てよと、其の制度、組織、順序、方法を示し、夫れによつて國家社會を形成すべきを教へた。それが即ち彼の「五經」である。彼は此の中に於て治國平天下の雛形を説いたのである。故に後世の人は彼の提供せる圖案に基づいて國家社會を作つた。夫れが即ち歴代の支那帝國であつたのである。

之れは宛ながらにしてエヅラの事業であつた。エヅラの時代は舊き猶太國は亡び新らしき猶太國は其の基礎未だ定らざる時であつた。彼は斯かる過渡の時代に生れて、歸一する所なき思想に統一を與へんために奮闘した。彼がモーセの律法を集め、舊約の諸書を涉獵し、之れを權威として猶太國の政治及び社會に組織を與へんとしたのは恰も孔子が先王の道を祖述して、治國の法を示さんとしたのと同様である。斯くしてエヅラは猶太國に一定の規範を與へ、新しき猶太國の一切の事皆彼の教導の下に經營

せられた。曰く政治はかくく、裁判はかくく、家庭はしかく、祭政はしかく、神殿の造營はかくく、と其柱の數までも規定してをる。人生萬事細大洩らさざる、舊約エヅラ書を繙く者は何人も其用意の周到なるに驚嘆するであらう。後世の猶太國は皆此エヅラの教ふる處に則りて一切の事を行つたのである。而して幾多の盛衰興亡ありしにも拘らず、此エヅラに示されたる猶太國の社會状態はキリストの時代まで續いて來たのであつた。是等の點を比較すれば兩者は眞によく似てをるのである。殊に面白い事は彼等によつて出來た社會が何れも一の型にはまつて、ちやんと定まつて了つたことである。恰も鑄型に入れて出來上つた鑄物の如きもので、最早出來上つてしまつて、如何ともすることの出來ないものとなつた。そこには進歩もなければ發達もなく、全く動きのされぬ社會状態となつて、唯だ仕來りを傳へて行くと云ふ、死せる如き社會となつたのである。吾等はキリスト以前の猶太國の歴史と、孔子以後近代までの支那の歴史とを見て、其の附節を合するが如きものあるに驚かざるを得ない。

キリストは斯くの如き意味に於て世界の光であらうか。キリストは何等組織、法則

を提示し給はなかつた。圖案雛形を作り給はなかつた。彼には唯だ人格があつた。此の人格は他の言を以て云へば生命である。生命には雛形はない、生命は一定の組織や法則を以て律せらるゝ筈のものではない。生命は其時、其所に應じて特異の發展を遂ぐる所のものであつて、寒帯に於ては寒帯に適合せる生活をなし、熱帯に於ては熱帯に適當せる生活をなす。斷じて一樣一律を以て之れを支配する事は出來ない。キリストの萬世の光たる一面には實に斯くの如き變通自在のものがあるのである。

乍併、予が今日云はんと欲する所は此の點ではない。夫れはキリストの人格が人類社會に投じた熱火である。キリストは「我は火を地に投せんとて來れり」と宣言し給ふた。キリストと人格は靜寧鴿の如き一面もあるが、他の一面には亦火の如き猛烈さがある。彼れは其の熱烈なる人格を以て當時の宗教道德界に大火を起し給ふた。其の人格の高潮は即ち彼の十字架である。キリストの十字架は實に當時に於ける一大問題であつた。如何にして之れが解決を成すべきであるか。ペテロも之に躓き、ヤコブ、ヨハネも之れを見て倒れた。萬世の師表たるパウロも之れがためには大に惱まれた。

然りキリストの十字架は眞に難問題である。乍併彼が此の十字架を取りて死し給ふたところが實に彼のメシアたり、世界の光たる所以である。然らば彼の十字架は思想界に如何なる影響を與へしか、今少しく之れを考へて見たい。

十字架に對する凡俗の説明は、天網恢々粗にして漏さずと云ふところに立脚してをる。即ち彼は多くの人を欺ける偽のメシアなるが故に、斯る慘憺たる最後を遂げたのである、人の眼は眩ますことが出来るが神の眼は犯すことは出来ない。其の證據は彼の十字架であると云ふ。之れ當時の人々が百人中九十九人迄は考へた所である。斯る思想を有する人は今日と雖も決して少くない。斯くの如きは所謂凡俗の見にして取るに足らない。夫れよりも稍進んだ人々は、「云はゞ天道親なくよく恭しみよく親しむ」と云ふ思想である。詳しくいへば積善の家には餘慶あり、積悪の家には餘殃ありといふ考である。彼等是一種の天命論者であつて、キリストの祖先に悪人があり、其の祟りが今キリストの上に降つて來たのであると云ふ。然らばキリストの祖先は如何なる人であるか、云ふまでもなくダビテ王であり、國祖アブラハムである。故に此見方は實

際と合はない。茲に於てか斯かる論者は天道は是か非かてふ懷疑思想に陥らざるを得ないのである。若し儒教の思想を以て公平に十字架上のキリストを見ればかうなつて來る。何となればキリストは其人格より見るも其系統より見るも、一點批難すべき所がないからである。

之れは獨り儒教のみならず、舊約聖書には表はされてゐる。約百記は即ち夫れである。彼の信仰の人ヨブは徹頭徹尾自己の義を信じた。友人は、ヨブは豫言者に等しき人であると思つて居つたが、それは誤解であつて、彼は偽善者であると斷定した。彼は財産を奪はれ子女を殺され、遂には自身までも天刑病に罹るに至れるは、その偽善を罰し給ふたからであると云ひ、彼の伴侶たる妻さへも彼を厭ふに至つたのである。然るにヨブは斷じて彼等の言を肯はず、我は神と人との前に一點の邪惡をなさないと高言した。友は彼の傲慢を責めて、汝に汚れたる罪があるからこそ斯くも醜き病に罹るのであると罵つたが彼は何處までも之れを否定した。然るに此時暴風雨の中より神の聲ありて、ヨブの傲慢を責むるや、ヨブは地に伏してその無知の罪を謝し、恐れ戰

いて神の赦しを請うたのである。之れを以て見ればヨブの死によつては十字架の意義を解決することは出来ない。何となればヨブは神の前に立つて戦慄し恐懼したが、キリストは十字架の死をさへ恐れ給はず従容として天父の懷に歸り給ふたからである。ヨブに於て神は嚴かなる主人に對する僕の如く、キリストに於ては慈父に對する子の如くである。されば以上の解決を以ても十字架の意義は明瞭とならない。

或人は印度哲學に於ける因果律の如き思想を以て之れを説明せんとする。キリストは前世に於て悪行をなした、故に現世に於て十字架があるのである。斯る説明は印度人には適當であるかも知れなが、之れでは世界の人が承服しない。何となれば佛教の所謂三世の思想の如きを以ては基督の人格を説明することが出来ぬからである。基督の人格は斷じて悪因の結果ではない。若し前世があるとすれば、基督の聖なる人格は純乎たる善因の結果と斷定するより外に道はないのである。

然らば彼の美はしき神の子たる大人格が、何故に最も卑しむべき十字架の死を取らねばならなかつたであらうか。吾等も亦天道是か非かと叫んで無限の懷疑に陥らねば

ならないか。神の審判は必ずしも正鵠なるものでないと斷定し、道德界の暗黒に泣かねばならぬか。外に之れを説明するの道はないのであらうか。然り天地の開闢以來斯くの如き不可思議なる問題はない。彼の十字架は眞に世界人類の上に投せられたる、悲惨なる一大陰影である。最も神の聖慮にかなへる愛子なるキリストが非業の死を遂げ給ふ。爾は活ける神の子キリストなりと云つたペテロを初め、多くの弟子達が失望落膽して四散したのも決して不思議ではない。十字架こそは實に千古の難問題である。使徒パウロが之れはユダヤ人には躓きとなり、異邦人には愚なるものなりといつたのは尤もなる次第である。

然るに熟ら考ふる時には此の難問題はキリスト自身が之れを解決し給へるを見る。何ぞや、獻身犠牲の精神、換言すれば愛の精神である。罪惡に沈み、是非善惡を辨へざる世界人類を愛する大精神の發現之れである。基督いひ給ふ、「人その友の爲に己の生命を棄つ之れより大なる愛はなし」と。此精神の發露せるもの即ち十字架である。之れを何故に神が許し給ふたか夫れは亦極めて困難なる問題であるやうだが、キリス

トの之れにつき給ふ態度に於て、之れを窺ふことが出来るのである。神は人類を愛し給ふ。其の神の子たる我は彼等民衆のために死の杯を受けねばならぬ。「父よ彼等を許し給へ、彼等爲す所を知らざればなり」とは即ち此の心事であつて、實に人類に對する親心である。

さればキリストの精神は宛ながらにして神の精神、キリストの事業は即ち神の事業である。故にキリストの十字架は天地の神の深き聖慮に基くもの、即ち神自身が世界の救主たることの證明であると云はねばならぬ。而して父の聖旨は十字架のキリストによつて成就されたと云はねばならぬ。十字架が世界人類の光なりとは即ち此點である。何と偉大なる光明ではないか。之れ實に人類界に於ける永遠の光である。人類の審判者たる正義の神はある、然も不義と罪惡とに塗れたる見る影もなき人の子を救ふ仁愛の神は、キリストによりて初めて世界に示された。基督曰ひ給ふ「それ神はその獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり凡て彼を信する者の亡びずして生命を救はれんが爲めなり」之れ實に天地の神の衷情にして眞個人類の神である。キリストは此の神

を「アバ父よ」と呼び、其父なる神の聖旨を成す事に熱中し給ふた。之れ實に新しき光、新天新地の太陽である。此の光は唯だキリストの十字架にあるのみで外の何處にもない。此の意味に於て彼は世界の光である。予は近頃「天啓」と云ふことに就て考究を重ねてをるが、世に是程大なる天啓はない。キリストの十字架は愚かなるものには躓くもの、神に背くものには暗黒であるが、神を信じ神に従ふものには永遠の光明である、世界に之れ程有難いものはない。

斯くの如く天地の奥底から吾等人類を照らす光明が表はれて來た。吾等は此十字架のキリストを仰いで深遠なる神の聖旨を知ることが出来るのである。ヨハネは僅かに一言を以て此の深遠なる眞理を云ひ表はした。夫れは「神は愛なり」と云ふ一句である。世に之れより尊い言葉はない。此愛の神は十字架によつて表はされた。此十字架の光によつて人類社會は初めて晝となつた。天地宇宙は初めて光明を得た。此の光は如何なる罪惡の世界も之れを照破せざるはない。イエス宣はく「我は世の光なり、我に従ふものは暗き中を行かず生命の光を得る也」と。實に至言である。

永遠の救主なる基督

馬太傳を繙けば其の初めの所に基督の系圖が記されてある。此の系圖は吾々に左まで興味深いものではないのであるが、猶太人が之れを讀む時は、實に感慨無量と云はざるを得ないものがあらうと思はれる。何となれば基督は彼等の系統に屬し、彼等と歴史を同じうするのみならず、實に同祖同族たらざるを得ざることが彼等猶太民族の要求であるからである。若しも基督が希臘人であり、又は羅馬人でありしならば、基督は少くとも猶太人の眼にはメシアとしては映じないであらう。換言すれば猶太人に對してはメシアたるの資格はないであらう。されば此系圖は彼等猶太人に取りてはなくてはならぬ所の寶典である。此系圖によりて見れば基督はアブラハムの子孫にしてダビテの裔である。即ち猶太の王族にして彼の國に於ける最も高貴なる家柄である。此王族の血統をうけて基督が生れ給ふと云ふことは、昔より多くの豫言者が高唱した所の事柄である。故に馬太傳の系圖は猶太人のメシアに對する凡ての要求を満足せしむ

ることの出来る所のものである。基督の本來の人格より論ずる時は、かゝる系圖の如きものは之れ實に過去の遺物にして何等價值ある者ではない。基督はその人格其のものに無限の價值があるのであつて、此の點より見れば彼がアブラハムの子孫であらうがタビテの裔であらうが、或は又名もなきナザレの木匠ヨセフの子であらうが、敢て問ふ所ではない。されば予は今茲に其の系圖に就て述ぶる必要を見ないのであるが、しかし仔細に之れを繙けば、そこには驚くべき事實を見出すのである。夫れは其の中には獨り猶太人のみならず異邦人も亦淺からぬ關係を有する事である。彼のルツの如きはモアブの女である。外國人が基督の系圖の中に其名を列することは、人をして一種の驚異を感せしむる事ではなからうか。殊に注意すべきは基督が一個人の、誰彼の所有にあらずして、民族の所有であることである。猶太人の習慣によれば彼等は個人の名と、民族の名を一所にしてをる。例へばヤコブてふ名は、一個人の名でもあるが同時に亦一民族の名である、又彼のヨセフも一個人の名にして時には支族の名に使用せられてをる。彼等の間には個人の名と民族の名を同一視してをる場合が多い。其の

如く基督は個人としてはナザレの一平民であるが、家柄から云へばゾビテの裔にして又た民族から云へばヤコブの血統に屬して居る。而して更に廣い意味に於てはアブラハムの系統を引いてをらるゝ。この家柄、この民族、この系統を離れては基督は分らないのである。此のアブラハムの系統は宗教上尊き系統であつて、現代世界に於て唯一神教の根柢に立てる、最も高尚にして最も倫理的なる三大宗教、即ち基督教、猶太教、及び回教が共に此のアブラハムの子孫から發生してをることは否定し難き事實である。故にモーセもマホメットもナザレのイエスとは深い關係ある親類、同系同族の人である。

又路加傳を見れば、そこに同様の記述がある。馬太傳の系圖と大體に於て同一であるが、段々と讀み行く時は路加傳に於ては基督の祖先をアブラハムで止めてゐない。更にセムに溯り又幾十代を溯つてアダムに達せしめて居る。之れは人類の系譜として眞に偉大なるものである。世界の人々が系圖を記録するに當り、此處まで行つたものは未だ曾てない。大抵は自分の家祖、國祖にて止まる。然るに路加傳の記者が人類の

祖先はアダムであるとなし、世界人類の祖先が即ち基督の祖先なりとなせるは其の意味實に深遠である。然り基督はユダヤ人、ヘブル人、セム人にあらずして、人類の高祖たるアダムを祖として居らるのである。故に基督を論ずるには其の根據を人類に据えてかゝらねばならぬ。

之れを要するに基督の系圖は吾等に深き暗示を與ふる。夫れは基督が此の系圖に一新紀元を畫して新人類の祖となり給ふたことで、恰も人類の第一祖なるアダムが罪ある人類の祖先であつた如くである。基督の出生までは人類はアダムの子孫であつた。夫れが基督によりて一新紀元を畫せられ、基督は人類を罪より救ひ、罪なき人間の祖先となり給ふた。之れ基督が人類の第二祖たる所以である。罪は神より出でしにあらす。罪は神の中にあるものではないから、世界に於ける罪惡は神意に悖るもの、當然滅ぶる筈のものである。されば罪の人は遂には亡びる、さうして罪なき清き人が現はれて來るのである。ナザレのイエスの系圖を見れば、之れは一面罪人の系圖である。而して基督も一面より云へば其系統を引き生れ給ふた。而して罪なき人類の新紀元

を樹て給ふたのである。故に基督の人類に對する關係は廣く且つ深い。彼は低き罪の人とも密接なる關係あり、同時に罪なき高潔なる人間とも亦深い關係がある。げに基督は罪人の友であり、且つ救はれたる清き人の友である。而して此關係は神の國が成るまで永遠に繼續する、之れ吾等が彼を仰いで永遠の救主となす所以である。若し馬太路加の云ふ如く、基督がアブラハムの裔、アダムの子孫であると云ふことなれば、基督は當然人類の仲間である。併し又現在の人類が罪を犯して亡び、新なる人類が生るゝとの望みから云へば基督は新人類の祖先である。何故なれば罪惡は亡び新しき人類は永久に生くる事が神の經綸に應ふからである。故に基督は遠き過去と遠き將來とを一貫する所の永遠の人の子である。

約翰傳に於ては基督を説くに人類の系圖を以てせず、直ちに「太初に道あり、道は神と偕にあり、道は即ち神なり」と云つてをる。此の「太初」は無窮永遠を意味する。太初に道ありは無窮に道ありと解すべきである。此道は神と稱することが出来る。此道は目に見ゆる星辰の世界よりも舊い。若し宇宙が永遠なれば道は夫れ以上である。何

となれば萬物之れに由りて造らる、造られたるものに一として之れに由らで造られしはなしと有るからである。此の森羅萬象を造りたるものは即ち道である。更に約翰傳記者は基督と道との關係を叙して「それ道肉體となりて吾等の間に寄れり、吾儕其榮を見るに實に父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理とに充てり」と云つてをる。之れによつて見れば基督の系圖は宇宙的にして、人類の未だ此世界に顯はれざりし以前に發してをる。從て其計數は吾等之れを數ふるに術なきまでに永遠無窮である。天地の出現以前に溯つて之れを思はねばならぬ。そこに道があつた。其道は神と共にあつた。否神の中にあつた。夫れが段々に宇宙に現はれ、地球に表はれ、永遠の準備を経て、遂に肉體となり人間の間に寄り給ふた。之れ即ちナザレのイエスである。

斯く見る時は無限永遠の靈が基督となりて現はれたのであると云ふ譯になる。此道てふ言辭にあてはまる語はもと獨逸にも英國にもなかつた。之れは希臘語のロゴスでルーテル之を獨逸語のウオルトに譯し英國に於て又ウオドと譯した。我國に於ては聖書翻譯の當時之れを言靈と譯した。「太初に言靈あり、言靈は神と偕にあり」と云つた

ものである。或國學者は此一句に心惹かれて聖書の研究に熱中し、遂に基督教を信するに至つたと云ふ逸事もある。此道は意義深遠にして一朝の説話のよく之を盡す所でないが、一言にして云へば吾等の使用する言語と、吾等の内の生活の關係によく似通ふものがある。吾々の言語は吾々の目に見えぬ靈、吾々の思想、吾々の感情を如實に發表して他に知らしむるものである。言語によらざれば吾等は互に何を思ひ何を考へつゝあるかを知る事は出来ぬ。しかし吾等の内面生活は混沌として迷霧の漂へる如きものかと云ふに斷じてさうでない。明確にして秩序あり力ある極めて合理的なるものである。それが言語となつて表はれて来る。吾等の喜怒哀樂、希望、欲求、皆な言語によりてさながらに人に諒解せらるるのである。其如く神は聲なく形なく、眼見る能はず、耳聞く能はざるものである。然も神は暗黒でない。混沌として游離せるものではない。神は光明である神は活ける力である。光明の力である。神は靈なれども不思議でない。神の中に潜み居る道は表式を取つて表はれて来るべきである。夫れが現はるべき光明、表はるべき生命現はるべき力である。しかし夫れ自身神である。其の力

にて天地が造られた。其道は單なる觀念でもなく又理性でもない、實に生命である。約翰傳の記者が「之れに生命あり此の生命は人の光なり」と云ひしは實に至言である。されば吾等人類の衷なる良心、理性は此の道の賜物である。此道は永き／＼準備の下に曙光の如く人類の中に現はれ來り、降つて人間歴史の上に織りなされた。彼の大哲ソクラテスの如き眞に立派なる人格にて、道の賜物を多分にうけて居つた、故に「基督以前のクリスチャン」と云はれた。此の意味より見れば釋迦孔子の如きも亦基督以前のクリスチャンであるといはねばならぬ。此の尊き道が時代を追ふて段々と現はれ來り、遂に人格となりて吾等の間に宿つた。吾等其人格を見るに眞に美はしく神々しくて神の生み給へる獨子と讚歎する外はない。吾等は神を求め憧るゝ方面より云へば基督の嘉言善行は眞に尊いものである。乍併吾等はメシアとして唯だ夫れ丈けでは満足することは出来ない。又人物崇拜の上より見れば彼の人格には古今に冠絶する高潔偉大なるものがある。彼は眞に立派なる猶太人の模表であつた。彼れが現はれし時、多くの猶太人は之れを知らなかつたが、彼の死後今日に至るまで、彼等はヘブル人の

中に斯かる偉大なる美はしき人物なしと云つて居る。夫れ程に彼は猶太人の中に崇拜されてゐる。彼の猶太人は現代世界に於ては一種侮蔑の眼を以て見られて居るが、然も猶太人程偉大なる人種はない。見よ彼の大哲學者スピノザは猶太人ではないか。有名なる歴史家ニヤンデルは猶太人ではないか。大音楽家メンデルゾーンは猶太人ではないか。近代にては英國の大宰相ビーコンスウイルドは猶太人である。大富豪ロスチヤイルドも猶太人である。佛國の哲學者ベルグソンも猶太人である。其の他學者宗教家、政治家、文豪、實業家等、世界の各國を通じ、時代の古今を温ぬる時は、如何に多くの猶太人が社會有数の地位をしめてをるか。況んや基督時代の偉大なる使徒、又その以前の偉大なる豫言者をや。然も此の中にありて最も高く最も清く秀でたる大人格はナザレのイエスである。然らば吾等は基督が猶太人中の猶太人てふ事を以て満足することが出来るか。吾等の信仰は然りと云ふことを許さないのである。

又人類の間表はれし宗教家道德家、即ちソクラテス、マホメット、孔子、釋迦の如き人物の中に於て基督は尤も卓越せる第一人である。婦人の地位を向上し婦人をして

男子と對等の地位に引上げたる點のみを以ても、基督は他の宗教家の追隨を許さない。孔子、釋迦、其他東洋の賢哲は皆婦人に對して差別的觀念を以てをつた。基督は男子も女子も共に神の子として待ち給ふた。此點に於ても彼は嶄然として諸宗教偉人の上にあるのである。然らば斯く歴史的に温ね來つて彼の人格の絶大なるを知り、人類の最高模範として尊敬することによりて吾等は衷情の満足を買ひ得るのであるかと云ふに是亦然らずと答へざるを得ない。さらば何ぞ、吾等の衷情は活ける神を慕ふ。人たる基督如何に美はしくとも、吾等の最後の目標は父なる神である「我に神を與へよ」この衷心の喚叫である。新英洲の大宗教家ブシネルは神學上の大問題たる基督論に逢着した時に云つた。「我は理性に於てはユニテリアンの主張を喜ぶ。しかしわが衷心の要求は斷じてそこにない」と。彼は苦悶した。彼の要求から云へば三位一體の信仰が満足を與へる、しかし理性は之れに満足しなかつた。彼は兩者の板挟みとなつて苦しんだが、遂にユニテリアンに行かんとした。しかし結局彼は止つて心情の要求に従つたのである。基督が神か人かてふ名題は俄かに論定すべき問題ではない。之は何人も苦心

する所である。ブシネルに見るも彼は理性に於ては基督が人でありたい。しかし彼自身としては神が欲しいのであるが、ユニテリアンは彼に立派な人物たる基督を與へて神を與へない。基督を人とすれば我が理性は満足するが、それでは神は遙か彼方に去つて我は無縁の衆生となるのである。我は神が欲しい。故に我は基督を神なりとする。之れブシネルの信仰である。而して之れは實に人類の衷情を告白せるものにして、予はブシネルに對して無限の同情を表せざるを得ない。

乍併基督が神のみならば吾等の靈は永遠に救はるゝ途はない。吾々の靈は更に深き所に行かねばならぬ。吾等は「道肉體となりて吾儕の間に寄る」てふ處に到達せねばならぬ。基督に於て道は表現せられた。吾等は道が宿れる肉體を認めねばならぬ。茲に宗教的情緒の満足がある、之れ吾等が基督を信する所以である。此議論を解決せんとしてアポリネオスが云つた。「人間には三つの要素がある。靈、生、身である。然るに基督の生と身とは人間の生と身とであるが靈は「ロゴス」であり無限永遠の神靈である。故に基督は神であると云ふのである」と。然るに此議論に對し三位一體論のチャンピ

オンたるアタネシアスは反駁を試みた。曰く「此議論は人間の宗教心を満足せしむる事は出来ない。吾等の願は人が救はれる事である人間が人間として救はれる事である。吾等は人たる所をなくしても救はれたくない。基督の身と生のみが人間のそれにして、その靈が神ならば基督は完全なる人ではない。基督が完全圓滿なる人でなければ人類は救はる縁はない。故に人間の宗教心を満足することは出来ない。吾々は神を欲するのであるが、併し自己を滅却してまで神になりたくはない。而して之れは人間の救はるゝ所以ではない」と實に徹底せる卓論である。東洋の宗教家の神に救はるゝとは人たる性格を捨て、神に没入する事である。東洋宗教にては個我の明確なる存在は禁物であつて、宗教の妙趣に入るには個我を捨て、大我に融合するにあるのである。基督の主張はさうでない。基督教に於て救はるゝとは人が人ながらにして神性を享有する事である。人たる資格には微動をも來さず人其儘にして神の子となることである。

さればこそ吾等はヨハネの所謂「道肉體となる」てふ信念を抱き、吾等も亦基督と共に人にして神たり得るのである。之れは議論を以て究明することは極めて困難であ

るが、吾等内心の要求は之れを動かすことが出来ないのである。其要求には二の方面がある。夫れは即ち神が欲しいと云ふこと、人たる性を無くしたくないと云ふ事である。吾等は神の中に融合し消滅することは出来ない。我を亡ぼすは我が人格を亡ぼすことであつて切言すれば生命を喪失することである。基督も「人若し其生命を失はば全世界を得るも何の益あらんや」と宣ふた。吾等は神になりたいが、人たる所を失ふは永劫の悲みである。基督の性格を見るに彼は人にして神、神にして人である。之れが説明は容易の業でないが、吾等の信仰は動かない。而して基督にして永遠の道の宿り給ふ人ならば、「われ吾父に居り、汝等我に居り、われ汝等に居る」と宣ひし基督の枝たる吾等も、基督の意識の根本たる「神の子」の性格を獲得することを得る。此神の子の性格は即ち神と同じ性格である。質の差でない量の差である。思ひ見よ、吾等の中には親先祖を超越せる高尚雄大なるあるものを持つてをるではないか。之れ實にクリスチャンの實驗するところである。

吾等は恰も基督が此の人類を超越せる神の現はれであるが如く、吾等の中には基督

を信すると同時に、清く尊き靈が自覺せられて来る。夫れが即ち「神の子」である。此神の子は永遠の性格を有するものにて死と共に亡びざる不滅のものである。而して之れ實に人格の理想である。之が基督の中に存する。之れは人を蔑視したものではない。吾々は神の子となりて初めて人の子が完成されるのである。神の子の高き性格に入れば入る丈け、人の子の本來の面目が發揮せらるゝのである。神になる時、人たる所は益々輝いて来る、換言すれば基督に似て来る。「榮に榮て愈優りて同じ姿に變るなり」とは即ち這般の消息である。吾等はアブラハムの子、タビテの裔なる基督が、更に飛躍して、人類を超越せる「道」の表現たる基督となるを見る時、人の子たる基督を見失ふのではない。道の表現たる基督は一面依然としてアダムの子孫たる基督である、神の子にして人の子である。ヨハネは之れを明かに唱破してをる。曰く「吾儕が聞き、又目に見、懇切に觀、わが手捫りし所の者即ち元始よりありし生命の道を爾曹に傳ふ」と。之れ空なる理論でなく、現實の高潔なる人格を指すのである。人類に於ける神の最高顯現たる基督を指すのである。

斯の如く神は人の子の人格を滅却し給はない。寧ろ之れを完成し給ふのである。人間は神に依らずして其の人格を完成せんとするも、斷じて之を成就することは出来ない。神によりてのみ之れを完成し得るのである。眞に神の子たらずんば斷じて眞に人の子たる事は出来ぬ。之れ基督の示されたる眞理である。基督教は此眞理に立脚する福音である。基督彼自身の人格が即ち此の永遠の人格であるが故に、その人格はそのままにして即ち永遠の福音である。神がアルハであり、オメガであり給ふ如く、神の子たる基督は宇宙の初めより存し、遂に人類に體現し、人類の中に活き動き、永遠に人類と偕にありて天の聖旨を地に成し給ふ。基督は實に永遠のメシアである。

後 篇

動的 宗教

永遠の希望

クリスチャンの生活は望みの生活である。而して其望みは日に／＼新しく、何時までも已む時はない。一の希望が遂げられたかと思ふと又忽ち他の希望が與へられる、其希望が遂げられたかと思へば、更に又後から生じて来る。而して夫れは同じ望みではない、前の望と後のそれとは違つたもので、更に高く尊い望みを以て進み行くのである。吾等の信仰の土臺は斯くの如き望みを起すべき筈のものである。ユダヤの歴史家が舊約書の始めに於て世界の創造を描き、「神天地を作り給へり」といつた。之れ實に古今人類の望の源たる大思想である。吾等の目に見ゆる現實の世界、大空に燦爛た

る星の世界、一面より之を見れば同じ事を繰り返して居るやうである。見よ春去り夏来り、秋去り冬を迎ふれば、又春来るではないか。月も星も太陽も年々歳々、同じ軌道を行き、未だ曾て異象を現はさない。斯る繰返しの世界観には吾等クリスチャンの持つ所の希望は生じない。夫れは所謂吉凶禍福は糾へる繩の如しで、進歩もなければ退歩もなく、只同じ事象が、繰返し繰返し行はれて行くを見るのみである。そこには何の希望もなく生命もない。處が此の世界は神が作り給ふたと見る時は、其人の世界観、宇宙観は根柢から變つて来る。如何にして神が世界を作り給ひしか夫れは分らぬ。之れは其の時代々々の人智の範圍で説明せらるべきものであらう。唯だ其根本に於て世界を神の作り給ひしものと見、世界以上のものが、世界の創造者であると云ふ事は、人類にとりて寔に有難い據である。之れは實に吾々の宗教的要求を満足せしむる所のものである。

又新舊約書殊にイエスの生涯に表はれたる彼の奇蹟は寔に荒唐無稽なことの様であるが、之れを宗教的に見る時はそこに無限の意味が存する。何ぞや夫れは時々刻々、

同じ事柄を繰り返して、之れ以上若しくは以外には何物もなしと、自然界を観る人々に向つて、現に繰返しつゝある以外の事柄が自然界に存し、自然以上の力が自然界の奥にある事を警告するものである。同じ事を繰り返へして、夫れに馴れたる人々の睡眠を醒まし、現實の世界に超越して自然界以上のものを創造し得ることが出来ること、光明を人類社會に投射するものである。古より深く奇蹟の尊信せられ來つた眞意は、奇蹟そのものを信するにあらずして奇蹟の奥に潜める神を信するにあつた。基督教徒が奇蹟を重んずるを以て直ちに迷信なり妄信なりと誹譏するが如きは、此の意義を諒解せざるもの、皮相の見である。若し奇蹟其ものを信するだけならば、夫れが二度となり、三度となり四度となれば見慣れ聞き慣れて有難くなくなる。乍併其の背後に天地の神を認識するに於ては假令七度を七十倍するにせよ、夫れは寔に尊く有難い。而して其奇蹟が其時代の智識と符合せざるにもせよ、彼等は夫れによりて一の暗示を受け、更に高きものを見るの楷梯となすのである。故に若し一層高き天地の眞相を見出すに於ては、曩の奇蹟の如きは何も苦にするに及ばない。斯くて奇蹟を通して、神を

認め、神の恩愛に親しむに至るのである。されば奇蹟は何を教ゆるかと云ふに、世界は同じ事を繰返すものでない、天地には神あり此神は自然界の現象を破つて來り、不變の世界を超越して來ると云ふことを等人々類に示すものである。斯の如く神を信じ靈能の偉大を信する人は決して、過去現在の状態を以て安んじない。吾人の衷なる力と、天地の主宰者なる神の力が相觸れて一大希望を生じ、常に現狀を打破して、將來に伸びんと欲するのである。試みに初代の基督信徒に見るも、イエス、キリストの如き、寔に尊い空前の大人格なるにも拘らず、彼等が其過去のキリストを見て、之れに満足したかといふに、決してさうでなかつた。彼等は寧ろ將來のキリスト即ち再來のキリスト、榮光のメシアの來るを待つた。既に逝きしイエスに安んぜず、將に來らんとするキリストを望んで生活した。又彼等はキリストによりて舊約の豫言者も、ギリシヤの賢哲も受けなかつた尊い教訓を授けられた。然るに彼等は其教訓を金科玉條として昔の人にも與へられなかつた教訓を得たるに雀躍し、只管に之れを遵奉するを以て能事了れりとしたか、否々彼等は更に尊いもの、授けらるゝを待つた。「我なほ爾曹に

語るべきことあれど、今なんぢら曉ることを得ず。されど彼即ち眞理の靈來らん時、爾曹を導きて凡ての眞理を知らしむべし云々」と。之れ實に希望を將來にかけたる言である。基督は神の國は爾曹に近く、汝等の中にと宣ひたれども、之は神の國が地上に建設せらるゝ曙光を示し給ふたものであつて、その完成をいひ給ふたのではない。故にクリスチャンは神國建設の希望を遠き將來に望みて奮闘し來つたのである。此の遠大なる希望なくんば神國建設の事業は失望と蹉跌とに終る外はないであらう。

又クリスチャンは基督を信じ、神の恩愛に觸れて其罪は赦され、心氣は爽快になつた、神の靈能により心は生れ更つて以前の人でない、眞心より神を慕ふ心になつたといつて、夫れで安んずるか云ふに、決してさうでない。「神の子なり、されど未だ現はれず」と云ふ如く、吾人の實驗は更らに前途を望んで、向上せんとするのである。我衷なる清き靈性はいよゝ益々神に近づくを實驗し、決して現狀に安んじないのである。斯くの如くクリスチャンは常に希望に生きてをる。此希望は時代に從て新らしくなるのである、基督の時代は舊約の希望が新にせられた時であつて、更に基督の復

活は其の希望を新にせられたところのものである。而してペテロよりはパウロ、使徒時代よりは教父時代と段々希望は新たになり遠大になつた。斯くの如く時代々々により時勢の變遷に觸れてクリスチャンの希望は常に新たになつて來るのである。

我國に於けるクリスチャンの實驗は、未だ甚だ淺い、六十にならぬ予も最も古い者の一人たるを思へば我國に於ける基督教の生活は先づ四十年を閱したるものと見るべきである。乍併此短き信仰の歴史に於て基督教が日本人に何を與へたかと云ふに、夫れは「望み」を與へたのである。之れは誠に顯著なる事實である。君はクリスチャンとなりて何者を得たかと云はゞ答ふる所の一には「望み」が與へられたと云ふであらう。希望が與へられた、之れは日本人に於て新しき實驗である、其希望は自分自からにあるのみならず、自分の周圍にもあり、天地の間にも充滿せるを見る。之れは寔に尊い實驗と云はざるを得ない。此希望は天地宇宙を支配せる神と結ばる結果である。同じく神の子にして同胞なる人類と結ばる結果である。之れを狭く云ふならば天祐裕かなる日本國民と結ばる結果である。吾等が日本の様な國家と結ばるのは眞に有難い

こと、云はねばならぬ、若し吾等が、ポーランド人であり、アルメニヤ人であり、又トルコ人であつたならば如何。吾等が日本人として生れしは寔に感謝すべきである。吾等が此國民たることは、吾等の望みを強める所以である。乍併若しも日本國民が其望を完成することが出來ず遂に亡國の悲運に際會した時、クリスチャンの希望は國と共に消滅してなくなるかと云ふに、さうでない。亡國の悲運は苦痛には相違ないが、吾等は尙ほ一道の光明を認めて進み行くことが出来るのである。假令ば彼の猶太民族の末路である、彼等が活きて居る中に國は亡びた。世界の歴史に於て猶太民族程慘憺たる亡國の悲痛を實驗したものはない。然らば彼等は國と運命を共にし、遠大なる希望も一敗地に塗れて又立つ能はざるに至つたかと云ふにさうでない。彼等は更に高遠なる希望を抱いて其國を去り世界を我家とした。現に猶太民族は世界の大きな勢力である。大羅馬帝國の敗滅を目の當り見たるオーゴスチンは榮枯盛衰の劇しさに人生の無常を感じて悲觀したか、否な彼は更に大なる天地を見地上に於ける榮光の「神京」を望み見て、何等失望するところはなかつた。彼は即ち神の中に己が信仰の土臺を据

え、此の悲劇を通して神の榮光を望み見たのである。

人類の歴史は一面より見れば殺戮の記録である。太古より今日に至るまで、人類は互に相戦ひ相食みて盛衰興亡の跡を残してをる。之れは吾等が舊約を見るも、支那の歴史を見るも、我日本の古事記日本紀以來の歴史を見るも、直ちに感ずる處のことである。而して吾人は文明の今日目前に於て又慘憺たる戦争を見てをるのである。一面より見れば人類は同じ事を繰返してをる様である。或人が、「智識は進むが、道義は進まぬ、此の儘で行つたら人間は自滅するであらう」と云つたが、さう思ふのも一理ある。基督時代のユダヤ人が奸悪なる此世は神の審判の下に自滅して、外の世界が表はるゝであらうと、世の終りを信じたのは即ち之れである。乍併此世は彼等が期待する如くしては終らなかつた。彼等の信する如き神の審判は來らなかつた。今日と雖も亦然りである。今日此世界が復興し、眞に理想的なる社會の實現を見ることは出來ないかと云ふに夫れは出來る。神によれる者にはたしかに其の望みがある。此希望は吾等クリスチャンの心中には熄さんとして熄すべからざるものである。吾等一個の存在

すらなくならない。況んや神と偕なりと云ふ信念は決して之を滅すことは出來ないのである。然らば如何にして此の希望は出來るか。外でない神によつて生れることである。吾等の中は神の種がある。吾等の生命の中心に神の種子がある。其中に神が根を下ろし給ふのである。之れは決して亡ぼすことは出來ない。之れは天地が壊るゝとも日に／＼新しく生長發展して行く。パウロの所謂詮方盡くれども望を失はず。倒さるれども亡びざるもので、有ゆる困難に際會しても之を切り抜けて新しき望みを以て前進するのである。之れが基督教の信仰である。

余は二十三年振りに、但馬の豊岡及び播州の姫路に行つた。當年豊岡の劇場で説教した時は非常な騒ぎで、殆んど説教が出來なかつた。「神」と一言するや騒然として演説を妨害したるを記憶してをる。然るに今回は數百の聴衆が肅然として謹聽した。又姫路も劇場でやつたのであつたが、凄じい妨害で、劇場演説は當分中止せねばならぬかと思つた程であつた。今回は武徳殿にて教育家、官吏、軍人其他五百餘の聴衆ありて、汽車の都合で遅れて九時半から始めた私の演説を、十時半まで熱心に傾聽し、終

りまで席を立つものは一人もなかつた。過ぎ來し方を眺むれば我國の精神界も大に進歩のあとを見るのである。之れは吾等の説が變つたのではない時勢の進歩である。之を以て之を見れば日本の精神界もよい方に進みつゝある。然るに信仰を失ひし人々は如何になりしか。二十年前に信仰を失ひし人が、其當時云つた事は今にも記憶してをる、「歴史は繰り返すものである。基督教も彼の歐化主義の時代が全盛であつた。もう段々衰亡するであらう」と。又或帝國大學の出身者の如き、過去に於ける我國天主教の盛衰を論じて新教の前途に及び、其遂に衰滅すべきを學説として卒業論文に發表した事すらあつた。其他或帝國大學教授は本郷會堂が焼失したのを見て、もう基督教もだめと失望し、又或人の如きは一人の牧師が政治界に入つたのを見てもう日本の基督教もお仕舞ひだと見切りをつけた。さうして彼等は基督教から遠ざかつた。乍併信仰あるものは、決して是等の事で失望落膽する事はなかつた。彼等は目前の事象を判断して其の將來をトせんとする。社會の出來事や人物の進退を見て判断するから、其の判断は波の打つ様である。吾等は目に見えざるものに根據を据え神に望みをおいて居

る。故に其の結論は現實の世界に標準をおいて居る人々と霄壤の相違がある。即ち我衷なる尊い力を以て天地の神の實在を認め、茲に永遠の希望を見出すのである。此の神の中に秘められ、又我衷に秘められし希望は波の如く去來する社會現象のために動かさるゝものではない。我衷なる神の靈は神と共に永遠に生長發展する。我肉は亡ぶ然も我靈は永遠に亡ぶことはない、パウロの所謂「外なる人は壞つることも、内なる人は日々に新なり」とは即ち之れである。神は吾等の中に此の壞ることなき靈を授け、永遠なる生命を自覺せしめ、希望の生活をなさしめ給ふのである。

今回の戰亂に際しても吾等の見るところと、多くの人の見る所とは大に異なるものがある。彼等は云ふ、基督教何者ぞ、平和主義何者ぞ、正義人道何者ぞ、暴力の前には何もいではないか。如かず武力を以て世に立たんにはと。之れ實に目前の現象を以て神の經綸を無視せんとするものであつて、其判断は根柢から間違つてをる。故に彼等はやがて自暴自棄となり、絶望的にならざるを得ない。彼等は其波浪が大きければ大きいだけ、其内心の動搖が劇しいのである。然るに吾等信仰を有するものは、如

何にその波が大きくとも毫も驚かない。吾等の衷なる望みは此の大亂を見て寧ろ現代文明の現状を打破し來る一道の光明を認め、我が衷に隠れたる望の力は、實に自分ながら思ひ到らなかつた大なるものあるを見出さんとして居る。然り吾々は此の大なる出來事の中に神の審判を見るのである。此の世界の大騒亂は何人が之れが審判を爲し得るか、之れは人間のなすべき所のものでない。否なし得べき所のものでない。見よ、世界最強國の皇帝は神の前に跪いて祈つてをるではないか。英、露、獨、佛の元首が、神の前に平身低頭して、神の照覽を求めつゝあるではないか。其各々我に公道あり正義ありと、公明なる衷心を披瀝して祈るところは、即ち此世に天地の神の外、此大事件の審判者なきを告白するものである。我國の當局者は地方官に令して神社に祈らしめしと云ふ。彼等は何を祈りしか、思ふに人類の正義公道のために祈つたのではあるまい。然も其の祈りの對象に至つては、彼と我と之を比較することは出來ない。憐むべき状態ではないか。今は我國の大に目を醒ますべき時である。靈覺一番、神の審判の前に襟を正すべき秋である。此審判は固より一朝一夕でない。或は五十年百年

の歲月を要するかもしれない。然しながら之れは毫も驚くことではない。個人の紛擾を裁決するに於てすら、數ヶ月、或は數年を要するではないか。況んや此の世界の大事件をや。見よ今日獨逸が敗北して、カイゼルが又起つ能はざる運命に陥りたりとせば、世界の識者が考へ來りし、過去五十年間、或は百年間の立國策、即ちフレデリック大王以來の獨逸國民の理想は根柢から破壊されざるを得ないではないか。而してそこに吾等は之と異なりたる根柢の上は立すべき、萬世に亙りてかわらざる世界の大策を發見するや疑ひない。之れ即ち神の意志が百年の歲月を経て、初めて世界人類に示されたるものと云はざるを得ない。五十年百年の歲月は人類の生活としては短くない。然も神の前には千年も一日の如し、永遠より永遠に亙る神の宇宙經綸の大局より見れば眞に之れ一日半時に過ぎないであらう。

斯く考へ來れば何等悲觀し失望するを要しない。寧ろ此大亂の中に大なる光明を認め、遠大なる希望を抱いて來らんとする時代に處するの準備をなすべきである。此公明なる希望に輝ける大精神は、天地の神を信する者にして初めて實驗する所である。此實

驗なき國民は世界の進運に後れを取り、悔を千歳に残すは歴史の證明する處である。日本國民も今にして大に覺醒し、此精神を體得して我國の前途に光明を與ふべきである。此の振古未曾有の大事件に際し、我國民の學ぶべき事は兵器ではない、軍制ではない。實に此靈的覺醒である。而してその覺醒は須らく永遠の神の中に覺醒するを要する。

永遠の靈潮

神を信する者は古往今來、未だ曾て絶望したることはない。彼等は如何なる逆境の中からも大なる希望を喚び起すことが出来る。彼の豫言者イザヤの時代は眞に國家多事の時で、猶太王國は殆んど滅亡の淵に近づきつゝあつた。而して彼等民族は其の最も悲しむべく恐るべき國家の前途を豫想して熱涙を絞つた。彼等は種々悲惨なる状態を數へたて、神の前に號泣したが、就中最も悲惨なるは戰爭の直接の結果なる壯丁の討死より來る國民の打撃である。豫言者は之を豫想して曰く、「その日七人の女、一人の男にすがりて曰はん、吾儕おのれの糧を食ひ、己の衣を著るべし、唯だ吾儕に汝の

名を唱ふることを許して吾儕の恥を除け」と。即ち吾等は自から働きて衣食するが故に、決して男子の厄介にはならぬ、唯だ願ふ處は夫なき女てふ恥を残したくないからどうぞ我を妻の一人に數へよと云ふ事である。之れ即ち戰爭の結果、最も強い健氣な頼母しい男子が討死して、男の數が減する所より、男女の平均を失ひ婦人多くして男子少きため遂に結婚する能はざる婦人を生ずるに至るからである。茲には男子一人に女七人と記してある。之れは最も悲しむべく同情すべき境遇の限りである。斯くの如き悲惨なる境遇に陥るを豫想したる豫言者イザヤは失望落膽、天道是乎非乎と叫び、唯だ徒に歎き悲しんだかと云ふにさうでない。彼は其恐ろしい暗膽たる前途にも猶ほ偉大なる希望の光明を見出し、そこに無限のインスピレーションを感じた。其日エホバの枝は榮えて輝かん。地よりなり出づるもの、實はすぐれ亦美はしくして遁れ残れるもの、益となるべしと。而して彼は此の戰爭を如何に見たかと云ふに、彼は之れに對して「それは主さばきする靈と焼きつくす靈とをもてシオンの娘等の汚を洗ひ、エルサレムの血をその中より除き給ふ期來るべければなり」と云つてをる。即ち此悲惨な

る戦争を見て、神が世界を清め給ふ所の尊き審判と認めた。従つて其の結果神自身がシオンの山の上に現はれ給ひ、晝は雲と煙とを作り夜は焰の光を作り、普ねく榮えの上に坐し給ふであらうと歌つたのである。

斯くの如き希望に立脚して將來を見る時は決して失望落膽することはない。之れは何に基づくか。云ふまでもなく神を信する結果である。之れは單に自然界の事象のみに眼を注ぐものには見ることを得ない境涯である。彼等は斯かる境遇に陥る時は、最早失望落膽の外はない。彼の祇園精舎の鐘の聲、沙羅双樹の花の色盛者必滅の理を表はすてふ歌の如き、之れ即ち人生を自然界の理法にて解釋せんとするものであつて、此世は恰も花の如きもの、美はしと見しも一夜の仇櫻、夜半の嵐の吹かぬものは。如何なる盛運も遂に絶望に終らざるを得ないと、人生を一種の迷ひとする所謂無常觀の思想にして、基督教の人生觀、宇宙觀とは氷炭相容れざるものである。日本古來の文學は皆此の諸行無常を歌へるものであつて、平家物語といひ、源平盛衰記と云ひ、太平記北條九代記と云ひ、何れも皆盛者必滅の相を歌へるものである。彼等は之れが

人生である、自然界の姿其物である。人生はかくあらねばならぬと觀じた。然るに茲にその自然界の理法を超越して、迥かに高く翱翔し行く偉大なる力がある。何ぞや、夫れは即ち神の力である。神は自然界の法則に束縛せられ給はざる方である。否自然界の上に入り、自然界を統御し給ふ方である。神は初めなく終なく、萬古に變り給はざる方である。即ち無限てふ信仰によりて、人心に實驗せらるゝ所のものであつて、吾等は之れ以上に云ひ表はすことは出来ない。無限の文字はあれど、實際には分らない。唯だ之れは人心の奥底に深く刻まれたる信仰によりて之を知ることが出来る。吾等の眼前の自然界は榮枯し盛衰する、乍併吾等の心の奥底に不滅を自覺する信念がある。その自然界を超越せるものを信じ、又その不思議の力が自然界以外に存するのみならず、自然界其ものゝ中にも表はれ來ると云ふのが強烈なる豫言者の信仰である。此の靈能は世界の外にあるのみならず、世界の中にも漲つて居ると見るのが彼等の信仰である。茲に根據を据えて見るときは人生は全くその面目を新たにして來る。即ち吾等の眼底に映する事柄は決して人生の凡てではない。之れは實に吾等の信仰の眼を

以て見る世界であつて、そこには無限の靈潮が澎湃として漲つてをる。此の無限の靈界に根ざせる吾等の精神は如何なる患難に際しても、尙前途には希望の洋々たるを感ずるのである。

然るに一面より見る時は此の希望は夢のやうな感がしないでもない。吾等の理想の世界、信念の世界は却々來らない。今來るかと思へば直ちに暗黒となり、容易に實現すべくも見えぬ。古來幾多の基督信徒が神國の實現を豫想し憧憬しても、一面より見れば皆一個の空想と成り終つて居るの觀がある。然らば之は一個の迷で妄あらうか。私の幼少の頃聞いた話である。或人が山に行くところ立派な山鳥が居つた、夫れを捕へやうとすれば飛び、又捕へやうとすれば飛ぶ。遂には其後を追ふて山奥に分け入り、狼の喰ふ處とやらんばかりの場合、辛うじて死を免れたと云ふことであつた。私は之を聞いて小さき心に一種の感想を起したのであつた。思ふに之れは人々が種々の虛榮や慾望に迷ふて段々深みに落ち行く様を諷したる一個の謎であらう。人生の一面は斯くの如きもので、種々の迷妄を追ひ求めて遂には狼に喰はれるやうな境遇に陥る

のである。之れ一種の人生觀である。然るに彼等豫言者の人生觀は之れと大に趣きを異にする。素より彼等の理想の世界、神の國は容易に實現して來ない。然も夫れは彼の美はしき山鳥の話の如く追へども追へども捕ふる能はざる夢幻の如きものではない。目に見ること能はず、耳に聞くこと能はざるも、信仰によれば確かに實有の世界にして、必ず何時かは實現すべきものである。故に彼等は決して失望落膽、前途を悲觀することをしないのである。之れ即ち豫言者の信仰である。此の信仰はイスマエル民族の中に扶植せられ、夫れより希臘羅馬の民族に傳はり、歐洲全體に傳播し、更に米國人に及び遂に東洋に波及して、吾々日本のクリスチャンの中にもあるのである。特に吾々日本國民は一種獨特の精神を有する國民である。吾々日本人が往々にして無意識に歌ふ尊い歌がある。夫れは即ち「君が代」である。彼の歌は決して人生を無常と觀じた歌ではない。無常を歌ふ印度支那の思想ではない。あれは日本人の中に生れ出でたるものたるや疑ひない。實に此歌の意義は永遠無窮を表はすもので、然も其中には恒久の希望がある。生長發展の理想がある。千代に八千代にと無窮を希ふのみな

らず、さいれ石が巖となり、苔蒸すまでの進化創造を希ふ意味がある。之れ日本人の精神状態の表現にして、日本人の今日ある所以、日本人特有の精神である。之れは唯物思想でない。勿論無常觀の思想でない。祇園精舎の鐘の聲、盛者必滅の理を表はすと歌つた平家物語の思想ではない。日本固有の思想から來たものである。乍併此尊き永遠の希望を歌へる歌も、其根本に不朽の信念、神を信するの信仰なくば結局無意義とならざるを得ない。さりながら此意味深き歌が不知不識の間に我同胞の國歌として歌はるゝは喜ばしき事である。此の千代に八千代に礫石の巖となりて苔の蒸すまでてふ遠大なる希望は、之れは果して迷妄であらうか。夢幻の如くにして捕捉すべからざるものであらうか。然らず何人も之れは目見るべからず、耳聞く能はざるも、然かも決して空望でないと斷言するを憚らないであらう。何となれば之れ吾等の心中に根を下ろせる確信であり希望であるからである。吾等は之れが眞理たるを信する、否信せざるを得ない。之れ即ち信仰であつて斯くの如き信仰と希望の歌は、吾等詩篇の各所に之を發見するのである。

此靈の世界は其真相に於ては何等の變動なきもその實現し來ることは容易でない。神の國は此處にあり、彼處にありと云ふものにあらず、其間には幾多の曲折あり浮沈あり、隆興あり頓挫あるは遁れ難い所である。例令ば恰も月光の如く雲之れを掩へば爲めに暗きも、月は皎々として雲の彼方に輝いてをる。信仰の根柢も亦斯くの如し。永遠の神には更に變化はないが、人類社會に於ける罪惡の雲は動もすれば之を掩隠して、聖明爲に暗きの觀があるのである。豫言者イザヤは此の永遠の神をイスラエル民族に示さんために如何に骨折つたであらう。更に夫れがイエス、キリストの時代に及んでは愈々明瞭となつた。彼は世界人類に向つて此福音を與へんと試み、其舞臺は茲に一大回轉をなしたのである。勿論是等の信仰が實生活の上に表はれ來るは實に困難である。困難ではあるが然も決して亦失望することは出來ない。先づ近世の人々にして此の靈界の消息を歌ひし哲學者は澤山ある。獨佛英米に於ける近代哲學の碩儒は大抵其人なりと云ふも過言でない。彼等が相期せずして靈的生命の源流に汲み、無限絶大なる靈界の躍動に觸るゝ有様は實に近代學界の偉觀である。彼等哲學者がこの消息

を論ずるや、最早や乾燥無味なる議論ではなく、彼等の信念其ものを披瀝せる歌であり詩である。彼のチャンニングが、ミルトンを論ずるに際し、「彼は散文によらず、詩によりて其思想を發表した。彼の高く尊く深遠なる思想は散文を以て之れを表すことは出来なかつた。彼は詩を以て之を發表した、否彼の思想其物が詩であり、歌であつた」と云つたが、之は味ふべき言である。何人も其信念を發露せんとせば、將さに詩歌によらざるを得ない、散文は信仰を語るべく餘りに理に落ち、無味に過ぎる。見よ彼の豫言者の文は決して議論でない、詩であり歌である。現代哲學者の文と雖も、その精髓を語る所を見れば、之れ實に一個の大なる詩歌である。何となれば之れ既に論理の巻を超越せる一個の人生觀であり詩歌であるからである。此の深奥なる一種の聖き尊き力を捕へて我ものとし、之れを實生活の上に表現するのが即ちクリスチャン、ライフである。茲に宗教的生活の尊き意義があるのである。

吾等は今日萬古未聞の大戦争を眼前に控えてをる。吾等は此戦争を如何に見るべきか。勿論戦争は悲惨である。何物の悲惨も戦争の慘なるより慘憺たるはない。戦死者

數の如何に大なるかを見れば實に思ひ半ばに過ぎるものがある。思ふに今日まで双方の戦死者は恐らく百萬を以て算するであらう。然も之れは自然ではない、人々相殺戮するのである。ペスト病もコレラ病も乃至天災地變も斯くの如く一時に多くの人命を奪ひ去るものはない。然も夫れは病弱なる老幼でなく、血氣旺盛なる國家の支柱である。一國を支ふべき壯丁である。夫れ等の者の死骸は累々として山野に滿ち、之を葬ることすら出来ず、鬼愁幽々徒らに土に委する有様である。而して彼等の妻子父母は更に悲惨なるものである。之れを思ひ見れば吾等は其凄慘なるに轉た同情の涙を禁じ得ない。嗚呼人生も亦遂に動物の相喰むと相去ること遠からざるか、人類同胞の平和的理想も遂に一個の空想に過ぎるかと思ひたくなる。乍併吾等の信仰は斯る淺薄皮相なる思想を許さない。吾等の信念は斯く凄慘悲鳴の聲裡にも尙ほ一道の光明を認めざるを得ない。彼の古の豫言者が國家の滅亡を眼前にひかへながら、尙ほ且つ「その日エホバの枝は榮へて輝かん、地よりなり出づるもの、實はすぐれ美はしくして殘らん」と歌ひしは即ちこれである。

然らば其希望の光明とは何ぞ。其一は英國及佛蘭西が或る人々の想像するやうに衰頹して居らなかつたことである。今後とても彼等はその衰頹を免れ得ないことはない。世人は獨逸の勃興を認めてをる。彼等の若々しき元氣は世界の等しく承認する所である。彼等は新興國民として自からも許し人も之を認めてをる。又露西亞民族も近世に於て著しく發展したる新興民族にして、其勢の隆々たるは世界の等しく承認する處である。然るに佛蘭西は世界の先進國として、今や老衰の域に達し、其文明は業に既に黄金時代を過ぎ去り、盛者必滅の理に従ひ、衰頹の境遇に達せしものと認むるのが、世界一般の定評であつた。英國も亦然り、彼等も既に出来上り、之れよりは盈つれば虧くるの自然法に従ひ、日に月に衰頹するの外なき國民であるとは、これ又世界の定評であつた。特に日本人の中には彼等に對し此種の觀察をなすものが多い。然るに吾等の信仰に依れる觀察は大に其趣きを異にする。私は信する、彼等若し無限の靈潮を呼吸して居るならば決して衰頹するものではない。

基督教の見地より見れば彼等は衰頹を免がるゝ道がある。基督教の世界觀は在來の

自然的世界觀と宇宙觀とを打破する破天荒の靈能である。即ち治窮まつて亂となり天運循環往いて還らざるはなしと云ふのが從來の觀念であつて、之れは春去り夏來り秋を送り冬となれば春又來るてふ自然界の事象を以て人生に適應せんとするものである。然るに基督教者の社會人生に對する觀念は自然界を超越したる所のものであつて必らずしも治窮まつて亂あるものでない。即ち神によつて立てるものは決して衰亡する事はない。寧ろ愈益々榮へ行く筈であると見るのである。吾等の信仰によれば、君が代に歌へる如く、永久に發展向上するものと信せざるを得ない。天運循環の思想を打破して本當に精神的に其の目的を達せんとするのが、クリスチャンの希望なのである。此希望は物質を超越せる靈能の力である。物質界に榮枯盛衰、興敗存亡の行はるるは、何人も否むことは出来ない。乍併靈能は萬世に亘りて決して衰ふる事なき力である。此偉大なる能力を實驗して凡てのものを見る時、吾等は英佛國民の先進國たるの故を以て、必らずしも衰退するものにあらざることを信せざるを得ない。果せるかな、今回の戦亂は吾等の識見に裏書する事實が多い。今回の戦争に於ける佛國は彼の

普佛戦争の時と違ふ。當時のバライ陥落やセダンの潰敗は今日之を見る事は出来ない。今日の佛蘭西は慥かに當時の佛國よりも新興の氣に満ちて居る。吾等は佛國が世界を併呑せんず氣勢を示せる日耳曼民族と拮抗して、敢て譲らざる元氣を見て、世人の曰ふが如く、佛國の退嬰せる老餘の國にあらざるを認むる。而して神の世界人類に對する經綸の一面を覗ふを得て大に之れを欣ぶものである。

又英國を見れば既に全盛の極に達し、世界の舞臺に於ける權綱の觀がある。乍併予は斷じて斯く見ることを欲しない。予は何れの國民たるを問はず、若しも其國民が神の旨に應ひ、正義仁愛の道を踏むものならば、弱國と雖も必らず強盛となり、強國は亦彌や盛に榮え行く事を信じて疑はない。神を信する正しき國民には天運循環して往いて還らざるはなしてふ、自然の理法は適用せられない。歴史が榮枯盛衰の記録をのこすは、之れ即ち神の旨に離れしによる。之れ吾等の信仰によれる國家觀である。英國人は世界に於て尤も道義的觀念の盛なる國民である。神を信じ正義を敢行する精神に於て世界何れの國か彼の右に出るものがあらう。貞清純潔の德にて英國の婦人より

秀でたる婦人を何處に見出すことが出来よう。之れ實に彼等の旺盛なる道義的觀念に基くのである。又現代世界の政治界に於て何處に英國政治家の如く高潔偉大なる人格を見出すことが出来るであらうか。試みに之を現内閣に見よ、首相アスキスを初めとし、キチナー、チャーチヒル、ロイド・ジョージ等、其識見に於て伎倆に於て何れを何れとも分ち難き、真に一騎當千の人物である。然るに彼等に於て一點の批難すべき陰影ありや、否々彼等は品行方正、真に神を尊び基督の道を我道となし、謙虛自からを處する敬虔なるクリスチャンである。何れも皆教壇に立つて説教をなし得る底の人物である。而して之れは單に内閣の樞機に參する人々のみではない。在野の政客然り、實業家然り、學者教育家皆然りである。斯くの如き國民を有する英國が老衰するものとせば、吾人亦何をか云はん。或人は曰ふ、どうせ世界は廻り持ちである。十九世紀は西洋諸國の當番であつたが、二十世紀は東洋にお鉢が廻つて來ると。之れ即ち天運循環の思想である。凡そ世の中に斯くの如き愚論はない。聖書に曰く勵みたるものは天國を取るべしと。神を信じ神の靈に勵まされ、道義の觀念に立脚して、其國家的畫

策をなすもの、何故に老衰し退嬰することがあらう。之れを個人に見ればその證左の歴然たるものがある。神を敬はずして腐敗墮落の淵に沈淪する者に、何處に元氣あるか。素行修らずして酒色の巷に遊蕩する青年に何處に意氣の潑測たるものがあるか。予は茲に六十歳の齡を迎へしと雖も斷じて彼等に譲らない。之れは國民に於ても亦同様である。予は英佛民族の現状を見て我が確信の空しからざるを感じ、信仰の勝利を欣ぶものである。

斯くの如く敬神の念熾烈にして道義力旺盛に信念の確固たる國民は榮え、之に背致する民族は衰頹すると觀する時、吾人は今回の戦亂に就て悲觀することが出来ない。寧ろ此戦争の結果よりして非常に尊いものが産れ出づることを信じて、一種の歡喜をなすものである。然り吾等の靈眼には慘澹たる大悲劇の裡に無限の靈潮、澎湃として流れつゝあるを見るのである。余は今朝眞に可驚事實を發見した。之れは一個のいと微き事例に過ぎない。然も梅花一輪綻びて春の來るを知り、又一滴の水よく大湖の清濁を知ることが出来る。今朝の東京朝日新聞にロンドン、タイムス社の電報として「二

十四時間の平和」と云ふ記事がある。即ち戰場に於けるクリスマスの模様を記せるもので、其全文を掲載すれば左の如くである。

「戦線より發せられたる諸報道に依ればクリスマスの日は多くの陣地にて敵味方とも珍らしくも休戦を爲したるものゝ如し。英獨兩軍の兵士共互に其塹壕を出で、握手し巻煙草など贈り交はし二十四時間は全く交戦を休止せり。管に兵卒のみならず兩軍の士官すら言語の相異なるより相互の意志を通ずる事の不自由勝なる中にも恰も同胞の如く相親しみ、互に塹壕を訪れ相共に唱歌を謠ひ又英軍の一聯隊の如きは索遜兵を相手としてフットボールの競技を闘はせり。兩軍共對峙せる塹壕と塹壕の間には横はれる戦死者の埋葬を默許し獨兵の中には獨軍の塹壕の後方に在りたる英軍の一士官の死體をば鄭重に葬られたしとて英國方に運び來れる者すらありたり。」

實に面白い現象ではないか。基督教を信せざる人々には是等の現象は全く諒解に苦しむ處であらう。乍併之れは正さに歐洲の近き將來を卜すべき一滴の水である。此裡に實に尊いものがある。神の前には人類は同胞にして敵もなく味方もなく、全然一なり

この考へが、戰場に於けるクリスマスの一夕に於て現はれて居る。至上所には榮光神にあり、地に平和、人には恩寵あれてふ歌が、事實となつて表はれてをる。之れは無
限の靈潮の一滴にして、決して偶然に起りたる無意識の餘興ではない。尊き統一的平
和的精神の現はれで、永遠の靈潮に根ざせる事實である。此の精神が勃發し來る時は
世界の形勢が一變するを疑はぬ。勿論此の真正の平和時代が戦後直ちに來るとは云は
ない。されど之れは必らず來る、而して案外に速かなるやも知るべからず。

此精神は日本國民の喜ぶ所のものである。日本人の中には此精神に共鳴し得るもの
がある。之れは清められたる人道的精神である。されど可惜日本人の平和の精神、人
道の精神は未だ徹底して居らぬ。之れは基督教の我國民に對して貢獻すべき處である。
日本が世界に於て其地位を保ち、國家としての體面を完うせんとせば先づ其宗教的精
神に於て一大轉向をなさねばならぬ。即ち世界的精神に向つて飛躍せねばならぬ。夫
には天地宇宙の主宰者たる神を父とし、其神の靈に感化せられて、大義を四海に布く
の見地に立たねばならぬ。吾々基督教徒は此大精神を日本國民に與へんがために先づ

神の選びを受けたるものである。國民の洗禮、國民の甦生。之れ吾等クリスチャンの
祈禱であり、標語である。無限の靈潮は滔々として我が國民の胸岸を驚かしつゝある
ではないか。

信仰の試練

婦子を産まんとする時は憂ふ、其時至るによりてなり。されど産めば前の苦しみを
忘る、世に人の産れたる喜樂に因りてなり。(約翰傳十六章廿一節)

基督は福音宣傳のために弟子達を遣はすに當り、二つの矛盾せる大事實を示して彼
等を訓へ給ふた。其の一は即ち傳道の困難なることである。換言すれば弟子達の身邊
に襲ひ來るべき種々様々の迫害患難である。基督は「我爾曹を遣はすは羊を狼の群に
入るゝが如し」と云ひ給ふた。狼は獍猛なるもの、固より羊の敵でない。即ち其恐る
べき狼の中に羊を入るゝ様に汝等を遣はすのであると宣ふた。之れは眞に戦慄すべき
事である。之れは實に社會人生のみならず、我家庭の中に於ても經驗せられる事實で

あつて基督も亦爾曹の仇はその家のものなりと宣ふた。況んや國家社會をや。基督教徒の爲には實に正邪曲直の批判をなすべき法廷すらも、最も公平なるべき政府すらも其敵となることがある。基督は斯く恐るべき社會状態を示して、弟子達に警告せられたのである。彼の地に泰平を出さんために我來れりと思ふなかれ、泰平を出さんにあらず、刃を出さん爲めに來れりとの言は、此の猛惡にして慘酷なる、且つ不道理なる社會に對する基督教徒の態度を闡明したものである。

然るに他の一方には何を示されしかと云ふに、彼は神の保護を説き、如何なる社會に至るとも決して恐れてはならないと訓へ給ふた。二羽の雀は一錢にて售るにあらずや、然るに爾曹の父の許しなくば其の一羽だに地に隕つることあらじ。爾曹の頭の髪また皆かぞへらる、故に懼るゝなかれ爾曹は多くの雀よりもまされり。之れ實に神の保護の至れり盡せることを示し給へる千古の金言である。此の二の教訓は一見相矛盾せるが如きも決してさうでない。猛惡狼の如き社會は神の頓着し給はぬ別世界かと云ふに然らず、茲も亦神の支配の中にある社會である。同じ愛の神の下に慘憺たる事

實が行はるゝとは如何にも不思議であるが、然し信仰の眼を以て見れば、其の中には豊かなる神の保護が行はれて居るのである。之れ即ち弟子達に訓へたる深長なる意義ある教訓であつて、世の中の患難、周圍の迫害を顧みれば眞に羊を狼の中に入るゝが如きも、然も深く強き信仰を以て行けば、必ず神の優渥なる保護は汝等の上にあるであらうと。これ今室にて聽きし處を恐るゝ所なく屋上にて語れ、如何なる危険を犯しても世界に福音を宣傳せよと宣ひ給ふた所以である。

斯くの如き信仰の勇敢は大迫害大反對を冒かして初めて表はるゝ所のもので、何等の反對もなく、患難もなくば大なる確信を以て其信仰を鼓吹する事は出来ない。汝等恐るゝ所なく進み行け、汝等の背後には神の保護あり、雀すらも神の保護に與つて居る、汝等は雀よりも優つてをるではないか。身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ、魂と身體とを地獄に亡ぼし得るものを懼れよと。人生死より大なる懼れはない。然も弟子達は死をも覺悟したのである。死を以て魂をいかし給ふ神は必ず保護し給ふと信じて疑はなかつたのである。

此二つの問題は確かに矛盾したる所のものである。乍併二つとも事實である。淺薄なる考へを以てすれば、此の相反せる二の事實は調和する事が出来ない。故に一身一家に禍災至れば、天道の是非を疑ひ、此世には神なしと云ひ、順境にして幸福なれば神を讚美し感謝する。然も吾人を以てみれば信仰の眼には、そこに何等の矛盾も不安もないのである。今此の大教訓を垂れ給ひし基督の身の上に就て見るに其不遇や眞に言語に絶するの時であつた。彼の前には唯十字架があるのみであつた。其悲しむべき前途を豫見せる彼が、猶ほ且つ神の保護の優渥なるを説き、神に對して絶対の信任を置き給ふとは實に偉大なる信念ではなからうか。茲にこの教訓の眞意義が存する。基督は淺薄なる樂天家ではなかつた。寧ろ一面より云へば非常な悲觀の人であつた。普通の眼より見れば基督の見出し給ふた所の社會状態は確かに堪へられぬ所であつた。之を見て彼も時あつてか悲觀し給ふたに違ひない。例へば家庭は人生の樂園である、社會は地獄、家庭は極樂である。乍併其家庭の中にも冷かなものがある。慈愛の父母の中にさへも、時に慘酷なものが潜んでをる。父は子を訴へ、子は父を訟ふ。之れ

は古今の賢哲の見ることを欲しなかつた一面である。彼等は之れを見ては人生の醜惡なるに寒心して、目を閉じて再び之を見るまじと努めた。然るに基督は之を凝視洞察し給ふて、其の悲惨なる人生の中にも猶ほ神の支配あり保護あり攝理ある事を示し給ふた。茲に救済の大希望の生ずる根原がある。之れ基督と東洋の賢哲など、の人生觀社會觀の相違する所である。吾等は此基督の實驗せし精神状態を深く學ぶのみならず、基督の心を心として社會人生に臨まねばならない。如何に尊く且つ力あるものが、基督の人格の中に潜んで居るかを思ひ、之を我物としなければならぬ。之れを我衷に化育し完成せんと努力するのが、即ちクリスチャンライフである。之れは容易の業ではない。幾多の試練を要する、基督を神と信じ又天地萬有をしろしめす大能の神を信すれば足るのではない。基督と同化し彼と我が一となり、最早我活けるにあらず、基督我にあつて活くるなりてふ、深き實驗によりて初めて之を贏ち得るのである。

今日の世界の状態は有史以來未曾有の大亂である。今や實に一千萬に近き兵を動かして居るとは偉い事である。我等は少年の時代に彼の支那の三國史や漢楚軍談をよみ

百萬二百萬と云ふ大軍が雲霞の如く入り亂れて戦ふ有様に驚異の眼をみはつたが、是等の夢物語は今日事實に於て之を見るのである。否、實に今日は夫れ以上である。又彼の日露戦役に於ける奉天の會戦は世界戦史の記録を破つたものであつたが、今日歐洲に於ける戦闘は彼れに幾十倍して居るか分らぬ。而してそれが何處に行はれてをるか云ふに、世界文明の中心、近世文化の發源地たる歐洲の眞中である。加之宗教上より云へば最も高等なる宗教の行はる所、政治、教育、産業、其他有りとあらゆるもの、優秀なる、文化の花爛漫たる處に勃發したのである。之れ決して看過すべからざる所の者である。今日我國民は餘儀なく此渦中に投じたのであるが、大軍の行動する所は遠く歐洲の天地にある事なれば、吾等は一面傍觀者たり、批評家たるの地位にあるものである。然らば吾等如何に此時局を見るべきか。世人は云ふ、歐洲人は何ぞぞ、文明開化を以て誇るものが此の有様は何ぞぞ。乍併之れは淺見者の言にして恰も臺灣の蕃人が東洋の大勢を論ずると何の選ぶ所はない。次に稍識見ある者は今日の有様を見て、世には世義公道なるものなし、富國強兵こそ實に立國の第一義、強者の前には

人道も正義もあつたものでないとの考へから「力は即正義なり」との結論に達する人が少くない。又そこまでは行かなくても、其邊に就て懷疑の念を生ずるものがある。然し之れは一面信仰生活に於ての試練である。曾ては正義公道が世界を支配すべしと云つてをつた人が、正義は一個の名目に過ぎずして、實力は正義になく、兵力にあるを示してをる、のみならず、彼等は倫理道德も全く之れを顧みず、機會あらば亂暴をも敢てする。即ち信仰道德の破壊である。而して更に恐るべきは歐洲人を誹謗する人自身の倫理道德觀念が破壊されつゝあることである。嘲罵の報ひは彼にあらずして却つて我にある。即ち人を刺したる刀は却つて自己を刺すのである。基督の所謂「人を議するものよ己も議せらるべし」と云ふのである。斯くの如きは畢竟人間の眞相を知らぬ者の見と云はねばならぬ。人間の皮相を見て其眞髓に徹せぬものである。莞爾として微笑せる人を見て、其心中に瘳猛なる精神宿り、何時爆發するやも圖られざるを知らざるものである。何人の心中にも恐るべき爆裂彈がある、之れ即ち罪惡である。此罪惡につき古來學者は種々考へた。或は原罪即ち祖先の犯したる罪が子孫に遺傳し、

ために人生は罪に満ちて來たと云ふ。支那に於ても荀子は人の性は悪なりと云つて居る。釋迦の如き人生の無情を歎じたこと云ふも、「何故に」と問ふならばそこに根柢がある。それは即ち罪惡である。故に彼も又一種の罪惡觀より發心して王位を捨てたのである。斯の如く何物かあつて人心に附き纏ひ、人心の和平を攪き亂してをる。之れ人類の間に鬭争のたへざる一大原因である。今日世界の歴史を見るに、之れ實に戦争の歴史である、我日本の歴史の如きも神武東征以來今日に至るまで殆んど戦争の歴史である。否神代の歴史が既に戦争の歴史であつて、彼の古事記、日本紀の如き戦争の記録たるに過ぎない。泰西諸國古今の歴史又然りである。之れ實に人生である。人間の根本には戰を惹起すべきものがある。之を窮めずして徒らに家庭、國家、社會の道徳を云々するは病原を究めずして藥を投ずるの愚をなすもの、斯る人は今日の如き場合には其の道徳觀は根柢より破壊さるゝの外はない。正義公道は痴人の夢として唯だ力、力と絶叫し、暴力も尙は義しくして敗るゝに優るとなすのである。故に斯くして彼等は結局物質力の崇拜者となり、物質萬能主義者となるのである。

然るにクリスチャンの信仰は斯る淺薄なるものではない。基督は二千年の昔に於て之れを示現して居る。彼の十字架上の基督は即ちそれである。基督は天地の間に二人となき聖き尊き人である。換言すれば基督は人類に於ける神の最高顯現である。曾てはヨルダン川の洗禮に於て、「汝は我愛子、我喜ぶ所のものなり」との神の聲を聽き給ひし人である。其の人が十字架上に磔殺せられ給ふた。吾等は其基督を信するのである。故に何等社會の紛擾騷亂に辟易するものではない。最初信仰の時、それはちやんと信じてをる。夫れも釋迦の如く熟したる果實が落ちる様に死んだのではない。自然に人生を終つたのではない。自然の死ならば之れ即ち天壽にして更に恨みはない。然るに基督の死は所謂非業の死にして慘の慘たるもの、然も之れを殺したるものは異邦人にはあらずして、實に我が最も愛したる同胞國民である。神の選民として人も許し我も誇りたる信仰深きイスラエル民族である。斯の如き悲惨にして矛盾に満ちた事にすら驚かずして信仰の生活をなせるクリスチャンは、今日の戦亂に向つて正義公道の存在を疑ひ懷疑迷妄の思想に陥るものでない。更に今一つ信仰の土臺となるものがあ

る、世人は此世を以て罪惡汚穢の世界と觀じ、今日の如き場合には愈々益々自暴自棄の生活に墮ち入るのである。然るにクリスチャンの心の置き處はもつと奥深き所にある。其奥深き處に清き正しき恩愛の神が在し給ふのである。之は聖書や傳説によりてぼんやりと信じて居るのではない。我衷に實驗して確實に神を握つてをるのである。吾等の信仰は深い所に徹底して居る、吾等の心の状態は、繪畫、文學、演劇等を見て一種の興味を感じる低い生活を喜ぶ一面なきにしもあらざれども、之れは吾等の本領ではない。又吾等の中には恐ろしい鬼の如き邪慳なるものが潜んでをる。我自らも驚くべき怨恨の焰が炎々として燃ゆる時がある。之れは確かに事實である。併しながら之れも又勿論我が本領ではない。吾人の本領は更に奥深い處にある。そこには清く尊く美はしき精神の實在を實驗するのである。其實在を吾等は天地萬有を支配する宇宙の根本精神の表はれと信せざるを得ない。中古の神秘家は心の奥深き處に清く美はしいものを見て、之を見し眼は即ち神を見るの眼と思つたのは深い意義がある。彼等は人間には三つの眼があるとした。即ち一は此世界を見るの眼で一は我を見るの眼、他

の一は即ち神を見るの眼である。彼等が心の奥深き所に於て神を見るの眼はやがて神が吾等を觀給ふ眼なりとなしたのは實に面白い所である。夫れが人心の奥に潜んでをる、それが即ち吾等の本領である。此本領は基督によつて遺憾なく體現されてをる。吾等の本領は未だ具體的になつてゐない。唯だ我衷に夫れがあることを自覺してをるのみである。所が基督は悉く其の表現である。吾等は基督を信することによりて此本領を自覺するのである。此基督の聖き人格、尊い精神は決して夢幻の如く空しく、朝露の如く消え失するものでない。實に天地の真相である。人類精神の最高最深の真相である。そこに神の姿がある。天地を見ても神はない、人類社會にも神はないと、云ふをやめよ、基督の人格に於て吾等は神を見ること出来る。又或人は基督を神と見るは、一千九百年前に出た傳へに外ならないと云ふ。然し之は決して千九百年前の出來事のみではない。基督出生以來今日に至る迄多くの人々の實驗する所である。此尊き實驗にその根柢を置いてをる。淺薄なる社會は此の奥深きものを輕々に看過し、毫も人心の根本に尊きものあるを見やうとしない。之れ恰も陰雲の閉ざせるため天上に

太陽なしと云ふに等しく、識者の笑ひを招く外はない。神は太陽の如く人心に實在し給ふ。唯だ疑惑の雲徂徠して之を掩ふのみである。こゝは今日世界のクリスチャンが試練される所である。

今や實に一千萬に近き人々が戦場に出で、我同胞も出征してをる。而して戦争の苦痛を嘗めてをるものは夫れに止らない。巴里も敵の攻撃を受けてをると云ふ。ブラッセルは陥落し、アントワープも獨軍に威嚇されてをる。之れ等の市民の上を思へば、實に其の慘憺たる運命に同情の念を禁することは出来ない。此慘禍は抑も何の故ぞ。之れ實に物質文明の結果である。科學の進化のために茲に至つたのである。換言すれば科學の力、教育の力が、恐るべき結果を齎したのである。新聞の報する所によれば、露軍の大將が一時に三人も死んだのは獨軍の四十四珊の大砲が爆發した爲めだと云ふ。この大砲は世界最大のものにして一哩四方を灰燼とすると云ふ事である。之れ實に人類が自から發明せる科學器械により自殺するのである。乍併之は事實である。斯の如き時に思ふであらう人生とは何ぞ不可解であると。殊に出征軍人は勇敢に戦つ

て命を捨て、居る。何のためか。國家のためであると。而して國家のため身を捨つる事が國民道德として識者も之れを主張して居る。一面より見れば不思議な事である。人類が謳歌せし科學進歩の結果は人を殺し、又尤も尊重する國家主義の遂行には生命を棄てねばならぬ。彼等を戦場に送れる父母や妻子の心情ははた如何に。神の保護があること云ふが、然らば何故に我子我夫は戦場の露と消ゆるか。何處に神の保護はあるか、神を有難いものと思つて居つたが事實は相反してをると。茲に至れば一種の疑惑を生ぜざるを得ない。乍併之れ實に大なる信仰の試練である。

吾等は今や大なる試練をうけつゝある。吾等は此の場合一層深き信仰を以て靈眼を醒さねばならぬ。我等約百記を見るも、パウロの書簡に見るも基督の傳記を見るも、實に恐ろしい出來事により其信仰は愈々益々精練せられて、其の貴きものを發揮してをる。今や歐洲に於て同じ獨一の神に各國が戦勝を祈つてをる。日本人は之れを見て同一の神に敵味方が勝利を祈るは可笑しいと罵言する、然も之れ誠に尊い處である。基督の示す所の神は天地の神にして國々の守護神ではない。彼は萬物の主宰者にして

義の神善の擁護者である。其の審判は正義を擧げ邪惡を罰す、決して偏り給はない。此天地の神に訴へて祈る心事は誠に尊い事であつて、決して笑ふべきことではない。神に訴へても負けたる場合信仰なきものは自暴自棄となる。然るに信仰あるものは其失敗の中にも省みて聖旨のある處を覺り、所謂聖旨に任せ給へとの公明なる心事となる事が出来るのである。今や戦は正に酣である。此の悲風慘憺たる間にどう云ふ尊い精神が産み出さるゝか分らぬ。凡そ人類の高尙雄大なる精神は決して瞑想、靜思に依て産み出されるものではない。之れは古來歴史の示す處であつて、血を流す程の慘憺たる奮闘によつて發揮し來るのである。斯く考へ來れば今日の世界は實に偉大なるあるものを産むべき、産みの劬みをなしつゝあるのである。戦亂は神の頓着し給はぬ領域ではない。神は之によりて人類の間に大なる寶物を與へんとなし給ふに外ならない。吾等は大きな價を拂ふて其の尊き寶物を得んとしつゝあるのである。吾等は此の戦亂の中に何を見んとするか。吾等の信仰は毫もひるまない。嚴然として聖旨を奉體し、有終の美をなさんとするのである。亂世は英雄を生ず。恐らく此戦に老母を故山

に残して戰場に驅馳し、家卿を思へども、國家のためには如何ともする能はず、母も亦義のために泣いて我子を捧げつゝあるものがあらう。然も之れ英雄の心事である。思ふに今回の戦争休止し再び平和の光を仰ぐの日は、英雄的精神が未曾有の力を以て發揮し來るに違ひない。其精神は過去の所謂英雄魂ではあるまい。即ち物資の力よりも精神の力を尊重し、十九世紀以來繼紹せる科學發明の力よりも人間本來の精神なる正義公道を尊び、同胞兄弟の救済に任ずる二十世紀的、萬國主義的英雄たるを疑はない。今日吾等の眼前には妖雲縹いてをる。乍併信仰の眼を以て見れば此の暗澹たる形勢の中にも尙ほ一道の光明を認むることが出来る。夫れは即ち基督の人格の中にある尊き實驗である。而してクリスチャンの心の奥に實驗せらるゝものである。吾々は過去の實驗に於ても斷腸の苦難の中より尊き歡喜を贏ち得たのである。今や世界は最大なる賜物を後世に遺さんため、産みの苦しみをなしつゝあるのである。それは誠に難産である。基督云はずや、「婦子を産まんとする時は憂ふ、其時至るに因りてなり、然れど已に生めば前の苦しみを忘る世に人の生れたる喜樂に因りて也、斯の如く爾曹も

今憂ふ、されど我れまた爾曹を見ん時汝等の心喜ぶべし」と。人類世界は今や産みの苦しみのために七轉八倒しつゝある。然し其の苦しみは暫くにして王の如き兒の出生を見るであらう。大戦亂の惨景は言語の名狀する所ではない。然し之れが齎すべき効果の偉大なるを思へば吾等は必ずしも悲しむを要しない。此の信仰と健全なる精神を以て神の前に立つ時は未曾有の大戦亂にも、前途の暗澹たるに失望して天地の正義公道を疑ひ自暴自棄となる事はない。吾等は此の精神此信仰を以て來らんとする新しき世界に立ちて、來るべき寶物にふさはしき偉大なる精神を養はねばならぬ。健全なる精神を涵養せねばならぬ。激烈なる信仰の試練は斷じて輕々に逸してはならぬ。

基督教の維新

神の宇宙經綸の大業は何時も同處に停らず、又同事を繰返さず、常に駭々乎として變化し進歩發展しつゝあるが、然も時あつてか震天動地の大事件を以て人類驚倒の間に、世界の面目を一新せしむることがある。然して基督の時代は其變化の最も大なる

ものゝ一であつて、彼の時代に於ける人々の感想を温ぬる時は、蓋し思半ばに過ぎるものがある。抑も此の時代には地中海の沿岸一帯に世界の終が來るてふ一種の思想が汎く行はれて居つた。世界の終末は遠くない、頓て來るであらうこの思想が多くの人心を支配してをつた。然もこれが彼の大羅馬帝國が成立つて未だ多くの歳月を闊しな時代の事であつたのは實に不思議なる現象と云はねばならぬ。當時の人心は斯くの如き恐ろしき想像に襲はれ、戦々兢兢として何事も手につかぬ有様で、彼等は今にも世界が破滅するものと思ひ、日夜取とめもなき妄想に耽るのみであつた。之れは一面迷信のやうであるが、必ずしも迷信として看過すべき事ではない。一體世の中には天變地異、種々様々の事柄があつて人類を威嚇する、然も夫れ等の何物よりも勝りて恐ろしきものは世界の終りと云ふことである。此世界の終焉が近づくと云ふことを聞きて人心の動搖するは將さに然るべきことで、之れは如何にしても逃るべき道はない。之れは寔に人間の方法術策を超越した問題で、世界の破滅の前には何人も最早手をつかぬて之を待つより外に仕方はない。故に當時の人々が失望落膽して大悲觀の境涯に

陥りたるは當然である。

然るに斯く失望落膽の極に達したる際に、彼等をして起死回生の思ひをなさしめたる一大福音の音信が地中海岸の一角に起つた。夫れは即ち基督教である、基督教徒は何と叫びしか、彼等は「神の國は近づけり」と叫んだ。之れは誠に喜ばしき聲である。

「時はみてり神の國は近づけり、爾曹悔い改めて福音を信せよ。」之れ彼等クリスチャンの標語であつた。之れは失望落膽施す處を知らざる當時の人々にとりて限りなき福音であつた。彼等クリスチャンは此絶望的な時代思想を如何に見、如何に解釋したか。彼等は此世界滅亡の思想を肯定した。而して此世は一度破壊せられ、更に理想的の國即ち神の國が來ると主張した。故に彼等に從へば世の終りは悲しむべきも、然も神の國の來るは人間にとりて喜ぶべき事である。故に畢竟世界の終末は來るべき神の國の初めなりと見たのである。之れは實に偉大なる觀察である。乍併茲に困難なることは神の國の出現は現實に見得ることならざることである。彼等は之れを人の信念に訴へて、神の國は信仰によりて之を見るべしとなした。現實でない信仰によるのである。

之れ即ちヘブル書の記者が「信仰は未だ見ざる處を眞理とす」と云つた所以である。

神の國は現實の世界ではない。然も夫れは近づいて居る、やがて來るべしと信するのである。一體信仰は人の靈性の活動である。信仰によれば周圍は暗澹として光なき時にも其儘に終るものとしなす。必らず此の先きに光明がある希望の光が照破し來ると見るのである。然るに懷疑は之に反し、如何に光明を認めても、之れは仄かなる刹那の閃きにして恰も稲妻の如く電光一閃、後は更に暗黒を増すのみである。之れ二者の相違である。信仰は暗中尙希望の光を見、懷疑は光を認めても之れを絶望のシムボルと思ふのである。基督教徒は懷疑を排し、信仰を要求した。「爾曹悔い改めて福音を信せよ」とは即ち其要求の聲である。所が此聲に應じて起つ所の一種の健全なる精神があつた。此絶望の底より神の國を自覺して此聲に加はり來るものがあつた。之れ即ちイエスの弟子達であつて、彼等は凡てのものを捨て、イエスに從つたのである。而して是等の人々は日進月歩の勢をもつてその勢力を増して來た。

然るに一面から云へば彼等の信する形にては神の國も見えなかつたが、又世界の終

りも來らなかつた。所が紀元六十八年に彼の有名なユダヤの戦争起り、羅馬の大軍が押し寄せて來た。ユダヤ人は不幸にして舉國一致でなかつた。若しも舉國一致であつたならば彼の精銳なるユダヤ軍にして恐らく破るゝ筈はなかつたであらう。其時ユダヤの基督信徒は皆非戰論者であつた。彼等に愛國心なかりしにあらず寧ろ明徹なる愛國心より羅馬と戦ふの不利を説いたのである。然も彼の狂熱的なる青年黨の勢力強大にして如何ともする能はず、彼等は遂に國土を賭して戦ふに至つた。而して三年間の戦争の結果彼の難攻不落と稱せられしエルサレム城は羅馬兵の蹂躪する所となり、王朝の榮華を誇りし壯大なる宮殿も兵燹に罹り、殘る所は燒石と焦土のみとなつた。エルサレムの滅亡は實にイスラエル民族に對する致命傷である。彼等は神の選民にして此世の何物よりも滅ぼさるゝ事あらじと深く信じてをつた。然るに今や目のあたり此亡狀を見て、彼等は驚き怪しみつゝ其の非運に泣いた。而して端なくも彼の世界終末の思想に想到するや、之れ即ち世界の終末に近づくの第一歩にあらざるかと思つた。彼等は失望嗟歎爲す所を知らず、或は奴隸となり、或は殺戮さるゝ同胞を見て、天道

の是非を疑ひつゝ、國を捨て、パレスチナの隆々たりし王國は今や山河蕭條、空しく憐れを止むるの有様となつた。此の時に當り、彼のクリスチャンは果してどうであつたか。彼等と雖も素より之れが爲に渾身の涙を絞つた。乍併彼等は之を以て悲觀絶望に終らなかつた。獨り悲觀に終らざりしのみならず、寧ろ此一大悲劇の中に大なる光明を見出し、そこに無限のインスピレーションを感じた。曰く「之れは舊いものが壞れて、新しいものが生るゝのである」と。彼のヘブル書は亡國の非運に歎き悲めるユダヤ人に向つて慰藉し獎勵したるクリスチャンの確信の發露であるが、それによつて見ると下の如きことが記されてある。「一體是迄存したるユダヤの宮殿祭司等は之れ來るべきもの、雛型であり影である。本當のものはそこにはない。それは之れから來る、吾等は知らず、其本體に象りたる是等のものを崇拜し之れに捧物をなした。然も之は影であり型であつたから、夫れが破れるのは何等悲しむを要しない、何となれば此悲しみを補ひ得て餘りある本體が來るからである。而して又來るべき宮殿は人の手にて作つたものではない。それは活ける基督の儕輩によりて造らるゝ、

もので之れ即ち活ける神殿である。換言すればクリスチャン相互の心と心との深い關係そのものが神の宮居にして、之れは何人も之れを燹き之を毀つことは出来ない。此宮殿に於ける祭司長は即ちキリストにして、夫れに捧げるものはクリスチャン個々の身體そのものである。吾等は長なるキリストと共に神に親しむことが出来る。又之までの祭司は犠牲として犢牛羊と捧げたが、吾々の新しき宮にては潔き祭司の長自らその身を捧げて犠牲とし吾等に其範を垂れ給うた。羊牛の犠牲は之れ同じく型であり影である。羊や牛の血は人類の罪を洗ひ潔むべく何の力もない。祈しき宮に於ける犠牲の血は人の血である。此血即ちキリストの寶血は人間の罪を洗ひ潔めて尙ほ餘りあるものである。故に彼は影にして之れは本體である」と。之れは眞に偉大なる思想である。又昔はエルサレム宮殿の中なる、かの契約の箇の中に三種の神器が秘められ、かの最も大切なるモーセの律法もそこにあつた。然るに新しい宮殿に於ては心の肉脾に神の靈が彫まれて居る。此の影であり型であつた國が亡ぶとも悲しむを要しない、彼れは準備である。完きもの來る時は完からざるもの廢る。聖く、高く、尊き神國の

出現の前には彼の國は曙の星である。彼等の禮拜は儀式と典禮とであるが、吾々の新しき宮殿にては信、愛、望こそ禮拜の實質である、之れを以て活ける神を禮拜し得るのであると、實に初代基督信徒の卓見は吾等之れを今日に見るも唯だ驚嘆の外はない。之れ等の思想を更に最も力づくよく明かに云ひ表はせるは彼の約翰傳第四章、サマリヤの女に與へたるイエスの言である。曰く「神は靈なれば拜するものも靈と眞とを以て之を拜すべし」と、茲に禮拜の眞義がある。斯う云ふ深いものを初代のクリスチャンが持つて居たのは、之れ實に彼等が基督に接したる賜物である。さればこそ彼のエルサレムの都が亡んでも、その麗はしき宮殿が毀たれても毫も失望せず、新しきものを望み見て歡喜したのである。之れまでの古きユダヤが敗滅しても新しきものに思ひを注ぎ、希望を將來にかけて奮闘したのである。

斯くの如く基督教は時代々々に處して常に新生面を開いて進んで來た。彼の西羅馬帝國の滅亡の際の如き之れを滅ぼしたるものは文明人にあらず、實に彼等よりも文明の劣等なる所謂北狄蠻人であつて、其野蠻的行動は實に亂暴狼籍を極め、ために流石

の羅馬帝國も眞に土崩瓦解の姿であつた。當時の羅馬市民の苦痛は殆んど想像するこゝが出来ない。彼等はイスラエル民族と同じく、羅馬帝國は何時までも續くものと思つてをつた。其大帝國が一朝にして、而かも北狄蠻人のために滅ぼさる、實に悲惨の極である。オーゴスチンは之を目のあたりに見て泣いた。而かも之れ彼が七十を超えたる老後の事であるから、それは寔に深刻なるものであつた。然るに追がに彼はクリスチャンであつた。彼は此羅馬滅亡の悲惨を見て殆んど失神せんばかりであつた。而かも其間より尙一道の新天新地への希望を見た。彼は其歴史哲學の立場より之は斯くなるべきであつたのだ、アダム以來の舊い罪の世界が破れ行くのだと之を解釋した。即ち根柢が間違つてをるから破滅すべきもので、此罪の世界が神に呪はれしは當然の刑罰なのであると見て茲に新しき方面を見開き、そこに即ち神に支配せらるゝ尊き國都があると觀じた。彼の『神京』は彼れが此精神に燃えて書いた所の晩年の傑作であつて、彼は羅馬に於て基督教會の一大中心が出来て、それが段々と諸方に發達して行く有様を見、之を以てその理想せし『神京』の出現と見て、心の踊るを禁じ得なかつた。

彼は悲觀の中に坐しながら此の輝ける將來を想見して快く世を終つたのである。

基督教の歴史を温ね來れば以上の如く非常なる場合が二度ならず三度ならずある。

然もクリスチャンは常に其間に處して如何なる場合にも希望を失ふ事なく、暗黒の中より希望の光を望み、絶望の淵にも尙は一道の活路を見出し、進み進んで今日に至つてをる。之れ基督に於ける信仰の賜物である。然るに吾々は今日萬古未聞の大戦亂を目前に見てをるのである。之れは基督教とは全然没交渉にして吾等クリスチャンは晏然として之を對岸の事とすべきであるか。否々斷じて然らず。多くの人々は云ふ「神の國など思ひも寄らぬことである。世界は幾度もく戦亂の巻となつた。人類が努力して建設せる文化と、夫れによつて與へらるゝ幸福とを破壊して了つた。而して今亦未曾有の大亂は歐洲の中原に勃發し、十九世紀以來爛漫たる世界文明の根柢に其大斧を揮ひつゝある。神の國が地上に出現するなど思ひもよらぬ事だ。併し之れが人間の世界である。どうせ人間は動物の少し氣の利いたもので、自己保存のためには他を排しても進み行くものである、正義人道何物ぞ。文明とか平和とか云ふも結局學者宗教

家の空論に過ぎない。斯る人類に高きを望むのが抑も間違つてをる。多くの國と拮抗して國家を樹つる以上、兵備を盛にし武力を以て國威を張るに如くはない。白耳義を見よ、好個の適例ではないか、平和の美名に酔ふなかれ、寧ろ大に武備を嚴にし、一旦事あるの際、悔いなきを期せよ」と、威丈高に人生に就て多寡を括り却つて自ら人生に對し懷疑の念を生じつゝあるものがある。之れ實に人間の中に尊きものあるを見る能はずして、人を動物と見歴史の中に於ける人類進歩の尊き攝理の記録を發見する能はざる凡人の見解であつて、到底人間の高尚なる精神の活動を諒解する能はざる類ひの人々の觀察と云ふ外はない。彼等は曰ふ、之まで基督教は兎に角偉い宗教であると思ふたが、今度の戦亂で基督教の價値も勢力も暴露せられた。もう基督教も先は見えた。之れは獨り教外の人のみならず、教界内の人々でも之れが基督教の致命傷であるかの如く狼狽して、基督教は必ずしも非戦論でない、基督教の中には戦争を肯定する處があるとか何とか云つて、苦しい辯解を試みてをる。然るに神によれる信仰あるものは如何。彼等の衷心には清く尊く明かなるものがあつて、如何なる時にも決して

高明なる理想を忘却しない。信仰なき懷疑者が唯目前の現象を見て神の大道を無視する場合にも、彼等は明かにして權威ある良心の力を以て、現在の事象の中より神の經綸の真相を見出し、遠大なる理想に向つて勇往する。故に其精神は決して迷ふことはない。己が人格を無視して人生を低く見縊ることは出来ない。茲はクリスチャンの最も困難を感じる處で、吾等クリスチャンは外に反對の事實があればあるだけ此の矛盾を感じ、我内なる光明と外の暗黒とに處して斷腸の思ひをなすのである。乍併吾等の衷なる靈は外界の現實と妥協する事は出来ない。吾等は何處までも衷なるものを眞とし之れを立て、行かねば我が良心の満足はない。此我が衷なるものは確かなるものである。目で見るものは迷ふことあれど、心で見るものは間違はない。況んや其清く尊き精神の明鏡は皎として物の真相を看破するのである。此精神は天地宇宙の根本に通へる清き尊き力である、否宇宙の根本の真相である。天地宇宙の根本は健全なるものにして、決して病的なるものでない。故に我衷なる精神も亦決して不健全にして間違つたものではない。茲に於てか此精神を宇宙の根本たる神に通ずるものと信せざるを

得ないのである。吾等の衷には斯の一種強烈なるものがあるのである。此精神の活躍する所、尋常人の観察と正に顛倒したる結果を生ずる。例令ば多くのユダヤ人は基督を罪人として十字架につけたるに、基督の弟子なるユダヤ人は、其罪人と偕なる十字架の死の中に、世界を照す光を見出し、そこに神國建設の發足點を見出したるは、これ此精神の尊き力の働きである。此の精神此信仰に依りて吾等今回の戦亂を見る時、吾等の見る所と世人の夫れとは自から大なる相違あるを見るのである。吾等は此大亂の中にも光明を見て一種の欣びをなすものである。吾等は之を見て決して悲觀しない。又一部の人士の如く懷疑的、絶望的の觀察をすることは出来ない。吾等は實に此戦亂を通して來るべき理想の時代を想見するのである。

其一は獨逸に於ける新氣運の勃興である。獨逸に於ける宗教界の革新は云ふまでもなく彼のルーテルの宗教改革である。彼れの三大論文は今日より之れを見るも誠に彼の卓識を表はすもので、實に二十世紀に於ける近世主義の壘を摩するものである。即ち彼は良心の自由開放を叫び、何人も祭司にして直ちに神に仕ふることが出來ると云

つた。之れは實に偉大なる見識である。乍併勿論時代が時代であるから、之れは全體の人心を支配することは出來なかつた。唯僅に時代の先覺たる人々のみが共鳴したのである。茲は誠に已を得ない處である。故に彼は羅馬教會に反抗して其の羈絆を脱し、永き教權の束縛を解き放つたが、一度自由を得たる教會をして再び獨逸の政府に結びつけ其の桎梏の下においた。之れはルーテルには忍びなかつた處であらうが、時代人心の要求は已を得なかつたのである。斯くして獨逸の國教會成立した。故に獨逸の國教會は實に一面時代の産物にして、當時に於ては之れ以外には行くべき道はなかつたのである。乍併時代は過ぎ去つた。今日まで獨逸國教會の牧師は恰も我國の神職のやうなもので、全く政府の規則法令の下に働いて居るのであるが、今や獨逸に於ても之れでは凡ての人心を満足することは出來なくなつた。宗教は政府の制肘をうけ、其法令の下にありては本來の使命を完うすることが出來るものではない。英國に於ても基督教は皇室と結びて羅馬法皇と戦ひ、遂に改革の實を擧げた。而して彼等は法皇の政治を離れたが、直ちに英國皇帝の配下にありて、皇帝は教會の首たること羅馬教會に

於ける法皇と何の異なる處はなかつた。彼のヘンリー八世の如き、クリスチャンとしては甚だ批難すべき人物であるが、皇帝なるの故を以て之を其首腦と仰いだのは實に英國基督教の恥辱と云ふべきである。乍併英國にては獨逸と異なり國教會から離れて別に自由の天地を開拓したるものが少くない。之即ち自由教會にして彼等は身命を賭して信仰の自由を主張し種々なる迫害に遭ふも屈せずして國家と戦つた。而して其戦ひは實に二百年の間續いたのであるが、遂に其効を奏し今日に於ては國立と民立とは殆んど對等の勢力をなして居る。現に今日の内閣の如きは民立教會の代表的人物、即ち自由黨の内閣で、アスキス宰相の如きは其錚々たるものである。以て其勢力の大なるを知るべきである。米國に於ける基督教の歴史は又實に興味あるものである。彼の英國に於て迫害の激甚なりし際遠くアメリカの新天地に至り、信仰の自由を完うしたいとの一念より故國を去りしビルグム、ファーザーの一群は即ち今日の米國基督教會の祖であつて、基督教は茲に於て眞の自由闊達の天地を見出し、其驥足を伸ぶるに至つた。基督教は米國に於て慥かに一新面目を開いたものと云はねばならぬ。所が獨

逸の如きは基督教徒は殆んど信仰の自由を失つてをるから會堂は巍然として聳え、音樂典禮の美はあれども國民の精神には眞に衷心よりの満足はない。形式は備はり外觀的に宗教は盛大であるが、内容は空虚にして人をして生命の力を感せしめる事は出来ない。伯林の如き日曜日は法律を以て店舗を閉ぢ、皆教會に行くことにはなつて居るが、其實際は甚だ振はない、之れ實に獨逸の缺點であつて、宗教を以て政府の權力の下におきたる結果である。之れは素より心ある宗教家の憂ひつゝある所で、彼等は恰も英國民立教會の當年の意氣と信仰とを以て、此舊來の弊風に反抗せんとしつゝあるのである。然るに之れは今回の大戦亂の後には必ず成就されるに違ひない。現に彼の社會民主黨の中などには宗教上に於ても極力自由思想を高調し、形式を打破して信仰の自由を主張しつゝあるものがある。之れ實に獨逸に於ける宗教信仰の將來を卜すべきもので、今後此一面が喚發して茲に新天新地が現前し來るに違ひない。

次に今回の戦争によりて喚發し來るものは萬國主義である。元來基督教は世界的のものである。世界的ではあるけれど今日の形勢ではどうしても國家に制限されるので

ある。之れは必ずしも悪い事ではない、確かによい一面がある。英國は英國、獨逸は獨逸、佛國は佛國、各々その國家特有の民族精神、國民性情と調和しなければ到底其國民を教化することは出来ない。基督教は個人的の者である、各人個々の性情によりて其思想信仰の内容は違つて來るのである。新約の基督教は其適例で、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、パウロ皆各その人物の異なる如く、その基督教が異なつてをる。然り基督教は個人の性格を破らずして其まゝ之を活かし、之を聖化し、生長發展せしむるのである。その如く各國家に基督教が傳はり行く時も、各々其の國民の精神特性に應じて多少の變化をなすのであるが、同時に其國民の特性を其儘基督教の溶爐中に入れて、其を聖化し向上發達せしめ、其民族性の長所美點を益々發揮するのである。即ち日本に來れば日本人の性格中の尊き處を益々煥發し、英國に入れば英國人の特性を發揮する。之れ基督教の特性である。乍併基督教本來の使命は之れを以て終るのではない。是等は基督教の理想たる神國建設、即ち萬國主義完成の第一歩にして、基督教の事業は懸りて將來にある。此方面は今日までは餘り發揮して居らぬ。今日までの基督教は

其特種の方面即ち各國民の獨特性を發揮するに大なる貢獻をなした。然るに此戦亂は基督教本來の理想たる萬國主義的共通普遍の思想を喚發する一大エポックにして、之れを起點として基督教が大なる轉向をなすは識者の信じて疑はざる所である。顧みれば十九世紀の後半以來此萬國的思想は多少世界の表面に流れ出でないではなかつた。即ち萬國青年會同盟、萬國婦人矯風會、同共勵會等は夫れであつて、是等が彼の民主主義の淵源たる英米教會に於て創設せられたるは注意すべき現象である。然るに今回の大亂は更に百尺竿頭一步を進め、此思潮をして世界の表に旺盛せしむるに至らんとしつゝあるは吾人の快心に堪へざる所である。試に見よ今日英國は何のために戦ひつあるか。英國は獨逸民族を憎み、之を擊破して彼等の死命を制せんとするのであるか、然らず彼等の目的は軍國主義を破るにある。カイゼリズムの粉碎にある。彼等は毫も獨逸人其ものを憎惡し之を不俱戴天の仇とするのでない。不幸にしてカイゼリズム、ミリタリズムと結べる獨逸民族と戈を交ふるのである。故に今日英人は單なる愛國心からのみ起つたのではない。彼等の目的は寧ろ自由のため萬國主義のために戦ひ

つゝあるのである。宰相アスキスは云つた。「吾等の義勇兵は自由の爲めに戦ふ自由の捧物である。」と自由の建設、軍國主義の撃破、之れ實に今回の戦争の目的である。而して所謂カイゼリズム、軍國主義、教權主義は之れ實に基督教の精神に反するもの、自由の建設、民主主義の鼓吹は基督教の極力主張する處である。此自由民主主義は神の國に向つて一步を進むるものである。我國が此自由開放のために起てる英佛と結びたるは實に幸福と云はねばならぬ。

論じ去り論じ來れば大戦の結果は結局世界の精神界に一大變動を來すことは明かである。即ち基督の啓かんとして未だ徹底する能はざりし萬國主義の上に、平時に於て望むべからざる一大進歩を來すは疑ひない。教會二千年の歴史が未だ曾て經驗せざりし大なる經驗を、近き數年の短日月間に經過し、基督教は茲に面目を一新するや疑ひない。舊き教義の宗教は破れ去らん、型に囚へられたる教會の宗教は無力とならん。されど基督の精神は此の新天新地の太陽となり、人類社會はその燦爛たる光耀に照らされたる萬古未聞の新時代は近く吾人の面前に出現せん。此時に於て若しも依然とし

て尙ほ舊衣舊套を被ひ居るものあらば、世にかゝる憐むべき者はない。故に吾人は終りに曰ふ。時は盈てり神の國は近づけり、汝等悔い改めて福音を信せよ。

近代文明の根柢

古語に曰く羅馬は一朝にして成らずと。事の成るは成るの日に成るにあらず必ず由て來る所がある。近代文明も亦然りであつて其淵源や遠く且つ深い。夫れが積り積りて今日に表はれて來たのである。而して其表面に見ゆる燦爛たる光彩は實に唯だ夫れ丈けのものでなく、隠れたる深き宗教的實驗に根柢するものである。即ち人の心の深き宗教經驗を起點として、漸次發展し來りたるものである。人心の衷なる權能が、外部に表はれ來り、爛熳の花を開く、之れ即ち文明である。されば近代文明は深く根柢を有する人類の心花にして、決して外より加へられたるペンキ塗の如きものでない。文明を以て人間社會てふ家屋に外部より塗り立てたるペンキの如く解釋するは眞に皮相淺薄の見である。梅花は吾等に最適切に這般の消息を説明する。人は梅花を見て

雪霜を破つて咲き來るの元氣を賞する。乍併其力は花の咲かざる前に既に充實し蓄積し、夫れが發し來つて百花の魁けとなつて來るのである。此花は外よりの力でない寧ろ内より發する力である。此力は蕾の生ぜざる更に以前より蓄積せられてをつた。夫れが發して蕾となり花となる。近代文明も亦斯の如し、其發生する所は遠く、淺見者の想ひ到らざる源流に遡らざれば之れを知ることは出來ない。夫れは何であらうか、そは多くの人々が宗教的信條としては餘りに古くして現代人には何等の意味なく交渉なきものゝ如く考ふる三位一體の教義である。吾人は此の中に近代文明の一大要素を見出すものである。

三位一體の教義の中に何故に近代文明の根柢ありといふか。此の信條は唯だ神學者の學究的議論にあらず、實に初代基督教徒の血肉であつた。中心生命であつた。彼等は此の信條に生きて居つた。吾等の身體に血あり其血は心臟に源を有するが如く、初代基督教徒の血肉の源たる心臟は三位一體の信仰であつた。而して此信仰の勇者は彼のアタナシウスである。彼は此信仰を以て時の大帝コンスタンチンと戦ひ幾度か流罪

となり追放の身となつた。大帝は大羅馬皇帝たるのみならず基督教を以て國教とせし果斷勇敢なる人で、何人も其威望に伏してをつた。されば多くの監督も皆大帝の肩を持ちて彼に反抗したのである。然るにアタナシウスは何處までも三位一體の信條を我楯として一步も之に譲ることなく毅然として戦つた。此信仰が聊かにても傷かば即ち我生命が傷けらるゝものとなし、大帝に向つて論難攻撃毫も憶する所がなかつた。故に彼は痛く歴代皇帝の嫌ふ所となり、流罪に處せられること實に十回に及んだ。然かも彼は如何なる場合にも此信條を棄てず、忠實に之を擁護し、熱誠を以て反對者を駁撃した。彼は執拗なる迫害をうけ、暗殺さへせられんとした。彼は軀幹矮少、侏儒の如き人であつたが、其顔は天使の如く眼光炯々として人を射るものあり、而して堅忍不拔の精神に燃え、渾身之れ膽なるかの如く、何人も思はず其威容に壓せらるゝのであつた。一日彼がナイル河上の船中にありしとき、彼を暗殺せんとして追従せしもの、其の威風の嚴として犯されざるより、遂に志を果さなかつたとは史家の傳ふるところである。

初代の信徒が忠實に熱誠に其身命を賭して三位一體の信條を維持したる所には深遠なる意味がある。何ぞや、クリスチャンの信仰の内容は豊富にして一言以て云ひ盡されぬが、併しそこには三つの大切なる根本的問題がある。即ち第一は神と天地宇宙との關係にして、第二は神と基督との關係、第三は基督と基督信徒との關係である。此三者は實に大切なる問題であつて、此問題を最もよく解き明かしたるは約翰傳第一章冒頭の言である。太初に道あり、道は神と偕にあり、道は即ち神なり、この道は太初に神と偕にありきと。此れ神と道との關係をいふたものである。萬物は之に由て造らる、造られたるもの一として之に由らで造られしはなしと。是れは道と萬有との關係をいふものである。一體神と萬物との關係は如何と云ふに、基督教の信仰に於ては萬物を以て神とすることを肯じない。多神教に於ては萬物を崇拜し、宇宙に於ける不可思議なる事實を見れば直ちにそこに宮を建て、之を崇拜する。又少しく教育ある人々は森羅萬象を以て切れ〜に一部々々を神として崇拜しないけれども、其の森羅萬象を一體とし、夫れを神視するのである。然るに基督教徒はさうでない。基督教の一面

は猶太教の發展したるものである。猶太教にては神は萬有に超絶し高く萬有の上にあり、此天地は神の前には汚れしもの、皎々たる明月も、燦然たる群星も神の前には穢れてをると見た。基督教はこの神觀を以て満足することは出来ない。基督教徒は此天地宇宙を以て穢れたるものと見ることは出来ない。物質界を以て無明の天地と見ることは出来ない。神は天地の中に在すと見るのである。世界は望みなき無明にあらずして、天地は寧ろ神によりて光明となり、神によりて清淨となると見るものである。神は天地の上であり、天地を貫き、天地の中に見るのが基督教徒の信仰である。此が説明は哲學に由る外なきも、クリスチャンの信仰は哲學者の説明を俟たずして發生したのである。然らば其神が天地宇宙の中に存在し給ふとの確實なる信仰は何に依つて生じ來りしか。夫れはナザレのイエスを信する事によつてある。然るにさうなると茲に基督は果して人であるか、神であるかと云ふ問題が生じて來る。抑も當時の基督教徒の精神状態に分け入つて温めて見ると、彼等は慥かに基督を以て人としてをつた。而して同時に彼等は基督の聲に神の聲を聞き基督の權威に神の權威を見出した。

換言すれば基督は全き人、即ち神の人、否實に神であると信するに至つた。そこで之れが説明は非常に困難になつて来て、一大哲學者にあらざれば之れを解決することは出来なくなつた。乍併其信仰は如何ともすることは出来ぬ。基督を以て人にして神、神にして人なる、神人合體の人格と見ることは最早動かすべからざる確信となつた。基督教徒が基督を信じ、基督を愛することは、同時に神を信じ、神を愛することで、基督に愛せらるゝとは同時に神に愛せらるゝ事である。ナザレのイエスに愛せらるゝにあらず、實に天地の神が我を愛し給ふと見るのである。而して基督の行ひ給ふことは又同時に神自身の業と見るのである。故に基督が「凡て疲れたるもの重荷を負へるものは我に來れ我汝等を休ません」と宣ふや、何人も之を神の聲として、基督の脚下に跪き、基督を我物とする時は、即ち神を我物とせるの自覺に入るのである。而して基督教徒は此境地に入ることを得なければ満足することが出来ないのである。

更に問題を一轉して吾等と基督との關係を稽ふるに、基督程吾等に取りて近きものはなく、又遠いものはない。親子、兄弟、夫婦は尤も吾等に近いものであるが、基督

は更に近く我が衷にあり、我亦彼の中にある。親子夫婦の關係も之に比すれば、親疎の差寔に大なるものがある。之れは初代信徒の具さに實驗せる處のものであつた。而して又他の一面より我と基督との關係を思ひ見るに、基督程吾等に遠きものはない。吾等が基督にまで到達するには容易の業でない。基督は罪なく汚れなき神の愛子、我は罪と汚れに染める人の子である。基督は理想、我は現實、基督は天にあり、我は地上にある。之を仰げばいよゝ高く、之を望めばいよゝ遠い。此のキリストに對する近くして遠く、遠くして近き實驗は一種のバラドックスである。初代基督教徒が命にかけての此の信仰を完うせんと苦心したるは宜なるかな。此生命を獲得して實驗し行く所にクリスチャンの生命がある。三位一體の信條はクリスチャンの信仰を哲學的に表白したるものである。基督と吾々との關係は約翰傳の反覆丁寧に示す所である。彼の葡萄樹の比喩の如きは最も親切なるものにて基督と吾々との一身同體なるを示すものである。基督の物は悉く我もの基督の喜悅、平和、知識、生命、權威悉く我ものとなるのである。吾等は管に知識、平安、喜樂、權威を基督より受くるのみならず、

彼と共に神の右に擧げられ、榮光の座に置かるゝのである。「我居るところに汝等も亦居らしめん」とは即ち夫れであつて、其の光榮は實に何物に比ぶべくもあらぬ。然らば其の基督は如何なるものであるかと云ふに神と一體なる人である。基督の中には道が宿つて居る。その如く凡て基督を信する者の中に基督は宿り給ふのである。さて道と神とは如何といふに、道は神より生るゝものであるといふ。茲は實に意味深い處である。生れたるものは造られたるものと違ふ。道は造られたるにあらず、生れたるものであるといふ。この神と道との關係を論じて一身同體であると観るのが、三位一體論の最も骨折つた所である。

此三位一體の信仰が何故に近代文明の原動力となつたのであらうか。そは個人を獨立せしめ、又その價值を自覺せしむるからである。基督を信するのは苦しき時の神頼みではない。信仰によつて永遠に基督と一體となるのである。而して其基督は又父と一體であるから、基督と一體たるは同時に神人一體の眞理を獲得する所以となる。此宗教的實驗を獲得する時は何人も犯すべからざる權威を自得することが出来る。彼の

大羅馬帝國を支配する權勢赫々たりしコンスタンチン大帝が、一個のアタナシウスを如何ともする能はざりしは、實に彼が此實驗を獲得せるによるもの、其流罪の身となり轆軻落魄前後二十年、毫も素志を枉げざるは亦其信仰が彼の血肉となりしものなるを證明するものである。斯の如く自己の中に權威ある實驗を獲得する時は帝王の權方も之を抑制することは出来ない。之れアタナシウスが大帝の前に立ち諸方の教會が大帝の威壓を怖れ、悉くニカヤの決議を拋棄せし際にも、獨り斷乎として之を死守したる所以にして、「世界は悉くアタナシウスに背けり」てふ諺を見るに至りしは實に至當である。此信仰の權威は何に基くか、云ふまでもなくイエス、キリストである。然らばキリストの權威は何に基くか、即ち神に基くのである。此父なる神と子なるキリストの權威を明確に我衷に自覺する事が三位一體の信仰となる所である。故に三位一體の教義は外ではない。天父を神とし基督を神とし、同時に吾々人間の心に内在する所の靈を神とすると云ふことである。此父と歴史的人物なるキリストと、吾等の中にある靈とは本來一なりてふ自覺は相違の中に一致を確立するものである。初代基督教徒

は人間は汚れたるものであるが、基督教によりて救はれ神とせらるゝものと信じた。乍併茲に注意すべきは此クリスチャンの實驗なるものは吾等が人間として救はるゝのであつて、人間を無くして神となることではないのである。之は基督教の尊き一面である。他の宗教に於ては茲は大なる相違がある、神となり得べくんば人間たることを弊履の如く捨て、神となり佛とならんと願ふのは東洋在來の宗教である。茲には神ありて人はない、人間の價値はゼロである。基督教に於ては斷じて然らず、クリスチャンは人間を犠牲としてまでも神とならんとは願はない。寧ろ人間を犠牲として神となるよりは、此儘に人間として止まるを望む。故に基督教は人間ながらにして神の榮に入るのである。基督は即ち其最も適確なる模範である。彼の人格は河水が大海に流入するやうに無限の神に埋没し、神の中に吞まれたのではない。彼は何處までも人である、一個の人として神と共に有り給ふたのである。神はその神たる所を棄てずして、能く人間となり給ふ如くに、吾々も亦人間たる所を棄てずして神となれるやうになし給ふのである。基督教は斷じて個人を滅さない、夫れを益々活かし清め、高め、飛躍

せしめ、高昇せしむるのである。之れ基督教が在來の諸宗教と其選を異にする處である。此基督教の信仰に來らねば個人の價値は發見されない。個人の價値は孤立することによつて認められぬと同時に、亦没入することにも發揮せられない。個人は國家と結びて初めて其價値を發揮する、然も國家の中に没入するのではない。そのやうに吾々は更に天地の神と結ぶることによりて、眞實に人間の價値を自覺するのである。此神と結びて人たるの價値を自覺せしむるに大なる力となりし思想は、即ち三位一體の信仰である。

近代文明の流が遠く中世紀の文藝復興と宗教改革との深潭に其源を發してをること、今更云ふまでもない。然るに其文藝復興、宗教改革の二大事實の背後には如何なるものが潜んでをるか。其時相を研究する時は複雑多岐にして、茲に之を審かにすることは出来ないが、一言にして之れを盡せば個人價値の自覺に歸すると思ふ。而して此の個人の自覺は即ち教權と因襲とのために永く掩ひ隠されたる人間本來の精神の覺醒であつて、之は決して無より有を生じたるものではない。即ち神と直接なるべき良

心が愕然として醒めて傳襲の壓迫を排撃し、自我の權威を確立したるものである。然して茲に神と基督より直接に我衷に流るゝ靈的生命の本流を見出し一切を收容して人格を形成することを得るのである。自我の覺醒、良心の權威の確立、何れも之れ基督に合體するの意にして、換言すれば初代基督教徒の金科玉條たり生命たり血肉たりし三位一體の信仰である。歐洲近代の文明は此根本源泉に其流を發してをる。此の源泉に想到せず、唯だ皮相の現象を以て文明の真相と觀するものは共に文明史を語るに足らぬ。斯の如き模倣文明は早晚凋落を免れない。大和民族は斷じて斯る淺薄皮相なる文明を以て満足すべきでない。須らく神に根ざせる眞實なる個人の自覺の上に立脚し健闘奮戦以て永遠の過去より永遠の將來に向つて倦み疲れざる、天地の元氣に徹底せる文化を建設すべきである。我民族は倫理的信仰の實驗に根ざせる三位一體主義にその根柢を深うし、萬有と人類と心意とを統一する所の靈能を贏ち得るにあらざれば、斷じて永遠に向つて開展する文明を見ることは出来ない。三位一體の信仰には將來に於て發展すべき新天地が潜んで居るのである。こゝに隠れたる天國の寶が包まれて居

るのである。

人類の新紀元

聖書に曰く道肉體となりて吾儕の間に寄れり。此の短かき一句の中には基督教の一切の眞理が包含せられて居る。此の中には世界か遠き／＼原始より經來りし過去を含み、亦その前途遼遠の將來を孕んで居る。換言すれば茲に過去の世界の理想が完成せられ、以て將來に發展せんとする源泉を成す所のものである。抑も道肉體となりて吾儕の間にやどり給ふ前には、計るべからざる人類の歴史があつた。而して道肉體となりてこゝに人類は一新時機を劃したのである。人類生活の始めは動物のそれと相距ること遠からざる、自からなる生活であつたが、永き星霜の間に宇宙の生命なる道は人類の光となり、茲に人類は自然界の生活を超越して精神生活に入り、更に道肉體となりて人類の間に寄るに至りて茲に新天新地を現出した。その新天新地とは即ち人格の世界である。吾等は「人道」てふ語を聞くのであるが、此の語の如きも、道肉體となる

までは其の意義朦朧たるものであつた。然るに道肉體となつて始めてヒューマニターの意義が明かになつたのである。ヅントの「民族心理學」の終りの章に大要左の如き所論がある。

世界人道のために貢献して其道を開いたものに三つの特筆すべきものがある。第一は世界的帝國の勃興であつて、之れはイエス、キリストの出現以前既にユーフラト河の傍より西亞細亞方面に擴がりしものである。此の世界的帝國とは一個の帝國を云ふのではない。種々なる英雄が代る／＼起つて、大帝國を形造つたのである。而して遂に最も大なる羅馬帝國は出現した。彼等英雄の攻略の方法は何れも亂暴極まるものであつた。何となれば彼等は小なる國家は之れを蹂躪し、小なる民族は之れを征服し、打つて一丸としたからである。斯くして彼等は四隣を併合し、勢力を宇内に張り、其勢望衰ふるや、他の英雄は取つて之れに代つたのである。斯くの如く其方法に於ては甚だ誹議すべきものであれど、然もこの間に人心に「世界」てふ考へを喚び起させたことは記せねばならぬ。彼等は極めて幼稚なるものではあるが、人類は同胞なりとの觀

念を有つに至つたのである。特に彼の大羅馬帝國に統一せられたる歐亞の諸民族は自から人類同胞の世界的思想に入らざるを得なかつた。之れ世界的帝國の人類に對する貢獻である。第二は教育の普及即ち文明の進展である。之れはアレキサンドル大王が希臘帝國を作つたことに起因してをる。彼の事業は其の影響する所眞に廣大にして東は印度より、西は西班牙、葡萄牙に及んだ。史家の研究によれば希臘文明の感化は印度を通して、我が奈良朝の文化にまで及んでをると云ふことである。勿論此の教化主義は羅馬帝國之れを繼紹したのであつて、其影響はアレキサンドル大王以前の世界的帝國の事業よりも廣く且つ深かつたのである。之れは即ち哲學文藝思想の普及によるものであつて、前者を武斷主義の帝國と云ひ得べくんば、後者は文化主義の帝國と云ふべきである。

然るに前二者よりも更に大なる空前の世界的事業が現出した。夫れは即ち基督教である。此の教はナザレのイエスに濫觴し、人間の精神より精神に傳はり、神は天地の主宰にして、人類は同胞なりとの主張を以て現はれて來た。而して初めは羅馬を中心

として四隣に傳播してをつたが、漸次他の國々に及び遂に全世界に廣まるに至つた。而して更に興味ある現象は、世界の國々は滅ぶとも基督の王國は斷じて亡ばないことである。見よ、人をして滅ぶるの日ありやと思はしめたる大羅馬帝國は崩壊し、徒らに龐大なる廢墟に往古の盛時を偲ばしむるのであるが、其中に蕞爾たりし基督教は今尙ほ隆盛を見るのみならず、世界人類を救濟せざれば已まざるの概を示して居るではないか。人類に取りて斯くも大なる貢獻は他にないのであると。

之れ世界に於ける心理學の泰斗ヴント博士が、其科學的見地よりせる研究の斷案である。公平なる學者の立場より見れば茲に歸着せざるを得ないであらう。今日世界の國々を見れば英米、露支の如き、實に多數の人口を有してをる。今其概算を舉げんに英國は四億、米國は一億、露國は一億六千、支那は四億と稱せられて居る。然るに基督教會は六億以上の會員を有する一大團體である。而して此基督教徒の居る處は未開半開の國にあらずして、文化の最も盛なる處である。現代世界を指導し得る本國民の中堅に位して居るのである。人類歴史の支流にもあらず、又曲江にあらず、其の滔々

たる本流に掉しつゝあるのである。クリスチャンの中に指彈すべき人物あるを以て基督教を非難する者があるが、之れ實に皮相の見と云はねばならぬ。日本の人口は六千數百萬である。其中十萬以上は監獄の中に棲息せる劣等なる人間である。其他醜業婦不良少年等を計上すれば劣悪なる數十萬の同胞を見る。然も之れあるがために、直ちに日本帝國はつまりぬ國であると云ふことは出来ない。假令百萬の愚劣なる國民ありとも、他の六千餘萬の國民が優秀ならば、國家の威嚴は容易に毀損せられないのである。基督教會も亦然り、教會の中には有名無實の信徒もあらん。又クリスチャンとして恥づべき行爲をなしたるものもあらん。されど大なる基督教會の尊嚴は之れがために傷けられないのである。若し夫れ等の人々が基督教會を指導し支配することもあらば、夫れは恥づべきことである。恰も監獄に居る人々が總理大臣となり有司百官となりて、國政を掌握すると同様である。彼等は監獄に居る、隔離されたる社會、云はゞ病院に居るのである。故に國民にとりて不名譽でも恥辱でもない。基督教會の彼等劣等なる信者に於けるも亦さうである、彼等は教會より卻けられ、責められてをる。さ

うして彼等自身も亦深く自から恥ぢて、肩身狭く世を送つてをるのである。故に基督教會は彼等ある事によりて毫も其の威嚴を損じないのである。

此の六億の大團體は今日世界人類の生命となり、其數は年々歳々増加しつゝあるのである。然らば此の團體の淵源となりたるイエス、キリストは人類の新紀元とすべきではあるまいか。泰西の史家がイエスの誕辰を以て紀元第一年とし、其以前を算するにも此年を起點として「基督以前」と逆算し行くに一致したるは、眞に宜なりと云ふべきである。然らば此の新紀元は如何にして出現したのであるか。雲の自からにして生ずる如く、風の忽にして起るが如く、自然に現はれ來つたのであるか、さうでない。そこ空前絶後の一大人格が表はれ來つて、其活ける精神の力により人類史上に一新時機を畫した。之れ即ちイエス、キリストである。基督の人格は古往今來多くの學者宗教家が研究しつゝある所である。然も其人格の偉大なる點に至つては、凡ての宗教哲學者を書く人々が之れを承認してをる。ヘフテング、サバチエー其他の宗教哲學者にして、一人たりとも其の人格の偉大なるを論證せぬものはない。眞に驚くべき人格でないか。

されば新紀元とは基督の教訓を云ふにあらずして、キリストの人格其のものを云ふのである。

此偉大なる人格は何に由つて之れを現ふことが出来るか。そは歴史的にその地上に於ける言行録を考察する事であつて、四福音は吾等に基督の人格の高傑偉大なる一面を傳ふるのである。然るに更に一方法がある、夫れは即ち哲學的研究に立脚して思索的に彼の人格の内容を覗ふ事である。曩に讀みたる一句「道肉體となる」とは、即ち吾等に基督の人格の眞面目を傳ふるものであつて、彼の人格の高明なる所以は、實に道が肉體となつて實現したるによるのである。此道は天地創造の以前より存したるもの、天地は之れによりて造られ萬物は茲に胚胎して生じたる清く尊き靈である。此尊貴なる道が基督となつて表はれて來た。之れ即ちヨハネが「道肉體となる」と記せる所以である。實に深遠なる哲學でないか。此中には過去に於てもものされ今日に至るまで著はされたる超絶神教、汎神教、多神教の一切の哲學を包含して居る。茲に「太初に道あり、萬物之れに由りて造らる」とあるは天地出現の前に神あるを肯定するもの

して、即ち超絶神教である。又「道肉體となる」とは汎神教の思想にして、夫れが人の中に宿ると云へる所には、多神教の眞理を包含してをる。實に基督の人格の中には斯くの如く凡ての哲學が成立してをるのであつて、世界の哲學者が精力を傾注して研鑽考究するも猶ほ説明の出来ない神秘が藏せられて居るのである。最初に之れが解釋を試みたるものは希臘哲學の流れを汲めるクレメント、オリゲネス等の學者である。彼等はヨハネ傳のロゴス論を希臘哲學をもつて説明せんと試みた。之れ第二世紀より第五世紀に至る教父神學の骨子をなすものにして、實に尊重すべきものであるが、然も彼等の基督論は十分の解決を見るに至らずして今日に残されてをる。其の他中世、近代、現代に至るまで、イエス、キリストの人格は宗教哲學の當面の研究題目となつて居るのであるが、未だ釋然たる解決を見るに至らないのである。

更に其の倫理的方面を見るに、基督は倫理の究極である。イエス、キリストの人格は無比空前にして、ヨハネが「吾儕其の榮を見るに寔に神の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てり」と云へる如く、實に人類の倫理的理想は基督の中にあるので

ある。基督は云ひ給ふ。「人にせられんと思ふことは人にも亦其の如くせよ」「人の子は人を使ふために來れるにあらず、却つて人に使はれんためなり」「汝等の中大ならんとする者は人の僕となるべし」「人若し罪を悔いて來らば七度を七十倍して之れを赦せ」と。人間の倫理的な生活は之れに盡きてをる。彼は管に之れを口にし給ふのみならず、親から之れを實行し給ひ、遂に之れがために一身を捧げ、十字架の死をさへ辭し給はなかつたのである。更に男女間の倫理は基督によつて徹底的に解決の鍵を見出した。基督の之れに對する教訓は萬世に亙りて動かすべからざる鐵案となつた。一夫一婦主義は基督教獨得のものにあらずして、基督教の傳はる以前、既に獨逸民族の間に存してをつたと云ふ議論は一部學者の唱ふる所であるが、之れは事實に相違なしとするも、必ずしも有力なる根據ではない。若し此説に幾分の眞理を許すならば、そは良種と良田とは相伴はされば立派なる禾穀を生せざる如く、男女關係の腐敗せる處には立派なる倫理道德は成立たぬと云ふ點に於てある。此點より見れば東洋民族、殊に支那の如き風紀の頹廢せる國に於て基督教傳道の困難なるは當然の事である。我國に

於ても最も困難なるは男女の關係であつて、基督教を賛同しながら唯だ此の一點のため之れを信奉する能はざるもの實に枚擧するに遑ないのである。否基督教徒にして教會を離れ去る者の十中の八九までは、茲に弱點を有するのである。此の消息を思ふ時、彼の剛健にして然も嚴格なるゼルマン民族の中に一夫一婦主義が行はれ、それが基督教によつて益々其の特色を發揮したるは實に自からなる道程である。然も獨逸民族と雖も若し基督教の恩恵に浴せず、自然の儘に放任し置くならば、其美風は年と共に頽廢して遂に良俗地を拂ふに至りしことは智者を待たずして知るべきである。見よ獨逸に於て一國の指導者たるべき學者が、一夫一婦主義を打破しつゝあるではないか。獨逸の小説家フライタハは「獨逸に於て最も基督教の行はれざるは貴族階級にして、彼等は一般人民よりも精神的に十世紀程後れて居る」と云つてをる。

斯くの如く獨逸民族のみならず、アングロサクソン民族ラテン民族等をして自然の力に打ち克たしめ、今日の國家的品格を獲得せしは取りも直さず、イエス、キリストの人格の力である。此點より見れば基督教は實に古今に冠絶する一大人格にして、孔子も

釋迦も茲に至れば比儔すべくもあらぬ。吾人は孔子の教が男女道德の上に如何ばかりの感化を與へたるかを云ふことが出来ない。佛教者は釋迦が王位を捨て、妻女を捨てて雪山に入りしことを賞揚し、諸慾斷滅の偉大を説くのであるが、彼が家庭を捨て、之れを取戻し得なかつたことは誠に遺憾であつた。然り破壊に了つて建設を敢てしなかつたのは殘念であつた。基督に至ては此點に於て大に其の趣を異にする。彼は敬虔篤信なるヨセフとマリヤとの間に産れ、其高潔圓滿なる家庭に人となり給ひ、決して家庭を呪ひ給はなかつた。否寧ろ之れを喜び之れを祝福し給ふた。其の婦人觀の如き之れを釋迦のそれと比すれば實に雲泥の相違である。彼のマホメットの如きも時代の要求に應じて起りたる一代の英傑であつた。然るに彼れは一夫多妻主義を實行して、後世に惡影響を與へたのである。基督は「神のそはせ給ふものは人之れを離つべからず」と宣ひ、嚴正なる一夫一婦の精神を明かにし給ふた。此の倫理は基督に依りて初めて闡明せられたるものにして、それが人類生活の上に如何に幸福を齎したるかは茲に呷々するを要しない。之れを要するに亂れたる男女關係の上に、徹底的解決を與へ、

男女問題の解釋に對し新紀元を開きたるは實にイエス、キリストである。

又「道肉體となる」とは肉體の潔めらるゝ事を意味する。舊來の宗教家は肉體を以て不淨なるものとなし、肉體を苦しめ肉體の慾望を撲滅することを以て修養の本旨となした。肉體を虐ぐるは即ち靈的生活を豊富ならしむる所以なりと信じた。佛教の諸慾斷滅は即ちそれである。然るに茲に道は肉體となつた。之れは舊來の學者宗教家の大に解釋に苦しんだ處である。彼等は之れは眞個に道が肉體となつたのではない、唯だ人間の皮を被つたのである。適切に云へば人間に見せかけたのであると思つた。彼の尊い道が此の慾情の充滿せる肉體其儘となる譯はない、唯だ人間の形を取つたのみであると信じた。之れ初代に於ける基督否定論者の主張である。さればこそ道肉體となれるを信せざりしものは基督の敵なりとヨハネは云つてをるのである。此の「道肉體となる」とは豈肉一如を云ふのであつて、道が即ち吾儕に寄りて肉體を聖化するのである。茲に基督教の大なる眞理が秘藏せらるゝ。故に此の道肉體となるは、靈肉一如と云ふよりも、專ら神人合一と云つた方が適切である。基督は「父我に居り、我父

に居る父と我とは一なり」と宣ふた。之れ宗教の極意にあらずして何であらう。吾等の願は神と一になりたいと云ふ一念である。「父と我とは一なり」との境涯に到達することである。然るに道は肉體となつて吾儕の間に寄り給ふた。即ち神は人となり給ふた。之れは何のためであらうか。ヨハネは茲に直ちに其答を示してゐないが、全篇を通讀する時は自から其意味が判然として來る。之れを見てアタネシアス其他の敬虔なる教父達は茲に一句を加へて其の神が人となる目的を示した。曰く「道肉體となりて吾儕の間に寄り。そは我儕を神にせんがためなり」と。然らば人が神となるに於ては、最早神もなく我もなき佛者の所謂涅槃の境に入るのであらうか。クリスチャンの實驗によれば斷じてさうでない。基督を見るに彼はまごふ方なき人である。凡て人たるの資格は之れを完備し給ひ、毫も其人性を捨て給はなかつた。斯くてこそ基督は人にして神、神にして人たる神人一如の姿を顯現し給ふたのである。何と尊いことではないか。斯くの如く人間が神となるは人たるの性格を失ふのではない。神の性格が我に實現せられ、「神我に居り我神に居る、神と我とは一なり」との境に入るのである。

此の神人一體の妙趣は神秘奥妙の一境であつて、言説のよく盡し得る所でないが、基督教が人類の間に勢力を有する所以は實に茲に存すると云ふことを得るである。而して此「道肉體となる」てふ基督教の眞理こそ、今日までの哲學者が畢生の力を盡しても猶之れを究むる能はず、倫理學者が研究に研究を重ねても到達し得ざる所の一大眞理であつて、人類は此の妙趣を味ふて初めて心靈の満足を得るのである。

此の奥妙なる眞理は如何にして之れを體得し得るか。之れは學問研究に依つて達せられる所でない。我が衷にイエス、キリストの如き生命を獲得する事によつて、初めて之れを我物とすることが出来るのである。斯く云へば或人は「基督を神秘の奥殿に閉づる勿れ、彼は神にあらず、八面玲瓏の人なり」と云ふであらう。されど思ひ見よ吾等は我自からをすら十分に了解することは出来ぬではないか。我自から之れ一個の小なる神秘ではないか。ローテは「我は人てふ問題に觸るゝ時、襟を正しうして畏れ戦かざるを得ない」と云つたが寔に至言である。此の神秘靈妙なる基督が此の世に表はれ給ふて哲學、倫理、宗教の上に一新紀元を與へ給ふた。即ち茲に人類生活は一新紀

元を劃せられたのである。基督は一國民一民族のものではない。人類全體のものである。換言すれば吾等個々の所有である。基督に現はれたるものは、其徳も智慧も能力も皆人類全體に頒ち與へらるべきものである。基督宣はく「我は葡萄樹汝等はその枝なり」と。之れ人類の宗教生活の奥義である。此大なる葡萄樹は今日盛に繁茂しつゝある。之れ即ち新人類の發展を意味するものにして、此初代基督教徒の上に與へられし天啓は、今や現代人の間に絶大の權威をしめつゝあるのである。

現下の大戦亂は誠に厭ふべき事なれど、其半面には未曾有の意味が存すると思ふ。今や平和主義を以て國是としつゝある米國までも遂に獨逸と國交を斷絶せざるべからざるに至つた。而して南米の諸邦も亦米國に倣はんとし、支那も亦聯合國に加入せんとするに至つた。茲に世界人類は一致したのである。此一事既に有史以來未曾有の出来事ではないか。而して其一致協力の精神に至つては更に高尚雄大なるものであつて、實に世界人類の恒久的平和のためである。此後に於て何物が現はれて來るか、俄に端睨すると能はざるも、此悲劇の背後には必ずや世界人類が未だ曾て遭遇せざりし新天

新地が現出するであらう。彼の聖セバスチヤンの劇を見れば、全體が殆んど慘憺たる殺戮の悲劇であつて、看客も血に酔ひ目を掩ふ底のものである。然るに其の基督教徒虐殺の大修羅場の後に來る最終の一幕は何ぞ、そは面目全く一變せる新天地にして羅馬皇帝の改宗と基督教を以て國教となすてふ、平和と歡喜とに滿つるものである。恰も其如く今や悲惨なる大活劇は歐洲の海に陸に演せられて居るが、此悲劇の最後の一幕は是迄の世界に現はれざりし新天地が出現するのではなからうか。人類の中にある偉大なる世界的平和の精神が戰亂の終結と共に空前の力を以て勃發し來るではなからうか。基督は彼を信する世界六億の人類に此大精神を與へ給ふた。彼は茲にも亦國際の上に一新紀元を開かんとしてをる。思ふに人類の新紀元を開きたる基督の偉業は現代に至つて愈よ其光輝を發揚し來るであらう。人類は基督を與へられたる事を神に向つて感謝せねばならぬ。

全人創造の起點

使徒パウロは大なるインスピレーションを以て、「凡て基督にあるものは新に造られたるものなり」と云つて居る。彼は自から深い尊い實驗をなした。而して彼のコリントに居る所の多くの人々に向つて其實驗を云ひ表はし、彼等は又た各自の靈的實驗に照し合せて深き共鳴を感じた。パウロは我はヘブル人より生れたるヘブル人なりと云つた位純粹のユダヤ人である。然るに此パウロの實驗を聞きし人々は純然たる希臘人で、嘗に人種を異にするのみならず、歴史を異にし、習慣を異にし教育を異にしてをる。けれども此ヘブル人なるパウロの深い實驗は希臘人が聞いても、之れに共鳴することの出來た所のものである。換言すればユダヤ人も希臘人も超越して高きクリスチヤンの生活に入つた所のものである。猶太人としてのパウロは、コリント人とは遠く隔たつて居つたけれども、根柢深く基督によれる靈の世界に於て彼等と共鳴したのである。神の子として同一人種となつたのである。神の子と云ふ所に其同胞たるを

自覺したのである。此の神の子の性格こそ眞に人たるの圓滿完全なる性格そのものにして、パウロが彼の加拉太人に贈りたる書簡の中に、「基督に入れる者の中にはユダヤ人またギリシヤ人或は奴隷或は自主、或は男或は女の分ちなし、そは皆キリスト、イエスにありて一なればなり」とある。加拉太人は今の佛蘭西人種即ち西歐羅巴から東漸して、遂に亞細亞に地を占めたゴール人であつた。此人種に向つて猶太人と異邦人との別なく男と女との別なく、奴隷と自主との別なく、唯だ其人たる處に着目したるは實に尊い處である。單に民族とし、人種としての表面の姿に拘泥せず、深く根本的精神、即ち内なる人に重きを置いたのは實に尊い實驗である。此内なる人、即ち神の子の自覺は人種民族を超越して、四海同胞の新しき意識に入るものである。此の我が新に造られし所の實驗は聖書の外の部分には之を新生と記してある。新たに生れたる所の神の子は如何なる性格であらうか。神の子には神の種が宿つてをる。さればヨハネも「神の子なりされど未だ表はれず云々」と云つてをる。吾等はまた卵である、種子である。今は表はれないけれども後には表はれると云ふのである。此の神の子は人

間の根本的靈能の眞面目であつて、クリスチャンはその眞面目なる神の子を宿すものである。乍併唯だ其一面にのみ生きて自然の世界には無關係かと云ふにさうでない。パウロがテサロニケ人に送つた書簡に、全靈、全生、全身と云ふ言葉がある。神汝等を全く潔くし、又汝等の全靈、全生、全身を守り云々と、之れは全人と云ふことであつて、全き人間の生活の上には肉體の欲求も心靈の渴仰も同じく是れ價あるものである。之を完うして神の前に穢れなき圓滿なる生活をなすのが即ち全人である。斯る生活を完うせんには自然的生活を卑しめ、心靈的生活に重きを置いてはいけぬ。而かも靈肉を一如として吾と彼とを同一視する譯ではないが、靈を主とし肉を僕とし、以て全人を造り成すのが吾等クリスチャンの希望である。吾等は此の全人になり得る信仰と希望とを以て進みつゝある。

乍併吾々が此全人の理想に達するには前途尙は遼遠にして俄かに之を實現することは出来ない。キリストの性格を讚美してへブル書の記者は云つてをる。「彼は従ふことによりて全くせられたり」と。こは基督が天父の聖旨を奉體し十字架を取り給ふた彼

の絶對的服従の態度を歎稱したる所の言である。吾等は基督の地上に於ける三十餘年の生活を以て既に業に全人として限りなき敬愛を捧げてをる。ヘブル書の記者と雖も之れを敬ひ奉らないのではないが、然もその十字架の死に於て聖旨に任せ給へと祈り給へる所に、全人基督の眞髓を見出したのである。此時キリストは胸裂くるばかりの苦痛を以て神に訴へ給うた、血の汗を流して衷心より神を呼び給ふた。而して遂に我心の儘をなさんとするにあらず聖旨に任せ給へと叫び給ふた。最早そこには慘澹たる死と堪へ難き侮辱とがあるのみである。基督は之れを忍びて神の聖旨に従ひ給ふた。而して其従ふことによりて完うせられたのであると、ヘブル書の著者は見たのである。之れ記者の深奥なる観察と云はねばならぬ。然り基督は柔順なる態度を以て最後まで天父の聖旨を奉體し給ふた。而して其の従ふことによりて全人の性格を完うせられ給ふた。こゝは誠に尊い一面である。若しも此時基督にして苟且にも自からを立て我意のままに進退し給ふたなれば、彼は恐らく易々として此場合を遁れ給ふ道はあつたに違ひない。乍併それでは基督の全人の理想即ち父の全きか如く全からんとの希望は違

せられない、所謂功を一簣に缺く者である。彼は従ふ事によりて全くせられたりとは意義眞に深遠なりと云はざるを得ない。基督が地上に於て如何に全を慕ひ、全に向つて憧憬し、之れが實現のために奮闘努力せられたかと云ふことは、吾等之れを察することが出来る。勿論吾等は基督に不完全ありとは云はない。乍併基督自身は決して完全に出来上つたものとして、自から高くして居り給はなかつた事は明かである。彼れも亦更に高く完きものを贏ち得るために努力し給ふた。或一人の紳士が基督の下に來り「善き師よ」と云つた。之に對し基督は「何ぞ我を善きと云ふや一人の外に善きものはなし、即ち神なり」と誠め給ふた。善とは全と同意義である。如何に彼れが善なる全き神に尊敬を捧げ給ふたか分る。乍併之れは本來不完全なるものが、全きに憶がれたのではない。基督の中には全きに至るの能力が充滿して居つたのである。吾等各自も全人たるべき可能性がある。彼の汝等の父の完き如く汝等も全くすべしとの基督の言は、吾等の衷に全人の理想とそこに到達すべき可能性とを認め給ひしによる。吾等クリスチャンの生活は此全を期して努力する所に存する。而してそこに力を生じ

希望を見出すのである。クリスチャンの深き實驗とは何ぞ、クリスチャンの信仰とは何ぞ、それは即ち全なる神の清き種子が吾等の性格の中に播かれ、根を下ろし、夫れが段々成長するを自覺することである。この尊い全人の種子が萌芽を發したと云ふのが吾等の實驗である。クリスチャンは其力が既に自分の中に宿つたことを知つた。そこで豁然として神を仰ぎ神の如く全くならんと健闘する、この健闘は自から已むに已まれぬ心より敢然として神に向ひ猛進する所のものである。神は吾等に全人たるの種子を降し給ふた。然しながら其の全人の性格は吾等各自が自から努力して完成せねばならぬ。根本の生命は神より授けられたれど、それを完うするには自からの力でやらなければならぬのである。然らば如何にして其全人の理想を完成することが出来るであらうか。夫れは「我は道なり」と宣ひし全人の足跡を辿り行くに如くはない。吾等が基督を尊敬する所以は、基督が地上の他の人類と違ひ、至高至聖至純にして、吾等の近づくべからざる神の子たる所だけにあるのではない。寧ろ吾等が基督の人格を我衷に養成し、之れを實現することに存するのである。切言すれば基督が吾等の衷心にあ

るとの信仰が吾等を勵まし、吾等をして彼れに憧がれしむるのである。

此意味から云へば希臘初代の基督教徒は眞に偉かつた、かの「神人となりて吾等の衷に宿れり」との約翰傳冒頭の一句は、實に萬代の眞理を道破したものであるが、彼等は之れに一句を加へて、「之れ吾等を神とせんがためなり」といつた。是れは眞に意義深き言でこゝに基督教の根本義があるのである、この言は長い間歐米クリスチャンの口から聞かれなかつた。彼等は久しく基督を天上の人として尊崇し、人は土塊の如くにして到底基督の下に近づくとは出来ないものとした、故に基督と吾等人間との間には涉るべからざる溝渠を生じ、全然没交渉となつた。之れ即ち中世基督教の弊である。然るに現代の基督教文學を見れば思ひ切つて基督を吾等の間に立たしめてをる。之れが本當の意味の基督で、吾等の憧がる、全入たる基督神の子にして人の子なる基督である。基督は決して人類と没交渉にして神の右に坐するを欲し給はない。彼は其肉體を人類に與へ給ひしと同時に、其精神的生命を吾等人類に與へ給ふたのである。パウロは「我は我に力を與ふる基督に因て凡ての事を爲し得るなり」と云つた。而して

之れは亦吾等の實驗する所である。約翰傳十五章に於て基督は「今より後われ爾曹を僕と云はず、そは僕は其主のなすことを知らざれば也、我さきに爾曹を友と呼べり、我父より聞きし所の事を悉く爾曹に告げしによる云々」と云ひ給ふた。「父より聞きし所のこと」とは凡ての智識を指す、即ち凡ての智識を悉く人類に與ふるの意に外ならない。其他彼は約翰傳の隨所に於て、我が喜を爾曹に與ふ。我安きを爾曹に與ふ。父のわれに授け給ひし生命を汝等に與ふと宣うてをる。即ち彼れの人格の中に存する凡てのものを惜しみなく人類に與へ給ふのが基督の眞意である。何故に然るか、云ふまでもなく、人間をして悉く己の如くならしむる思召である。全人の域に向上せしむるを欲し給ふのである。「我は葡萄の樹、汝等は其枝なり」と宣ひし眞意以て察すべし。又曰く「我は汝等の爲めに所を備へに行く、もし行きて所を備へば又來りて汝等を受くべし、我居る所に汝等をも居らしめんため也」と。基督は何處に居り給ふや。神の右、榮光の御座に居るとある。そこに吾等人間をも居らしむるためなりと宣ひし基督の眞意は、決して是れ吾等人間と没交渉の境にあるものではない。約翰傳十七章の主

の祈は這般の消息を遺憾なく表はしてをる。其最後の二節に曰く、「父よ汝の我に給ひしもの、我居る所に我と共にありて我榮即ち爾が我に給ひしものを見んことを願ふ」と。之即ち自からと同じ實驗、同じ榮えに人々を入らしめんことを求められし所で、基督の人格の全き姿は其まゝにクリスチャンに授けられ、其尊き榮光の輝きは悉く吾等クリスチャンに與へられんことを欲し給ふたるもの、吾等に王たる基督の榮の中に入るこの出来る希望を持たしめ給ふた所である。之れ實に基督を慕ひ、彼に向つて進み行くクリスチャンの尊き特權であり、恩寵である。

此全人の理想の實現は近き將來ではない。寧ろ前途は遼遠である。乍併遼遠ではあるが、全人の姿は吾等僅かなりと雖も今日之れを實驗しつつある。私は過去二十數年來自分の信仰の中心支點は何ぞと考へた。然るに詮じ來れば我信仰のポイントは意志であること云ふ事に歸着した。神の心をなしたいとの、已むに已まれぬ純然の意志、之れが我信仰の中心支點である。私は茲に神の子の心核があることを信じて疑はない。ハネは「神によりて生れし者は罪を犯すこと能はず」と云つた。私は二十年來此言

を考へたが餘りに聖く純なる言葉で、其真意に徹底しなかつた。夫れが近頃やつと分つた。今日は間違なく「意志」であることが確められた。此意志は神によりて初めて純然の意志となる、此明かなる意志が一度神に向ふ時は再び罪を犯すことはない。自分の意志は神に向つてからは決して外に向つたことはない、不完全ながらも常に神に向つてをる、之れ私の今日ある所以である。茲に至人への出發點が存すると思ふ。クリスチャンも勿論凡ての點に於て至らぬところはある。乍併その神を仰ぎ、神を我物とし我が衷にある善良なる意志を以て基督の理想を實現せんとする已むにやまれぬ心掛は確固として存してをる。之れクリスチャンの特色にして、此善意志は決して神に背かない。即ち罪を犯さない。此意志の力は天地を動かす、何故ならば之れは神と共にあるものだからである。人間には本來として此意志があり、夫れは自から神に向つてをる、恰も卵より孵つた蟻蟻が砂の上に首を出すや、先づ海に向つて面し直ちに匍ひ出して海に進み行くやうに、吾等の衷なる靈的本能は自から神に向て進み行くのである。種々様々の出來事に遭遇して時に其出所進退に迷ふことあるも、然も神に向つて

居る我善良の意志は、直ちに其處置を教へる。之れ實にクリスチャン本來の面目にして、茲に至人となり得べき素質が存する。即ち神の種宿れりと云ふのはこゝである。これがクリスチャンが他と異なる所である。外の點は基督信徒は他に劣る事もやあらん、缺點があるかも知れない。唯だ我々の意志が神に向つてをるか、否か、問題の分るゝ所である。こゝに全人創造の起點を見出すべきである。今や世界は非常な場合に際會してをる。之れには必らず神の聖旨の存すること疑ひない、而してやがて平和克復と共に世界が驚くべき進歩を見るに至らんは、今より想像することが出来る。此來るべき新時代に於て、若しも吾等日本國民の衷に新しき精神生命の煥發するものなくんば、大和民族が新時代の落伍者として葬り去らるゝは火を賭るよりも明かである。全人創造の確信は獨り個人の向上發展を期するためのみならず、國家社會の進歩發達のために、クリスチャンの一身を賭して唱道する所である。

教 權 の 轉 化

吾等の教權は天地を治めし神の中にあり、神が教權を保ち給ふ。乍併其神は吾等し極めて近くして亦甚だ遠い所のものである。神は吾等の肉眼を以て見奉るべき者でない。吾等の肉耳を以て聞くべき者でない。彼は形なく聲なき者である。吾等の靈眼心耳を以て之れを見、其聲を聞くべき靈の神である。故に吾等は此神より直ちに其聖旨を承はる事は困難である。之れ昔祭司豫言者なるものありし所以にして、祭司は神と人との仲保となりて人類の祈求を神に取りなし、豫言者は神の聖旨を人間に傳達するを以て其使命なりと信じてをつた。乍併其豫言者は果して神の意志を人類に告ぐるものとして信頼せられたのであるか。舊約時代のアモス、イザア、エレミヤの如きは一般人士には排斥せられた。換言すれば彼等は神の聖旨を告ぐる眞個の豫言者とは信ぜられず、後世に至つて初めて其豫言者としての眞價が認識せられたのである。故に彼等の言行は舊約聖書の中に編纂せられ、其の一言一句は神の聖旨の傳達として、後世

の人々に襟を正して讀まれたのである。然ども其處に又困難なる問題が生じて来る。成程是等豫言者の書は神の意志には相違ないが、普通一般の凡俗には單純に之を讀んでも、其中に含蓄されたる深き高き眞理は、之れを諒解することは出来ない。少くも之に對しては學者の註釋を要する。茲に於て豫言書は尊いものには違いないが、多くの人々は註釋者によらねばならぬ。従つて彼等は學者の云ふ處を尊重せねばならぬやうになつた。換言すれば本文よりも學者の説明が大切になつた。而して斯くて星霜を重ねるに於ては、其説明も亦説明を要することゝなる。即ち註釋其物が更に註釋せられねばならなくなつた。斯くなれば神の眞意は模糊として被はれ、學者の教説その物が一種の權威を以て人心に臨んで来る。茲に於て教權は神より離れて學者が之れを持つことゝなつた。而して人々は神の聖旨を知る由もなく、唯だ學者の煩瑣なる教説に右往左往して歸趨する所を知らず、懷疑の雲は人生を閉ざすに至つた。之れ即ち基督出世の當時に於ける精神界の形勢であつた。

此時基督はユダヤの一寒村なるナザレに生れ給ふた。彼れの幼少時代の事蹟は茲に

之を説くを要しないが、彼が敬虔なる家庭に人となり人の子として圓滿なる教養を享けられしは明かである。而して長ずるに及んで、其圓滿なる徳性は愈よ完成せられ、其聰明なる直覺力は實に萬古に絶したるものあり、昔の豫言者等が見る能はざりし者を見、聞く能はざりし神の聲を朗かに聞き給ふた。聖書に彼のヨルダンの洗禮を記して、「天開け」と云へるは意味極めて深長である。由來多くの學者は人々の前に天を閉じて居つた。神と人との交通は彼等に由つて閉ざれてをつた。神の光は種々様々の思想によつて掩はれ、聖明爲めに暗く人々は迷霧に閉塞せられた。恰も太陽は赫灼として天上に輝けるも、陰雲空を被ひて天日爲めに暗きと同様である。基督は斯る精神界の混亂の間に處して、神と人との間に被はれたる雲霧を排し、神の聖旨は直ちに基督の心の奥深き處に輝いて來た。聖書に「聖靈鳩の如く降り」とあるは、實によく這般の消息を傳ふるものにして、奇しくも之れを云ひ表はしてをる。而して其聲は曰く「爾は我が愛子、我が喜ぶ所のもの也」と。茲に於て神と人との間に隔てられたる幾層の迷霧は全く除き去られ、基督によりて神は直接に人類の中に降り給ひ、人は彼によつ

てさながらに神に接する事を得るに至つた。教權は神にあり、而して神の聲は人によりて示された。即ち教權は基督の人格に明かに表はれて來た。彼は「我に従へ」と權威を以て宣じ給ふた。また「古の人に告げて斯々とは爾曹が聞きし處なりされど我爾曹に告げん」云々。此の「我」は眞に權威に満てる自覺である。そこに凡ての事が新になつて來た。即ち初めて教權が明かに人格の上に表はれて來た。豫言者も立派なる人物に違ひない。乍併豫言者は時々神に祈り神の聲を聞き神の聖旨を視ふて初めて之を人に傳へた。然るに基督は彼等豫言者の如く、時あつてか神の聲を聞き給ふたのではない。彼の人格其ものが即神の現はれである。故に教權は基督の人格其ものに最も完全に宿つたのである。而して茲に代々の豫言者が想見せし新天新地が啓かれたのである。初代基督信徒が基督を崇拜して神の獨子と見做したのは實に然るべき事である。彼等は何を置いても基督の言、基督の行に思ひをよせ、五人寄り、十人寄り、百人寄れば直ちに基督の言行を回想し、税吏を召し給ふたとか、或は下賤の婦に斯く教へ給ふたとか、種々様々な事蹟を語り合ひ、夫れを以て己が生活の規範とした。是等の話

題を集めたものが即ち福音書であつて、馬太、馬可、路加等の諸書は決して初めから彼等がイエス傳を記さんために筆を取つたものではない。斯く語り合ひ話し合つたものを、後日思ひづる儘に輯録したるものである。故に彼等初代信徒によりては基督の言行、否基督の實生活其ものが何よりの福音であつて、彼等はそれを標準として異端邪教を排し、新しき生活への途を辿つたのである。彼の使徒パウロの如き當時に於ける最も卓越せる學者なりしにも拘らず、我一切の智識を糞土の如くに抛ち、唯だ基督の行ひを我行ひとすを以て唯一の眼目とし、之れを完成せんと努力したのである。

然るに夫れが段々進んで行くと基督を信するものは益々殖えて来る。而して基督信徒の教育は不知不識不完全となつて来る。従つて教會は目に見えざる神基督よりも、目に見ゆる牧師執事が中心となり、夫等の人々の云ふ所命する所は教會の權威となり、自から人心を支配するに至つた。而して此の目に見ゆる教會の權威は教會が段々と成長發達するに従ひ、愈々強大となり、一度祭司、豫言者を離れて、基督の人格の中に認められたる教權は、再び彼を離れて基督教會の牧師とその長老のものとなつた。其

尤も著しき例は羅馬法皇である。法皇は神の代表者、神は法皇を通して其の聖旨を人に傳へる。法皇の言は即ち神の言、法皇の權は即ち神の權であつて、教權は法皇及び監督の上に移つたのである。會て一人の學生が余の下に來つて語つた事がある。曰く我は飽迄も個人主義の信徒である。我は之れを以て満足せんと欲する。然し唯一の要求がある。夫れは即ち我が個人主義に權威を以て裏書をして呉れる或者が欲しいと云ふことである。之れは個人主義の自家撞着である。個人主義は夫れ自身が權威であらねばならぬ。そこには何の裏書をも要しない筈である。然るに尙ほ何物かの裏書を欲するとせば、それは個人主義其ものに缺陷を感ずるからであらう。乍併之れ實に人心の弱點にして何人も我自身を以て満足することは出来ない。必らずや權威ある背景を要求するのである。此力ある裏書を地上に求むれば即ち羅馬法皇であらう。彼等中世の信徒が羅馬法皇に於て無上の權威を見出し、一度法皇によりて許さるゝ時は、即ち神の赦しを受けしものと思ひたるは無理ならぬ次第であつて、法皇の名譽を以て發行する贖罪券が、人の靈魂を救ひ得るものと信じたのは、實に人心の弱點を暴露したる

ものである。

然るに之は基督教の眞面目ではない。一體基督は世界に何を残し給ひしか。彼は言葉を残し給ひたるか、否々若し言葉を残さんとならば、其の説教を筆記させた筈である。然らば行爲か。行ひを残さんとならば自叙傳を書き給ふた筈である。基督には自叙傳なく、説教の筆記なし。之れ孔子其他東洋の賢哲等と異なる處である。然らば彼は果して何を残さんとして彼の如く東奔西馳の活動を爲し給ひしか。夫れは即ち靈を残すためであつた。弟子達の衷心に靈的覺醒を興ふること、之れが基督の努力奮闘し給ふた目的である。されば基督の説き給ふた處は神に關する説教や神學の講義ではない。實に我衷なる精神を其儘に弟子等の胸中に傳へんとする靈動其ものであつた、生命其ものであつた。故に其言語叙説の如きは必ずしも之を顧みるを要しないのである。其芥種の比喩、播種の比喩の如き、如何に彼れが生命其ものを傳達するに適切なる教訓を重んじ給ひしか、察せらるゝ。斯の如く基督は我が衷なる生命そのものを、人々に自得させんために努力し給ふた。彼が聖靈を受けよと宣ひしは即ち夫れである。基

督は弟子達にその聖靈を授けそこに權威あるを示し給ふた。之即ち活ける神より來る靈能である。彼が弟子達に命じて、「異邦人の法廷に立ちて何を云ひ、何を答ふべきかを思ひ煩ふ勿れ、天父の靈、汝等の云ふべきことを示し給へばなり」と誠め給ひしは即ち這間の消息である。此各自の精神の奥深き處に神の靈を宿すこと、夫れが教權を我衷に見出す所以である。此の神の靈に就ては約翰傳第十六章第七節に詳しく示してある。「我真に爾曹に告げん、我往くは爾曹の益なり、若往かすば慰むるもの爾曹に來らじ。若し往かば彼を爾曹に送らん」と。即ち我往かば神の靈が汝等に來る、「彼即ち眞理の靈の來らん時爾曹を導きて凡ての眞理を知らしむべし」と。之れ基督の精神である。彼は永久に遺るべく又發展すべき不滅の靈と、その大望を貽して世を去り給ふたのである。弟子達は一度は失望落膽したけれども、やがて基督の死の意義を覺り、其信仰を復興して基督の遺業を成就せんため蹶起した。彼のペンテコステの日に於ける聖靈の活動は即ち此の衷なる精神の發現其ものである。之れは基督教の根本生命であつて、此精神的賜物に教權が宿つてをるのである。

此我衷なる靈に教權を見出すことは容易なるが如きも困難なることである。故に中世の信徒は此の見えざる我衷なる神の靈に教權を見出す能はずして、却つて金色燦爛たる監督に教權を認め、權威赫々たる羅馬法皇を以て教權の化身と見たのである。然るに此の神の靈を我衷に宿し、大なる力を自覺し、誤られたる教權を回復せんと務めたるは即ち彼の宗教改革者等である。彼のボヘミヤのフス、英のウイクリフ、瑞士のツヅンクリー、獨のルーテル、佛のガルヴキンの如き人々が奮起したのは此教權を自己の中に認め、明確に良心の權威を自覺したからである。我衷に神の靈を宿すことはやがて良心の權威を自覺することとなる。此權威を自覺する時は同時に何物も奪ふべからざる力を獲得する。此靈力を自得したる者には寂寞はない、況んや悲哀はない。世界の凡ての人は我に背くとも、我は晏然として何等の不安を感じないのである。彼のルーテルがオームスの大會議に列する光景は、實に此の教權を自得せし人の雄大なる行動を萬世に示すものにして、彼の前には飛ぶ鳥も落ちんずるチャールス五世を初め、羅馬法皇の大使嚴然として控へ、全歐洲の諸侯は綺羅星の如く左右に居流れてを

つた。彼は其真中に引出され其審判を受けたのである。此時彼の態度は如何。彼は王侯の威光よりも我が衷なる良心の權威を尊重した。故に彼の目には居並ぶ幾十の諸侯監督は恰も土偶の如く見えた。此時ルーテルは毅然として曰く「我良心は神の言に従ふ我は良心に逆つて行動すること能はず」と。かくて彼は此衷心の權威によりて一歩も屈する事なく其主張を貫徹したのである。之れ眞の英雄である。此内心の權威に立脚して世界に大業を成就したる信仰の英雄は擧げて數ふべからず。而して之れは英雄のみでない、苟も我衷に此權威を自覺したるものは老幼男女、學者無學者の別なく、其信仰の理由を開陳するに當り、一度も人の前に不覺を取つたものはない。否實に奴隸すらも立派に之を申立するのである。之れ即ち教權我が衷に宿れば也。此教權は形式にあらず精神である。此教權が人心の本尊となりて吾等を支配するは實に神の恩寵であり、クリスチャンの特權である。此精神を以て聖書を見れば、基督の言行は我心琴に共鳴し肝膽相照すものなるを感するのである。宗教改革者が聖書の權威を復活したのは至當のことである。此教權を獲得する時はそこに信仰の自由を享有することが

出来る。此教權は聖書の文字にあらすして精神である。故に聖書を非難せられたりして何等の痛痒を感じない。基督教に對する嘲罵にも何等の動搖を感じない。教權は我衷にあり神は直接我が良心に宿り給ふて我を支配し、我が良心は不斷神の聲を聞くのである。基督洗禮の時「汝は我愛子也」てふ神の聲はその儘に基督の良心であつた。茲に教權を立する時吾等は最早何物をも要しない。吾等には何の寂寞もなく、何の裏書をも要しない。ナザレのイエス、キリストの實生活其ものが吾等の裏書であり規矩である。基督以後の眞個のクリスチャンは皆此の偉大なる權威を我衷に自覺し、直接に見えざる神に交通して、其間に何等の介在物を許さなかつた。神の意志は直接に我心に傳達せられ、其間に祭司豫言者を要しなかつた。彼等の教權は神と自己とにあつたのである。

乍併此我衷に教權を認むることは決して易々たる事ではない。實に深き實驗の結果である。故に或者は辛うじて其門戸に達してをる。既に堂に入りしものも亦之を仰げば愈高く、之を望めば愈よ深きを感じざるを得ない。されば使徒パウロも「吾儕今鏡

をもて見る如く見る所おぼろなり、されど彼の時には顔をあはせて相見ん」と云つてをる。故に吾等は決して我衷に實驗したりとて、之を以て満足することは出来ない。益々向上努力せねばならぬ。斯くする時は我が實驗は愈よ深くなり、神の力は我が内に充實し、たへず神のこえを聞くことが出来るのである。人生之れに過ぐる何の光榮あらんや。

翻て思ふ、現代の日本國民は何處に其の教權を認識しつゝあるか。神社か佛閣か抑も亦自己内心の權威か。思ふに今日の神官僧侶に尊敬を拂ひ、其聲に教權を認むることとは、心ある國民の肯じない處である。さればとて國民個々が自己の良心に無上の權威を認め、神我が良心ともなりとの大自覺を以て彼のルーテルの如く「我は我が良心に逆つて行ふ能はず、我良心は神の聲なれば也」と、如何なる權力者の前にも毅然として叫び得るか云ふに之れもない。偶々文學者などの中に淺薄陋劣なる個人主義を奉じ、「我は我なり我が欲する處をなす、誰をか意とせん」と、禽獸にも類する行爲をなす者あるのみ。有識の士は神と云へば愚婦、愚夫の事と冷笑し、天を卑しむるは

之れ即ち自己を卑しむる所以なるを知らず、滔々たる天下は土偶木偶に跪拜して、天地の神の聖旨に背き、迷妄終るところを知らない。由來教權を我衷に認め、斷々として神の聖旨を實行する國家民族は勃興し、之れを背馳するものは衰亡す。吾人之れを云ふにあらず、世界の文明史が確實に之を證明するのである。吾人は上下三千載、萬國興亡の跡を温ね來つて、我國民の現狀に想倒する時眞に憂國の涙なきを得ない。吾等は「神よ我が國民に爾の教權を自覺なさせ給へ」と祈るのみである。

國民性の精練

基督の福音ほど個人性を尊重する所のものはない。故に一面より見れば基督教程個人主義を高張した所のものはないと云つてよいのである。基督が初めて世界に現はれし時にも、一人々々を目當てとして道を傳へ給ふた。彼の世界の救主なる基督が、唯一人のサマリヤの婦に向ひ、井戸端にて親しく信仰を談じ給ふた。かくの如く基督は一人々々の靈能の中に尊き光を認め、之れを導きて信仰に入らしめ給ふたのである。

しかも基督の眼中に國民の救主たるの希望が深甚であつた事は間違ひない。彼れが十二人の弟子を作り給ふたのは、即ち國民的傳道を意味するものであつて、十二はイスラエル十二の支派に一人づゝを割當て給ひたるものである。之れ即ち十二の支派なるイスラエル民族全體を救ふの意氣と信仰とを示せるもので、イエスの心中既に神國建設の計畫を藏し給ひ、深き準備を以て起ち給ひしは疑ひない。

乍併基督は個人々々の靈性の發動を無視し、一網打盡的に國民を教化せんとし給ふたのではなかつた。古人が一君を匡しければ萬民治まると云つたやうに、一人の國君を教導して一民族に及ぼんとするが如き態度ではなかつた。實に一人々々を目當てとして然も遂に全民族、全人類に及ぼんとし給ふたのである。基督の先驅者たるバプテスマのヨハネも亦同様であつて、彼は「汝等の先祖にアブラハムありと思ふ勿れ汝等各自悔い改めにかなふ實を結ぶべし」と叫んだ。即ち祖先の功德も他人の犠牲も其の罪を救ふことは出来ない。唯だ獨自一個の決心を以て悔い改めて、神に仕へよと云つたのである。換言すれば個人性を發揮して、それを聖化し向上せしめよと云つたので

ある。基督の提唱し給ふた所も亦之れに外ならなかつた。されば彼に選ばれる十二の弟子も皆其の個人性を遺憾なく發揮してをる。ヤコブ、ヨハネ、ペテロ、バルナバ、パウロ等、如何にその個性の特質を發揮して居つたかは聖書を讀むもの、體得せざるを得ざる所である。然り聖書は實に一面より見る時は、個人獨得の靈的實驗に關する感想を披瀝せるものであつて、就中パウロ書翰の如きは、パウロの個人的特質がさながらに流露してをるのである。此聖書の上に活躍せる個性尊重の思想は、流れ／＼とウイクリッフの精神となり、ハスの血となり、ルーテルの意氣となり、カルヴァンの氣慨となつた。此精神こそは實にプロテスタント教の起原となつたのである。此基督教本來の精神生命たる個性の尊嚴が教權のために壓迫せられたるを見て、之れを其羈絆より解放せんとして奮起せるもの、之れ即ち宗教改革の運動であつて、プロテスタント教は即ち失はれたる個性の回復と云ふも過言でないのである。

斯くの如く基督教は國民の個人性を尊重し、鼓吹して居る。基督教が如何に國民の個人性を發揮し得るものなるかは、歐米諸國の國民性に見れば分る。〔彼等は同人種に

して、共通の歴史を有し、制度文物も亦相似通ふてをるが、然も彼等の國民性を見る時は、佛蘭西は佛蘭西、英吉利は英吉利、獨逸は獨逸各々相異なり、其國民的性質は決して之れを没却してゐない。彼等は其の生活状態を同じくし其の宗教を同じくし、同じ神に禮拜し、同じ救主を崇拜して居るけれど、其の國民的色彩は伊太利人は伊太利人、露西亞人は露西亞人と一見して異なつて居る。茲に基督教が如何に其の國民個有の性情を尊重し、其個人性を發揮し來るものなるかを視はるゝのである。基督教は個人を没して神の中に融合するを以て至上の境涯とし、宗教の妙諦とする東洋的没我的宗教とは、遂に其行途を共にする能はざる所の宗教である。東洋の宗教には神ありて人はない。神佛の前に「我」を立するものあれば之れを外道とし異端とする。故に東洋の宗教は絶體に「我」を没し、神佛のみを立することを以て眼目とする。神の中に没入して我もなければ世もなく、無念無想、萬象一如の感想を把持する人は之れ實に宗教の極致に到達したる人にして、苟も宗教に志するものは此の境地に入らんとして心膽を碎くのである。故に其思想は非人格的にして其態度は出世間的である。彼等の

神は大海原の如きものにして人間は河川の之れに潮する如く有れども無きが如きものである。而して彼等の理想は無限の靈海たる大海原に没入するにあるのである。

基督教は然らず、吾等は神を信じて行けば行く程、明かに自己を意識して來るのである、而して聖なる神の前に我を清め高めて、神と對立せしめんとするのである。人若し其生命を失はば全世界を得るとも益あらんやとは基督の言であるが、之れ實に個人如何に尊きものなるかを示せるものであつて、基督教の信仰に於ては神夫れ自身も人間が自己を没却して顧みざるを善とし給はないとするのである。之れ實に個人の尊貴なる所以である。個人が神の前に永遠に生きるものなりとは基督教神學者の論述して措かざる所であつて、こは單に思想上の論明にあらずして、深くクリスチャンの意識に基因する。吾等は己を捨て、神に従ふと云ふ、之れ慥かに斯教の一面である、乍併此の己とは神の聖旨に應はざる賤しき我であつて、此我は寧ろ個人の發展を妨害し個性の尊嚴を傷くる所のものである。基督教は此賤しき「我」を殺して基督に従へと主張するのである。使徒パウロが「我等日々死につゝあり、見よ我活く」と云つたの

は此消息を語つたものである。又基督は「その生命をすつるものは之れを得、その生命を惜しむものは之れを失ふ」と宣ふた。是等の言は一個のパラドックスなれど、確かにクリスチャンの實驗である。之れは神の中に融け込むにあらずして、神の前に醒むるのである。さればクリスチャンの自覺は神を知ると共に「我」を發見するのである。更に尊き清き「我」が神の前に現はれ來るのである。

翻つて思ふ。我國民性に關する困難なる問題は個人意識の明徹ならざる事である。之れは個人の權威と價值とを認めたるクリスチャンの間にも明瞭になつて居ると云ふ事は出來ないと思ふ。クリスチャンは靈魂は不朽なりと云ふ。神は永遠の存在にして吾等も又永遠に存在すと信ずる。併しながら人間死後の靈は個性を失つて、神の大靈の中に活きるものであるかのやうに信じて居るものが多い。靈魂不滅はかゝる形に於ていあると信じてをる。之れ個人の尊嚴を認むるものとして許すべからざる矛盾であつて、個人の靈は此世に於て神と對立して存在すると同様、永遠に神の前に其個性を失はないのである。クリスチャンの個人に關する意識既に然り、況んや一般人の個人

的意識は迷盲殆んど適歸する所を知らない有様である。基督教は個人を活かすのみならず、其の復生したる個人の靈をさながらにして永生に入らしむるものである。基督教によれば自覺せる個人の意識は永遠に一個の存在として活くるのである。之れ即ち人間の靈魂を以て、死して無限の靈海に没入すべき一滴の水に等しきものであると主張する佛教と其趣きを異にする所である。

基督教の何たるを知らぬ人は、世界同胞主義萬國主義と聞けば、國民性を無視し國民をあげて一種の思想的虛無主義とする者と誤解するのであるが、之れは斯教の眞諦と正反對の見解である。前にも述ぶる如く基督教は個人の覺醒を以て其使命とするが故に、其結果は國民的自覺の喚起となるのである。而して苟も獨得の歴史を有し習慣風俗を有する民族は基督教の感化によつて其國民的特色を發揮し、以て世界の文化に貢獻するに至るのである。云ふまでもなく個人は其儘にては健全無垢なるものではない。個人は生れながらにしては恰も鑽石の如きものである。其中には金銀の尊きを含有せんも、それは精練せられざれば其の光輝と眞價とを發揮し來らないのである。個人

の中には幾多の不純なる分子が含蓄せられてをる。之れを取り去りて其本來の光輝を發する時、個人の尊嚴が認められるのである。基督教に於ては此不純分子を取り去つて、人の人たる眞面目を發揮し來る事を稱して「更生」と云ふのである。使徒ヨハネは「人若し新に生れずんば神國を見る事能はず」と云つた。此更生は恰も鑛金が精練せられて、純金無垢の黄金となると同様であつて、その茲に至るには幾多の坩堝を通過せねばならぬのである。

斯くの如く國民も亦一個の國民的性情を有する。而して夫は永き星霜の間に陶冶せられ、蓄積せられたものであるとは云へ、其の儘にては之れを純全純美のものなりと云ふことは出來ない。個人が更生の實驗をなさざれば、眞個の光輝を發揚せざるが如く、國民も亦更生の經驗なき時は高尚雄大なる國民となることは出來ないのである。勿論個人は時の制限をうけ七十年八十年を以て始終するが、國民の生命はさうでない。故に國民性は個人々々の生命が活躍する時は生長發展し來らざるを得ない。そこで其國民個々が如何に精練せられつゝあるかと云ふ事は直ちに其國民性の消長に關係して

來るのである。此意味に於て今回の歐洲大戰亂は歐洲の國民性を精練しつゝあるものである。就中英佛の國民が大亂の坩堝にて精練されつゝあるは驚くばかりである。佛蘭西に見るに今や彼等の良からざるものは憂ふべきものはふき分けられ、美しきもの尊きものが現はれつゝある。抑も復讐心は人情のやむ可らざるものであつて、殊に民族間に於て然りである。然るに現今の佛蘭西人は復讐心に支配せられて獨逸と戦つてをるかど云ふに決してさうでない。獨逸人は云ふ、佛蘭西人は一八七〇年の戦敗によりアルサス、ローレインを奪はれ幾億の償金を出し、遺恨骨髓に徹して居る。彼等は今や其の會稽の耻辱を雪がため無名の師を起したのであると。一部國民の間にはかかる感想もあつたであらう。乍併、復讐一片の心を以て戦争の出来る時代は最早過ぎ去つて居る、復讐心は國民を根底より動かすことは出来ない。今や佛蘭西をインスパイアするものは復讐心にあらずして實に正義人道の觀念より發せる公義心である。復讐を標榜して誰れか根本的に動いて來やう。正義のため世界の進歩を妨ぐるものを膺懲すると云ふ點に於て、英、佛、露、伊が一致してをる。此の聲には何人も動かざるを

得ないのである。されば聯合軍の起しは復讐の意にあらずして道義の戦を戦はんとして起つたのである。人道の聲にインスパイアされて起つたのである。予が大戦亂が國民性を精練しつゝありとは即ち此點であつて、彼等が日に幾億の軍資を蕩盡し幾萬の人命を犠牲としつゝも尙何等倦怠の色なくして戦ひつゝあるは、道義のためには身を滅ばし家を舉げ國を賭しても更に遺憾なきを示し、人道のためには死を辭せずてふ眞理を確實にしつゝある證據である。佛蘭西の如き曾ては現代獨逸の如く世界の覇を稱し、彼のナポレオン一世の如きは全歐洲を震撼せしめたのであつた。然るに其後彼は年々歳々國運盛ならず、遂には普佛戦争の大敗となり獨逸の莫大なる要求を容れざるを得なかつたのである。爾來佛蘭西は行詰りの状態となり何人も彼を目して凋落に向ひつゝありと見たのである。然るに今回の戦争は佛蘭西をして復活せしめんとしつゝある新生命を産み出さんとしつゝある。之れ實に刮目すべき現象ではなからうか。之れは何に由つて然るかど云ふに、彼等が正義と公道とに覺醒し、人道の大義を擁護するため起つたからである。復讐心は遂に人格を向上せしむるの力とはならない。

佛蘭西が此點に覺醒し復活の戰に熱注しつゝあるは吾人の意を強うする所である。

使徒パウロは復活の義を解いて「壞つるものにて播かれ壞ちざるものにて甦され、尊からざるものにて播かれ、榮あるものにて甦され、弱きものにて播かれ、強きものにて甦され、血氣の體にて播かれ、靈の體にて甦さるゝなり」と云つて居る。然り復活とは低き目標が高くなり、現實主義のものが理想を目掛けて進み、肉の力を頼みし者が靈の力を頼むの生活に飛躍することである。之れは個人に於ても又國民に於ても同様である。殊に國民は此の尊き眞理を體得し、常に舊殻を破り新衣を纏つて前進してやまざる所に、其國民的生命が存するのである。舊態に慣れ過去に戀々たる者は滅亡の第一歩に入れるものである。十八世紀は十九世紀でない、十九世紀と二十世紀とは違ふ。十八世紀に於て奴隸賣買は行はれたが、二十世紀は絶對に行はれない。十八世紀の婦人は奴隸に近い境遇であつたが十九世紀には婦人解放の聲盛にして、二十世紀の婦人は全く面目一新の觀がある。思ふに今回の大戰後に於ける婦人の社會的地位の上進は思ひ半ばに過ぐるものであらう。斯の如く十八世紀に是認せられし事が十

九世紀には害惡として卻けられ、十九世紀に理想として翹望せられしことが二十世紀には實現せらる。聯合國民は軍國主義の如き武力を以て他を壓倒せんとする政策は、畢竟之れ獸的未開的の現象として之れを現代世界より掃蕩し去らんために奮闘しつゝあるのである。吾人も彼等の提唱する如く軍國主義は未開的遺風の繼承せられしものであつて、文明の今日斷じて是認すべきものでないと云ふ事を、世界の國々が覺る時が早晩來るであらうと信ずる。此機運を洞察するの明なく、堅艦利兵を以て世界に覇を稱せんとするものあらば、之れ實に世界の進歩に逆行するものにして即ち正義公道を敵とし、全世界を敵とするものと云ふべきである。聯合諸國が茲に覺醒し、人類進歩のため、世界平和の爲めに、軍國政策の根本的打破の犠牲戦をなしつゝあるは、眞に尊き事と云ふべく、此間に精鍊せらるゝ彼等の國民性や實に光輝燦爛たるものであらうと思ふ。而して獨り英、佛、露の諸國民のみが精鍊せられつゝあるのみならず、實に獨逸民族も亦その精鍊のために苦がき杯を飲みつゝあるものと云はねばならぬ。此時に當り我が國民の状態を見れば眞に遺憾にたへないものがある。我國民は口を開

けば大和魂と云ふ。大和魂とは果して如何なるものか、其内容意義は如何、之れは果して軍人のみが専有すべきものであらうか、此精神は世界の進歩と共に進歩し世界の
大勢と共に向上すべき筈のものでなからうか。今日我國識者の言ふ處を聞けば大和魂
は即ち軍人魂である。彼等は義勇奉公は戦争によらざれば成す能はざるものと心得て
をる。かくの如きは寧ろ獨逸魂ではないか。吾人は信する大和魂は決して一旦緩急あ
る場合のみに止らず、如何なる時にも以て忠君愛國の實を現はし得べき筈のものであ
ると。而して之れは精練せられ陶冶せられて更に高く更に清きものとならねばならぬ
と。換言すれば大和魂も亦、英國魂、米國魂と同じく基督によつて聖化せられねばなら
ぬと。吾人は既に英國人、佛蘭西人が同じ基督を信じながら、其の性情を異にするこ
とを語つた。其の如く日本人も基督を受け容るゝと雖も、日本國民たるの特質を失ふ
ことは有り得ない、然も其大和魂は維新時代に鎖國攘夷も大和魂にして開國進取も大
和魂なりし如く、軍國的國家至上主義より平和的人類同胞主義に變り得るであらう。
然も其の價値に於ては前者よりも後者が尊いのである。之れ即ち基督によつて聖化せ

られ精練せられたる諸國魂の達すべき當然の途である。基督教はその國民性を精練し
陶冶してそが享有せる本來の面目を發揮するもの、基督教を信すれば大和魂がなくな
ると思ふのは大なる謬見である。若し何物かなくなれば夫れは現代文明に害ありて
益なき、當然排除せらるべき不純分子が取り去らるゝのである、之れ即ち吾人が國民
性の精練と稱する所以である。

我國民性の中には幾多除去せらるべき不純なる分子がある。夫等は凡て取除かれね
ばならぬ所のものである。茲に一々枚擧する事は出来ないが、就中男女の關係の如き
は我國が將來世界の文明國と伍して進む上に於て、國民の是非とも改悛せねばならぬ
所の問題である。之れを彼の英國などに比して何たる不始末であるか。彼の國にては
政治家にあれ、實業家にあれ、苟も社會に於て上流の地位を占むるものにして一度其
素行上に落度あらんか、再び社會に出づる事は出来ない。然るに日本の政治家實業家
はどうかであるか、彼等の艶聞は日々新聞紙上を賑はして居るではなからうか。我國民は
此點に於て眞實に反省せねばならぬ。曾てキツチナー元帥が我國に來朝した時我國民

は「元帥は女嫌ひである」と一種皮肉を含んだ言を以て彼を迎へた。然るに彼が今回不慮の災に罹りて死するや、二子に就ける遺産分配の事が報せられた。之れを見て「女嫌ひの元帥にも妻があつた」と我が國民が驚いてをる。思ふに彼は一度妻を失ふや。二度と再び妻を娶るまいと決心したものであらう。彼は最早英國を我が妻と定めて之れを愛し之れがために全心全靈を捧げたのであらう。此デリケートな心事は日本人の諒解するに苦しむ所である。之れを察せずして一片の皮肉を以て彼れを迎ふるは、自己の思想の賤劣なるを示すものである。又彼のフキリブス、ブルツクスは曾て或る婦人に結婚を申込んでねつけられた。此時彼は再び結婚せぬと決心した。男子が結婚を申込んで拒絶せられたとすれば、心あるものが此決心をなす、決して無理ならぬ次第である。之れ實に彼の心の如何に純白なりしかを證するのである。此の一事に吾人はフキリブス、ブルツクスの高潔純雅なる心事を想像することが出来るのである。又先年我國にも來朝したアンドバー神學校教授ブラチナー博士は當時既に五十を越した人であつたが、彼は無妻であつた。其故は「自分には母があつて、何もかもよく出

來る人で、萬事よく世話をしてくれるから、帯妻はしなかつた」と云ふ事であつた。實に美くしい話ではないか。其心事の純美なる真に羨しいではないか。又彼の英國の大相宰ピットも生涯無妻であつたが、彼は何故に妻帯しなかつたのであるか、之れにも何物か世人の知らざるデリケートな問題があるかも知れない。然し予の聞く處にして謬りなくんば、彼はかのナポレオン戰爭中、英國を脊負ふて立ち、一死以て國家の安危に任じたので、遂に妻帯の時機を失つたのであつた。而して彼は四十七歳を以て死するまで大英國に一身を捧げた。即ち彼は英國に選ばれたのでなく、彼自から英國を選んで之れを其生涯を借にしたのである。

我日本には古來幾多の英雄豪傑があつた。然るに彼等の中一人にても大日本帝國に一身を捧げ、之れ我妻なり我母なりとして、其全心全靈を國家民族に捧げたものがあるか。彼等は一方に國家を愛しながら、他の一方には放肆遊蕩止る所を知らなかつたではないか。而して曰く「英雄豪傑は酒色を好む」と。之れを歐米の國士に比すれば實に雪と炭との相違である、之れ我國民性である。之れは基督教によりて清くせられ

高くせらるべき所のものであらう。又我國の文學は何たる醜體であるか、奈良平安朝の昔より徳川の近代に至るまで、我國の文學藝術は廉潔なる人士の見るにたへぬものではなからうか。若し之れを泰西傑作の如く世界の文字に翻譯して出すとせば、英米人は眉を擡めて、日本人の今日ある故あるかなと云ふであらう。加之現代の文學も亦平安朝文學の同工異曲である。今日の文學雜誌に現はるゝ小説に一家團欒して讀むにたゆるものが幾何あるか。其藝術は如何と云ふに之れ亦繰り返しに過ぎぬ。彼の年々文展に表はるゝ繪畫は何たる柔弱ぞ。其題材、其構想吾等は實にその淫靡なるものゝ多きを見て嘔吐を催さざるを得ない。もし是等文學藝術に我國民性が發露せりとせば、吾人は我國民のために浩歎せざるを得ない。併し之れは確かに國民性の一原素をなし居る。之れはまさに我國民が脱却せねばならぬ一面である、精練せられねばならぬ一面である。其他日本人の鎖國的喧嘩腰的精神の如き、或は又唯我獨尊的精神の如き従つて之れより生ずる偏狹なる國家的精神の如き、之れを取り除かねばならぬ所のものである。精練せられねばならぬ所のものである。

斯くして精練せられたる大和魂は抑も如何なるものであらうか。日本人には義氣もあり人情もある。我國武士の精神には他國に見られぬものがあつた。其廉潔の精神も之れを物質文明の跳梁せる今日高調すべき所のものである。是等が神の靈によりて聖化せられ、基督の精神によつて啓發せらるゝ時は、眞に尊きものとなる。又武士道には武士の涙即ち同情の精神がある。此同情心は即ち愛の表現であつて美しいものであるが、此の愛は神の愛によつて更に徹底しなければ、本來の面目を發揮することは出来ない。斯くの如く我國民性は基督教によりて精練せられて、初めて之れを世界に誇ることが出来るのである。今日のまゝにして世界の文明國と伍せんとせば、其經濟力に於て如何に増大せるも其武備に於て誇るに足るものもあるも、其狀恰も成金や力士が紳士の席に坐すると一般、遂に自から肩身狭く感せざるを得ないのである。然るに我國民が基督教によりて靈化せられ精練せらるゝならば、其品性や純美、其の心事や高潔、其の思想や高遠にして、各國は進んでわれと提携し、共に世界の文運に貢獻せんことを欲するであらう。

今や歐洲各國は莫大なる物資と、悲痛なる犠牲とを拂つて、苦がき試験を受けつゝあるのである。吾等は我が國民をしてかゝる悲惨なる境遇に入れしめず、現在のまゝにて國民性を精練し、其の向上聖化を圖らねばならぬ。即ち國民をして吾等の信する神を信せしめ基督の恩化を蒙らしめねばならぬ。基督教が國民精神の向上進歩の上に偉大なる力あるを知らしめ、之れを取つて我ものとなさしめねばならぬ。茲に我國に於ける基督教の使命が存するのである。

國民靈覺の時機

かの播種の比喩には二の要素がある一は種子にして一は地味である。地味如何に善良なるも種子悪ければ善き收穫を望むことは出来ない。其反對に種子如何に善良なるも地味悪ければ亦善き收穫を得ることは出来ない。此二者は兩々相伴はなければならぬ。然るに種子は極めて精撰されたものであるから、茲には唯地味の種類を批判してある。この比喩は實に平易にして其意義は極めて深長である。第一は道傍であつて

土が踏み固められ、根を下ろすことが出来ない。人心には斯くの如きものがある。世の辛慘を嘗め人生の表裏に通じ或は百家の學を修め、餘りに知り過ぎて却つて懷疑に陥つてをる頑迷固陋の人がある。斯る人は道路の固き土の如く、福音の種子のはいりやうがない。第二は磽地である。肥土淺くして地味瘦せ潤ひ少なき土地である。故に播かれたる種子、直ちに生え出づるも、暫くにして枯槁する。人心にも亦此種のものがある。之れは案外感激して道を聞く、然も之れ根柢なき一種の附和雷同に過ぎざるを以て、少しく患難に會ひ不利益と見れば又直ちに之を抛棄して顧みないのである。第三は荆棘の畑である。之れは前者と異なり地味肥沃なるも、耕耘その宜しきを得ざるを以て、雜草生ひ茂がり善き種は棘のために覆はれて生長を遂げ得ないのである。此棘の繁茂する土地は之れを人に譬ふれば天品豊かなる人にて、技倆もあれば才能もある。斯る人に限り野心多く慾情深く虚榮心熾んである。乍併野心の大なるは決して悪い事ではない。若し之れと戦ひ之を聖化すれば偉大なる人物となる事が出来る。されど又其儘に生長せしむる時は野心慾情は往々にして人生を誤るのである。「人心惟

れ危く道心惟れ微也」とは斯る境地にある人々の修養の危殆を道破したものである。最後に沃地とは以上の反對によく開拓行き届き耕耘の十分なる所にして、即ち基督教には接せざるも、儒教或は佛教等によりて、真面目に心田の開拓をなし、何事に限らず、参考となるものは之を攝取し、大に修養を試みたる人物である。斯る精神状態にあるものが基督教を聞く時、彼等は心中深く共鳴を感じるのみならず、大に啓發せらるゝ所あり、豁然として明悟し、こゝに福音の根本真理が其良心に根を深くし、遂に三十倍、六十倍の實を結ぶに至るのである。

次に基督は燈火の比喻を以て、明徹なるべき人の理性を、私心私慾の樹の下に掩ひかくすの愚を誠しめ給ふた。人間は其衷なる理性の光を以て内觀し、又外部を照破してその真面目を發揮せねばならぬ。理性の如きは人の内部に潜めるものなれど、遂に外に發揮し來らねばならぬ筈のものである。夫れを種々様々の物慾のために掩ひ隠すべからず。之を適所に持ち來つて適用せざれば、其本來の光明も暗くなつてしまふのである。基督は以上の教訓を示して、耳ありて聽ゆるものは聽くべしといひ、心田開

拓、理性發揮の責任を専ら人々の努力に歸し給ふた。更に言を加へて「爾曹が度る所の量をもて爾曹も度らるべし、聽きたる爾曹には猶ほ加へられん。夫れ有てるものは猶ほ與へられ、有たぬものは有てるものをも取り去らるゝ也」と、心靈上の問題を経済界の法則に依て大に人心の覺醒を警告し給ふた。基督教は人々の靈的覺醒を促す所の宗教である。

今回の戦亂は有史以來の大史實にして、世界人類は震駭せられつゝあるが、同様に日本國民も之れがために大に覺醒の警鐘を亂打せられつゝある。新聞雜誌は其の評論に日も惟れ足らず、世の識者先覺と云はるゝ人々も口に筆に之れを論じ、自からを醒し世を警しめつゝある。曩日も大學構内山上御殿に於て、學者教育家、宗教家等各方面を代表せる數十の名士の會合が行はれたが、それは戦後に於ける國民教育に關する懇談會で、何れも大戦亂後に於ける日本國民の覺悟に就いて意見を披瀝し誠に有益なる集會であつた。斯く諸方面を代表せる識者の意見なれば、其内容は種々雜多にして茲に一言にて概括することは出来ないが、兎にも角にも我國民が各々其立場よりして、

何等かの意見を以て覺醒の聲を擧げつゝあることは掩ふべからざる事實である。予は大戦勃發以來歐米人の思潮の傾向に深き注意を拂つてをるのであるが、彼の國に於ても素より其覺醒の着眼は一樣ではない。乍併寔に日本人の議論と違ふ。彼等は靈的に覺醒しつゝある、然るに我國識者の覺醒は大に其趣きを異にする。先づ我國に於ける人々の論ずる所を見れば、或は宜しく獨逸に倣ひ軍國主義を以てすべし、海軍の擴張二師團の増設は如何なる犠牲を以てするも之を辭すべからずといひ、或は實業を盛にし世界に顧客を作るべしといひ、或は開戦以來我國が最も打撃を受けしは藥品染料其他工藝品の缺乏である。之れ我國科學の進歩せざるためである、故に盛に科學の發達を促し後日事あるの際に斯ることなきを期せねばならぬと云ふのである。又學者先輩の中には、青年學生が忠君愛國の觀念の薄弱なるは西洋文明の影響を受けし結果である、故に科學的教育の發達を圖るは可なりと雖も同時に國民固有道德の鼓吹をなさざるべからずと唱ふるものがある。然らば靈性上宗教上の覺醒は如何と云ふに、日獨開戦の當時政府は各地方長官に命じて、國民に戰勝祈禱を爲さしめたるが、之は偶々迷

信の媒介獎勵となつて、彼の歐米に於ける靈覺の夫れに比して雲泥の相違を生じたるは浩歎の至である。古人曰はく、小人は利に悟り君子は義に悟ると。之れは人間平素の心懸けによるものにして、常に道義的修養に志すものは其悟る所も道義的ならざるを得ない。それに反し常に利益を念とする小人は其悟る所も亦利益の外はない。同じものを見ても其悟るところは霄壤の差を生ずるのである。之れは即ち平素の精神状態に起因するものであつて、如何なる場合に遭遇するも、人は平素の環境を全然超越して悟りを開くことは出来ない。

今回の大戦亂に於て我國民が果して那邊に覺醒し來るか、物質主義か心靈主義か、權謀術數か正義公道か。之れ實に吾人の注意すべき事柄であつて、之れが去就選擇は我國運の將來を卜すべき重大なる問題である。我國人の明治初年以來心懸けし所は物質的方面である。茲は封建時代とは大に趣を異にしてをる、所謂明治つ子は物質的思想の子にして彼等は凡ての考へを物質に運んで行く。故に今回の大戦亂に際しても其覺醒する所は概ね物質的にして、或は増師問題を高調し或は殖産興業を絶叫し、或は

化學工藝を鼓吹するのである。詮する所世界文明の一大轉機に際會せる重大なる場合に於ても、何等永遠の大局に着目するところなく、唯だ明治時代のものを其の儘に踏襲し、更に大きくやれと云ふに過ぎないのである。之れ日本國民の覺醒の聲である。されば彼等は依然として唯物主義、軍國主義の舊夢より醒めず、今日こそ日本が東洋に覇たるの地位を確立する秋なり、歐洲諸國は戰亂のために奔走困憊して東洋の事に關與するの邊はない。今にして領土を擴大し勢力を張らざれば何れの日か圖南の策を成さんと、所謂火事場泥棒的の言論を敢てし、國民を煽動するものすらある。吾人は斯る聲に興國の大策を見出すことは出來ない。何となれば之れ實に世界の大勢に逆行する亡國的政策であるからである。然して偶々精神的覺醒を云ふものなきにあらざるも、それは寧ろ不健全なる迷信的宗教の獎勵にして、加持祈禱の如き魔術的宗教の跋扈を招くものに外ならぬ。見よ彼等が祈禱と稱し誓願と稱するものは一種の魔法に外ならぬではないか。彼等は人力を以て天地の理法を動かさんとしてをる。神を以て己が私心私慾を満足するの手先に使はんとしてをる。之れ魔法にあらずんば即ち兒戯であ

る。神の宇宙經綸の大法は人力の如何ともすべからざる所のものである。吾人如何に熱誠を以て祈求するとも天地の公道神の理法を變更することは出來ない。人の祈禱により神の宇宙經綸の大法を動かし得ると思ふのは大なる謬見である。祈禱は我衷なる邪曲の心を直して、神の正義と合體せしめ、我衷なる野心を清めて、神の宇宙經綸の大目的に合一せしめんとする人間の心靈的努力其ものである。個人的國家的、民族的なる主我的慾求を聖化し、之を以て神の宇宙を經營し給ふ大意志に沿はしむる人間の心靈的活動其ものである。之れ即ちクリスチャンの祈禱である。基督の祈を見よ。「天に在す我儕の父よ、願はくば聖名を崇めさせ給へ、爾國を臨らせ給へ、爾心の天になる如く父にもなさせ給へ、吾儕の日用の糧を今日も與へ給へ、吾儕に負債あるものを我が許す如く吾儕の負債をも許し給へ、吾儕を試に遇はせず惡より救ひ出し給へ、國と力と榮とは窮なく爾の有なればなりアーメン」。何處に私心私情ありや。心を虚くして神の公道を重んじ、神國の實現に參與せんとする熱誠なる希望の溢るゝを見るではないか。我良心を愈よ明かにし神の尊嚴なる意志に向つて向上せんとすの切實なる祈求

が進つて居るではないか。斯る高遠にして眞摯なる祈禱が我國在來の宗教の何處に見出すことが出来るであらうか。彼等は自己の信する神社佛閣に頼づきて我儘勝手なる要求をなし、若し夫れを聞かれざる時は之を唾棄して顧みないではないか。吾人は我國在來の宗教に眞正なる宗教的情操を見出すことが出来ない。

今回の戦争に當り交戦國各自が各々神の前に自國の勝利を祈るを視て、識者の間にすら、敵味方が同じ唯一の神に戦勝を祈るは滑稽である、神も其の去就に迷ふであらうと嘲罵を試みるものがあるが、之れは思はざるも亦甚だしきものである。然り彼等は天地の主宰なる唯一の神に祈つてをる。乍併彼等の祈禱は神を以て我意に従はしめんとする利己的迷信的のものではない。況んや神の公道を無視せる我慾的魔法的の祈禱ではない。彼等は公明にして敬虔なる態度を以て天地の神の前に跪き、其審判を仰いでをる。獨逸は獨逸としての立場より、自己の正理を信するが故に、神の前に何等次しき考へはない。聯合軍亦然りである。さればこそ彼等は國土人命を賭して力戦しつゝあるのではなからうか。故に獨逸が戦敗者の地位に立ちたりとて、其神に對する信

仰を失墜するものではない。彼は必ず自己の意志が神の宇宙經綸の大意志と矛盾せるものなりしことを悟り、度みて自己の過失を謝するに至るであらう。斷じて神の公明なる審判に對して不平を云ふことはない。基督教の見なりよりすれば我は正義也我に勝利を與へ給へと祈つて、神彼に勝利を與へ給はざりしは祈の聽かれなかつたのではない。負くるも亦其祈りは聽かれたのである。基督は身を以て明かに其然る所以を示し給ふて居る。「父よ此の杯を我より取り去り給へ、されど我心のまゝを成さんとあらず聖旨に任せ給へ」と。然も神は彼に苦き杯を與へ給ふた。之れ實にクリスチャンの祈りである。負けたればとてそが神の意志には合はず天地の公義正道に合致せざるに於ては、クリスチャンは快よく神の審判に服してアーメンと云ひ得るものである。こゝがクリスチャンの祈禱の根本義である。之れは日本人の最も諒解に苦しむ點であつて、我國民は宗教の眞義を知らないと云ふ過言でない。

東洋に於ける在來の祈禱は此點に至ると、殆んど陋劣にして語るに堪へない。彼等は私心私慾を恥づる處なくさらけ出して、我祈求の如くならざればそは自からの罪に